

---

# IS(インフィニットストラトス) 返り血の眼帯

キャップびちゃ男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

# 【小説タイトル】 インフィニットストラトス IS 戻り血の眼帯

[π-ΠΖ]

N  
7  
9  
6  
2  
S

【作者名】

## キヤツプびちや男

【めいじ】

俺の人生は狂いに狂つていてもう狂いようが無いほどだったが、さらに狂つてしまつた俺の人生。いきなり育て親からISの適性度が良いと言われIS学園に強制入学させられことになつたのだが・

## オリキャラ設定

四死神 血殺

世界で一人目の男のI.S操縦者であり、千冬と同レベルの力をもつ。常にヘッドホンしているが、音漏れを防ぐため音量を低くしている。紺色の髪は地毛だがいつも染めていると間違われている。右目に赤い眼帯をしている。

## 専用機

青竜…砲撃を得意としたI.Sで中長距離の武器が多い。待機時は小指にはめるリングになる。

朱雀…8枚の翼で超高速で動く、翼はピットにもなる。待機時は薬指にはめるリングになる。

白虎…近接戦闘を得意とした武器を所有している。待機時は中指にはめるリングになる。

玄武…防御を特化したI.Sで武器によつては攻撃を跳ね返し相手への攻撃となる。待機時は人差し指にはめるリングになる。

黄竜…青竜、朱雀、白虎、玄武の全ての武器を使えるが、展開して

いる時はシールドエネルギーを常に消費する。  
めるリングになる。

待機時は親指には

## 設定（後書き）

設定的に有り得ないですよね。

（笑）

## 初対面（前書き）

本編にはまだ入っていません。

## 初対面

4月、とうとうやってきてしまった入学式。

束「行つてらっしゃい、ちーくんだったら大丈ブイブイ」

俺の気持ちも知らないでそんな言葉をいつのは篠ノ介 束。EISの  
生みの親だ

血殺「じゃあ、束さん行つてきます。ついたらメールしますね」

束「あつ、黄竜はまだ使わないでね」

黄竜なんて一度と使いたくないよ

血殺「わかりました」

場所が変わつてEIS学園

血殺「結構早く着いたなあ

現在の時刻は八時丁度。かなり時間が余つてゐる

？？「お前か？ 四死神血殺は」

やつてきたのは見覚えをない女性だ。しかし、かなり綺麗

血殺「はい、そうですが……あなたは？」

千冬「私は織斑 千冬と申す。束から聞いていただろ？」

こいつが織斑千冬。

俺の大切な人を奪つた人間

血殺「名前だけですけどね」

平常心で答えた

千冬「お前にはいろいろと聞きたいが、まずは場所を変えよう」

場所が変わつて1-1

千冬「まず、お前は何者だ？」

おつづ。そこからかよ

血殺「俺は束さんの義理の家族です」

まあ、束さんの友人なら別に良いか

千冬「どうこう事だ?」

まったく内容を掘めてない様子

血殺「束さんは俺の育て親です。まあ、3、4年ぐらい前に拾われたんですけど」

千冬「一応聞くが、お前の家ぞ「家族の事は聞かないで下さい。」

いきなり怒る俺に驚く千冬

血殺「すいません。でも、それだけは聞かないで下さい。あなたも自分の家族のことを根掘葉掘訊かれたくないでしょ?」

俺は冷たい声で言った。有り得ないほど冷たい声で

千冬「こちらもすまなかつた。話はここまでにしよう。お前はこのままここにいる」

血殺「わかりました」

千冬「では、また会おう」

この時俺は気付いた。やつが担任の教師だといつこと。

TO束さん

織斑千冬と話しました。やはり、憎いです

from 束さん

あつ、ちーちやんと話したんだ。まあ、頑張って  
はあ、自分は何もしてないと思ってるのか？ このバカは  
血殺「俺はあんたも憎いんだよ。篠ノ之束」

## 初対面（後書き）

本文にもあつたように、千冬と血殺は初対面です。  
血殺の過去は今後の話に入れるつもりです。

次回は、本編へ突入します。

## クラスで一人以外全員女子（前書き）

この話から本編です。  
ほとんど変わります。  
ご了承お願いします

## クラスで一人以外全員女子

現在 8 時 30

その時、ドアが開いた。入つて来たのは、ちつこいくせに大人の格好をしている人だつた。見た感じ『無理やり子供が大人の真似をしました』つて感じだ。

？？「皆さんこんにちは、私は副担任の山田真耶です。一年間よろしくお願ひします」

誰もしゃべらないのか、誰かしゃべってやれよ。

真耶「で、では、出席番号順に自己紹介をしてください」

あ～かつたるい、寝よ。

千冬「おい四死神、起きろ」

千冬に呼ばれて田が覚めた。

血殺「・・・眠」

千冬「とつとと起きんか！」

刹那、出席名簿が振り下ろされた。

血殺「ふーん、良い振りだ。だけば、遅いね」

千冬「何？」

クラス中が静まり返った。なぜなら俺が出席名簿を弾いたため

血殺「まつ、いつか」

俺は席を立ち上がる

血殺「俺の名は四死神血殺。趣味はない。特技は読心術です。終わります」

千冬「まあ、いいか」

軽く呆れられている。まあ、仕方ないか

千冬「まあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからEISの基礎知識を半月で覚えてもらいつ。その後実習だが、基本動作を半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

「それ、もはや命令じやん！ まあ

千冬「それと、四死神」

血殺「はい、なんですか？」

俺には関係ないんだよなあ。

千冬「お前はほとんど授業を受けるな。わかつたな」  
血殺「わかりました。授業中は寝てます」

しつかし、暇になつちまうな。先生、いじれないし

千冬「それと先生はいじるなよ」

血殺「わ、わかつてますよ」

千冬「ふん、ならいい」

な、なんて読心術なんだ。

1、2時間田まじめじます。『』承下れ。

千冬「おい、四死神起きろ」

なんとも田覚めの悪い時計だ。

血殺「りよ、了解」

ヤバい。疲れが溜まつてゐる。

千冬「返事は《はい》だ。わかつたな」  
血殺「はい、わかりました」

重そうに俺は体を起き上げた。

千冬「今からクラス代表を決める。自薦他薦は問わない。選ばれた  
ら一年間はそいつがクラス代表となる」

おうおう、面倒くさそうだな。

女子A「織斑君を推薦しまーす」

女子C「私もそれがいいと思いまーす」

一夏「お、俺？」

まあ、俺からしたら誰でもいいや。

一夏「じゃあ、俺は四死神 血殺を推薦します」

俺に振つてきたか！なに、「やつたぜ」みたいな顔してんだよ！  
ポケンゲットだせ！か！？てめえは！  
まあ

血殺「・・・別にいいですけど、バックアップとして誰か使える人  
がいるとうれし「なつとくいきませんわ」

誰だ？ 今さあ、俺が話してたのにさ

セシリア「このイギリス代表候補生のセシリア・オルコットに一年  
間のような屈辱を味わえというのですか！？」

話を遮ったのは、金髪のロールがかかった少女。かなり高貴なオーラがある

セシリア「だいたい男がクラス代表なんていい恥さらしですわ」

「んだと！？」

血殺「代表候補生」ときでいきがるなよ！」

セシリアは俺をギロツと睨めつけてきた

セシリア「あなた何様なんですかー！」

いやいや、お前こそ何様だよー！

一夏「なあ血殺、代表候補生ってなんだ？」

とこりうどひから椅子からずつこける音が鳴り響く。

セシリア「あなた。そんなことも知らないですかー？」

血殺「いいか織斑、代表候補生っていうのは、漢字そのままの意味だ。まあ、簡単に言つとHリートだ」

本当に、織斑の頭の中はだめだな。Hリートって言つて、やつと納得してゐるし

セシリア「そう、Hリートなのですわ。だから後進的な国の猿と一緒にされたく、ありませんわ」

猿ねえ

血殺「話を戻すが、自分が何者なんて言わないぜ。言つ奴は馬鹿なんだよ。特にお前みたいな奴」

セシリ亞「・・・・・」

セシリ亞は何も言わない。怒りを溜めているのだろうか？  
けつこう、顔は引きつっているし、たぶんそうだろう

一夏「そういうえば、文化で後進的って言つたけど、イギリスは飯が  
後進的で不味いものばっかじゃねーか」

セシリ亞のでここに血管浮いてる。そろそろヤバい頃だらう。だが、

血殺「織斑とかぶるけど、文化が後進的？その文化が後進的な國の  
兵器に勝てなかつた國はなんなんだ？  
あつ、わかつた。屍か！考えられない。ただのタンパク質の塊か！」

痛ぶるぜ。

セシリ亞「あ、あなた達、私の祖国を侮辱しますの？」

セシリ亞はバンツーと机を叩く。  
痛くはないのだろうか？

セシリ亞「決闘ですわ」

一夏「いいぜ、四の五の言つより話が早い。」「血殺もそれでいい  
よな？」

血殺「別に構わない。それから、やるんだつたら今日やれり」

今の言葉のどこが面白かったのだろうか？

セシリアは笑つてゐる。

セシリア「ふつ、何を言つてますの？それとも寝ぼけてるのかしら？」  
「Sが無ければ戦えませんことよ。そんな事も知らないのかしら？」  
「まあ、わたくしはあなたと違つて代表候補生なので、専用機はもう持つてますけどね」

なるほど、セシリアは俺が専用機を持っていないと思つたのか

血殺「ああ、言つてなかつたな。俺も専用機を持つてゐるから大丈夫だ」

女子B「なんで、四死神君が専用機をもつてゐるの？」

血殺「話すと長くなるから言わない」

女子「「「え～」」」

女子たちの五月蠅い声が教室中に響き渡る。  
正直に言つといふつく

千冬「うるさいこ。しかし、話は纏まつたな。四死神とオルコットは、今日空いてゐる第3アリーナを使え」「次の織斑とオルコットは再来週の月曜日、同じく第3アリーナでいいな」

おつと、大切な事を忘れてた

血殺「ハンデはどのくらいにしておく？」

セシリア「あら、いきなりお願ひかしら？」

セシリ亞は勝ち誇った顔をする。なぜだらつたまつ、いつこいつの先生でしょ

血殺「織斑先生、どのくらいがいいでしょうか?」

千冬「2分でいいんじゃないかな?」

血殺「わかりました」

俺は再びセシリ亞の方へ向き直る

血殺「じゃあ2分、2分でお前を倒したら俺の勝ち、守りきつたらお前の勝ちで」

わざわざまでの顔がウソのような顔をセシリ亞はし始めた

セシリ亞「馬鹿にしてますのー?」

血殺「あたり前だろ。じゃなきや、こんな事言わない

セシリ亞「わかりましたわ。コトンパンにしておあげますわ」

完膚無きまでに呑きのめす。セシリ亞はそんな顔をしていた

俺は授業中に教室を退室した。

屋上

？？「あの女との試合、私に殺らして」

血殺「無理を言つな白虎」

白虎「なんで、ああいう女嫌いなの、だから殺らして」

なんでこんなに怒つてんだ？ 白虎の野郎は

血殺「今日は朱雀で出る。いいな、朱雀」

朱雀「わかつたわ」

？？「また、朱雀なの？ たまには、めに殺らして」

？？「あつ、僕も殺りたい」

おいおい、戦るのやの字が違つぞ！

血殺「お前らもわがまま言つな、青龍に玄武。それに、俺は人を殺めるつもりはない」

青龍「わかつた。でも、次出る時はめだからね」

玄武「その時は僕と白虎も出るから」

血殺「わかつた。それでいいなみんな」

朱雀「わかつたわ」

白虎「仕方ないわね」

青龍「了解」

玄武「早めにお願い」

四人がしぶしぶ了承してくれた。  
かなり珍しいけど

血殺「それから朱雀、暴走だけはするなよ」

朱雀「保証は出来ないわ。けど、出来るだけ抑えるから」

血殺「わかった。じゃあ、コントラクトを終了す

腹減つたな。飯食いに行こ

## 食堂

血殺「あれ？ 織斑じやん」

もう昼食の時間だったのか。

一夏「よし、血殺！ お前も飯か？」

血殺「ああ、織斑もか？」

一夏「織斑じやあなくて一夏つて読んでくれ」

血殺「確かに織斑先生とかぶるもんな」

一夏「だから、大抵の友達はみんな一夏つていうんだ」

血殺「じゃあ、一夏」「前の人誰?」

前方にムスッとした。ポニー・テールの似合つた女子がいた。

一夏「あー、コイツ?」「名前は「篠ノ之 篦だ。よろしく」

一夏の声を遮りてしゃべったよ。」の女

血殺「篠ノ之ことは篠さんの妹だよね」

篠「・・・」

篠は束と言つと黙り込んでしまつた

地雷踏んだ?

一夏「篠の前で束さんの話は控えた方がいい。殺されるぞ」

姉妹の仲悪いんだ。俺達みたい・・・

その後、俺たちは飯を食い。一夏、篠は教室へ行き、俺はまた屋上へ向かい時間を潰していた。

血殺「そろそろ4時だな。さて行くか、朱雀」

朱雀「わかつたわ。私はあなたのためにあるのだから」

血殺「朱雀展開！」

俺は朱色の光に包まれる

血殺「やつぱり、朱雀が一番ピンと来るな」

朱雀展開時のフレームは朱色で、8つの翼はビットになり1つにつ  
き10のビットがでる。翼はビット以外に、剣になりハ刀流になる

血殺「じゃあ行くか」

### 第三アリーナ

セシリ亞「遅かったですわね。逃げ出したのかと思いましたわ

血殺「まだ、五分前だる。馬鹿だろ！お前やつぱり馬鹿だろ！」

俺がわざわざイラつくようになら案の定、セシリ亞はイラついた

セシリ亞「わたくしを侮辱しましたわね！許しませんわ！」

千冬「それでは、今より試合を始めるカウントダウンを開始する

1 2 3 4 5 6 7 8

千冬「それでは、試合開始！」

## クラスで一人以外全員女子（後書き）

感想など、書いていただけるとうれしいです。

## クラス代表決定戦（前書き）

結構雑なのにまあまあですね。

## クラス代表決定戦

千冬「試合開始！」

開始直後、セシリアの銃『スター・ライトmk?』からビームが走る。その後はセシリアの銃の連射によつて防戦一方のまま、一分がたつた。

仕込みは完了した。あとは、打つだけ

血殺「ふう、疲れた」

セシリア「あら、もう終わりですか？あんなに大口を叩いておいて」

勝ち誇った顔をするセシリア。

血殺「ああ、終わりだ。・・・お前の敗北でな！」

血殺「飛べ、”レッドライズ”」

刹那、セシリアへ四方八方からビットが出現しビームが発射された。

セシリア「なんですか？？」

ビームの嵐から逃れようとするセシリア。が、

血殺「これで終わりだ」

八刀流 参の舞 鬼殺死

ある剣術でセシリアを襲う

千冬「勝者！四死神 血殺！」

血殺「あーあ、疲れた。帰つて寝よ」

セシリ亞「待ちなさい」

気にくわない顔をしているセシリ亞に俺は呼び止められる

血殺「ん？なんだ？」

セシリ亞「あなた。さつきの剣術なんですかー？」

セシリ亞はかなり興味深そうに聞いてきた

血殺「あー、”鬼殺死”『おごいりし』ね。八刀流の時のみ出来る  
技で俺の間合いに入つたものをハつ裂きにする技だ」

セシリ亞「しかし、あなた達を認めた訳ではありませんわ」

随分嫌われたものだな

血殺「そうかい。別に俺は気にしてない」

帰ろうとした時だった。

「……なつ！こんな時にい

暴走の前触れだ。

セシリ亞「どうしましたのー？」

セシリ亞は俺に駆け寄ってきた。

血殺「殺す。あんたを殺す！」

俺じやない俺は今までの面影が無い声でセシリ亞に言つた。

セシリ亞「あなた誰ですかー？」

朱雀「私は朱雀よ。よろしくね。まあ、自己紹介しても意味ないけどね。どうせ死ぬのだから！」

セシリ亞「なつ、朱雀って確かあの男の工の名前ですかねー！」

朱雀は不吉な笑い声をした後に答えた。

朱雀「そうよ、私は彼の工よ」

セシリ亞「では、なぜあなたがその体の中にいるのですか？」

朱雀「あんたに教える義理はないわ。さよなら！」

朱雀は剣を構えた。

セシリ亞は目を瞑つた。

朱雀がセシリ亞を殺さうとした瞬間、朱雀は地面に崩れた

朱雀「ああああああー！」

セシリ亞「????？」

朱雀は頭を抑え始めた。

朱雀「ごめんなさい。ごめんなさい。血殺、かつてな」としてごめんなさい

朱雀は数分もがき、動かなくなつた。  
そして、起き上がつた。

セシリ亞「朱雀さん、大丈夫ですか？」

血殺「俺だ。血殺の方だ。悪かったなオルコット」

セシリ亞「いえ、大丈夫ですわ」

血殺「じゃあ、俺は辞退してくるか。またなオルコット」

俺は手を振りながら第三アリーナを出ていく。

廊下

血殺『朱雀。お前わざとやつただろー。』

俺は軽くキレ気味だ。

理由は簡単だ。まだ、その時ではないからだ

朱雀『ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい』

血殺『わかった。もう謝るな』

正直、呆れているからどうでも良い

白虎『血殺つて、朱雀に甘過ぎだよ』

血殺『話しあは、後で聞くから黙つていろ』

数十分

血殺「あつ、いたいた。山田先生」

真耶「どうしたの?、四死神君」

血殺「俺、クラス代表辞退するつて織斑先生に言つておいて下さい。  
あと、俺の部屋どこですか!?」

真耶「わかりました。それと部屋は1024です」

血殺「どうも。それじゃあ、さよなら」

早歩きでその場を去る

血殺「えつと。1024は・・・ここか!」

血殺「結構広いって当たり前か、見た感じ2人部屋だし」

だけど、部屋には誰もいないからたぶん一人だろ?。  
まあ、好都合だからいいや

血殺「じゃあ、出すぞ」

白虎「はーい」

朱雀「うん」

青龍「了解」

玄武「早くして~」

俺のISは、大切な人の魂が入っているためISを元に実体化する  
事ができる

白虎「ふはっ。あー、窮屈だつた」

朱雀「汗かいだ。シャワー浴びたい」

青龍「め、お腹空いた」

玄武「眠い」

血殺「あんなあ、お前ら服着ろ」

ISだから、もちろん全裸だ。

白虎「持つてない」

朱雀「なんで？」

青龍「だるい」

玄武「めんどい」

血殺「まつ、いつか。どのみち授業受けないし」「今日は寝よ。お  
前らはその辺で寝てうよ」

そういうって、俺は眠りにつく。

## クラス代表決定戦（後書き）

今回の話を見て気付いたかもしませんが、白虎、朱雀、青龍、玄武は全員女設定です。話しがめちゃくちゃですいません。

過去編 ～永遠に～（前書き）

血殺がI-Uを手に入れる過去話です。

なぜいつもたのだらつ

びつて、間違つてしまつたのだらつ

こんなの、俺は求めていないのに

何もわからない。答えが出ない

あいつのせいだ。あいつが全ての元凶だ

殺したい。殺したい。殺したい

でも、殺せない

なぜかつて？それは・・・

1ヶ月前

血殺「やつべえ。遅刻する。来さんなんで起じしてられないんだよ  
！」

束「ちーくん、やうやう血分で起きよ！」

8：30分までに登校なのだが、現在、8：20分なのだ

血殺「遅刻するからもう där」

束「行ってらっしゃーい」

血殺「行ってきまーす」

急がねーとな

学校

血殺「はあ、はあ、間に合つたあ」

全力前進して頑張つて間に合つた感じだ。

俺が学校に着くなり、二人の女子がやつてきた。

？？「おはよう。血殺」

？？「おはよー」

血殺「チース、華音に花蓮」

俺の数少ない友達のロングヘヤーの神崎華音にロングヘヤーに一つの触角がある神崎花蓮だ。

二人は一卵性の双子だから、見分け方が難しい

華音「また寝坊したの？馬鹿だねー血殺は」

血殺「うつせーよ、華音」

ちなみに

華音「何？あんたハツ裂きにされたいの？私の白虎に」

二人とも専用機持ちだ。

花蓮「おねーちゃん。止めてよ、そういうの」

華音「わかつたわよ。あんたの彼氏は殺さないであげる」

花蓮「おねーちゃん。私の朱雀に串刺ししたい！？」

花蓮はジヨークが効かない。だから、勘違いが多い。

華音の方はけっこうテキトーだからクラスではお馬鹿キャラ。

血殺「おいお前ら、先生に怒られても知らねーぞ」

一人のおふざけが気になつてか。もう一人が近づいて來た

？？「2人とも、喧嘩止めなよ」

？？「大丈夫よ。いつもの事でしょ」

血殺「よう、千鶴に有華。お前ら何時も一緒にいるな」

みんな  
ちかひる  
ふじさわ ゆか  
魅永千鶴と藤澤有華だ。

千鶴はショートヘヤーが主だが、たまに髪を伸ばしてゐる時もある

有華はボーネールだけど、全部を結んではない

千鶴「まあね」

有華「えつ、そつかな？」

俺の連んでるいつものメンバーが全員揃うと

先生「そこの5人とつと座れ！」

血殺、花蓮、華音、千鶴、有華「はーい」「はーい」「はーい」「はーい」

必ず先生に怒られる

放課後

血殺「あー、やつと終わったー」

俺はいつものように花蓮と帰つてゐる

花蓮「ねー血殺、今日暇?/?」

血殺「ああ、暇だけど」

いつもと違うのは、千鶴と有華がいるところことだ

花蓮「じゃあ、家に来ない？技を見て欲しいんだ」

血殺「ああ、良いぜ」

花蓮は近接戦闘を好んでやるから、たまに技を見てやることがある

千鶴「ねー花蓮、私も行っていい？」

有華「あっ、私も行きたい」

花蓮「いいよ。2人がいれば訓練も出来るしね」

千鶴と有華も一応、専用機持ちなんだが、使つてるとひまあまり見たことがない

俺達はまだ気付かなかつた。これがみんなを殺すことになるなんて

## 花蓮の家

華音「あら花蓮、珍しいわね。あんたがここに来るなんて」  
そこには、白虎を展開した華音がいた

花蓮「別にいいでしょ。おねーちゃんには関係ない」

華音「どうせ、血殺が来てるんでしょ」

血殺「よくわかったな、華音」

華音のやつ、けつこう白虎が板についてきたな

千鶴「本当だよね」

有華「当たり前でしょ。だつて華音は「有華、千鶴。あんた達のこ  
とも言つわよ」

なんで、華音のやつ怒つてんだ?

花蓮「そんなことより早くやる。けつこう4人いるしタッグでいい  
でしょ?」

千鶴「じゃあ、私と有華対華音と花蓮で」

有華「わかった」

そういうて有華は玄武、千鶴は青龍、花蓮は朱雀を展開した。

華音「じゃあ、始めよ」

血殺「俺、その辺見てていい?」

花蓮「別にいいわよ」

血殺「じゃあ、後で結果教えてくれ」

花蓮達4人は親が小さい頃に亡くなっている。それに、花蓮と華音の両親は大富豪だかなんだか

そのせいか4人でいること方が多い

血殺「！！ なんだ？あれ？」

IISだよな？でも男には使えないって束さんが言つてたな

血殺「・・・触つても大丈夫だよな」

そこには黄色のIISがあった。俺はそれに触つた瞬間、俺は黄色い光に包まれた

血殺「！！ うあーーー！」

花蓮、華音、千鶴、有華「！！」

そこには、黄色のIISを展開した俺がいた。

華音「なんで、血殺が黄竜を動かしてんの？」

花蓮「血殺。ねえ血殺。返事をして血殺」

おそらく氣を失っている。と思つた千鶴たち

千鶴「ダメみたいね。」

有華「私達で止めましょ」

華音「じゃあ、行くわよーー！」

四機が一気に黄色いエスに突っ込む

血殺「何が起きたんだ？なんでみんなが」

俺の眼に移ったのは、体が真っ赤に染まり、まったく動かなくなつた華音たち。

華音「ち……血殺……直つた……みたい……ね」

途切れ途切れで話しつけてくる華音。

血殺「華音！お前大丈夫なのか？ 今すぐ救急車を！」

俺は携帯を取り出しだが、華音が首を振つて「止めて」と田代訴えている

華音「もつ……私達は死ぬ……だから……これだけは……聞い……て……欲しい」

千鶴「血殺……私……達は……あなたの……ことが……好きだつた」

えつー？

有華「でも……花蓮……とあなたを見て……たらそんなこと言え……なかつた」

華音「だから……お願……いがある……の」

血殺「千鶴！有華！」

俺の目から大量の涙が溢れ出た

華音「だから……私……達の……ISを……血殺……が……使って欲し……い」

血殺「華音、お前らしくない」と言つなよ！」

花蓮「お……願い……私達……のお願……いを聞い……てくれな……

……い？」

血殺「わかつた」

血殺はすぐに束に電話した

束「ちーくん。どうしたの？」

血殺「今言つ所にすぐ来てください」

束「うん…いいよー」

早く来てくれよー

束「どうしたの？ちーくん」

束さんがやつてきた。と血殺が降つて来た

血殺「俺、IS動かしちゃったんです。だからこの4つのISを俺だけが使えるようにしてください」

束「うん。いいよー。じゃあ、少しあつち行つてて」

束さん、驚かないんだな。もしかして・・・・まさか

数分が経つた

束「ちーぐん。終わつたよーおまけ付けて置いたから

血殺「・・・おまけってなんですか？」

俺は不思議そうに聞いた

束「ひ・み・つ」

ふざけた返事が返つてきた

血殺「束さん。一つ聞いていいですか？」

束「何かな？」

俺は恐る恐る聞いた

血殺「あのI-Sを俺にも使えるようにしましたよね？」

束「・・・うん、私が仕込んで置いた」

やつぱり。やつぱりあなたか！！

血殺「何故、何故そんなことしたんですか！」

束「・・・」

血殺「答えりよー篠ノ之束！」

激怒した。初めて束さんに激怒した

束「ちーぐんがちゃんとI-Sを使えるかどうか知りたかったの」

ちや ちやん と?

血殺「ちやんと?ちやんと?せひつこう」とだ!?

束「ちーくんは前にエスを使つちやつたことがあるの、でも、まだその頃は幼かつたから完璧には無理だったんだけど、今だったら使えるかなって思つてね」

血殺「そんな、そんなことの為に・・・」

俺は地面に崩れ落ちた。しかし

束さんは腰に手をあて、笑つている

ふざけやがつて!

束「そんなこととは失礼だなあ。私にどうては大切なことなんだよ?」

血殺「もういい。あんたがビッグいう奴だかわかつた

こいつを殺したい! 絶対に殺す!

束「私が嫌ならここに行きなよ」

血殺「あんたの指図は受けない!」

束「そつかあ、残念だなあ。ちーくんが殺したいと思う人がいるのに

血殺「何!?

俺が殺したい相手、織斑千冬

束「別に私には関係ないからいいんだけど。どうする?」

血殺「くつ、わかつた行こう。」

束「じゃあせりへ」だけビ、俺のことは公表しないでくれ

「」で公表させられたら最悪だからな

束「ちーくんのお願いだから聞いてあげよ」

血殺「ありがとうございます」

束「じゃあせりへ、入学手続きしておくれ」

血殺「はい、わかりました」

俺はその後、死体を処理して家に帰った。

その後、俺は自分に誓つた。黄竜は一度と使わないと

## 過去編 ～永遠に～（後書き）

いかがだったでしょうか？

これで四死神 血殺のISの過去編は終わりです。  
次回からまた本編へ戻ります。

## 転校生は元クラスメート！？ + 秘密の仕事（前書き）

1話から語彙が少なくてひどいだったので、ここを改めて書いてますが、今後もむりやへりやで通じます。

## 転校生は元クラスメート！？ + 秘密の仕事

俺にてとれども思ひどがある。

血殺「はあ、また長く寝過ぎた。まあいいや、たまには授業受けナよ」

教室

一夏「よつ、血殺。久しぶりだなあ」

血殺「今までずっと寝てたからな」

一夏「ずっとか！？ すげーな」

一度ピッククリしてすぐに顔が直る一夏。

一夏は面白く性格をしているな

血殺「まあな」

一夏「そういうえば、今日転校生が来るらしいぜ」

血殺「ふえー。どんな奴なんだ？？」

少し気になつた。転校してくるのは女子とわかつてこないの

一夏「代表候補生らしいぜ」

平然と言つ

血殺「ふうん。まつ頑張れ、お前ならたぶん大丈夫なはずだ。今の  
とこ1組と4組しか専用機持ちはないからな」

「？」「その情報、古いよ」

声の持ち主は俺に言つたのだろう。

つーか、この声は確か

？？「2組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そつ簡単には優  
勝出来ないから」

一夏「鈴？お前、鈴か？」

あ～、そうだ。鳳鈴音だ

鈴「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。ファン・リンイン。今日は宣戦布告に来たつて  
わけ」

一夏「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

鈴は腰に手をあて、かなり気取つている

鈴「んなつ！？なんてこと言つのよ、あんたはー。」

血殺「久しぶりだな。鈴」

鈴「血殺！なんであんたがこいついるのよー。」

喜びの顔から一転、見たくない物を見た顔をしている

血殺「動かせるからに決まつてんだろ」

一夏「お前ら、知り合いなのか？」

一夏が不意に聞いてきた。

血殺「知り合いなんて温いね」

鈴「あたしと血殺は腐れ縁よ」

一夏「腐れ縁！？」

予想外の回答に少し驚いた様子

血殺「俺らはやる事成す事全てかみ合わなかつたんだ」

鈴「しかも、小1年から小4の終わりまで同じクラスで席が隣になつた回数実に18回！もう、最悪だつたわよ」

鈴は両手を挙げ、首を振りお手上げポーズをとる。

全然可愛くない

血殺「まつたくだ！」

？？「おい」

鈴「何よ！？」

バシンッ！

そこには、出席簿を持つた千冬が立っていた。

千冬「もうSHRの時間だ。教室に戻れ

鈴「ち、千冬さん・・・」

鈴の顔が引きつっている

千冬「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪

魔だ」

鈴「す、すみません・・・」

見た感じ、織斑先生の」と苦手だな

鈴「またあとで来るからねー逃げないでよ、一夏ー。」

千冬「かわせと戻れ」

鈴「は、はいっ」

ゴキブリのよつこひをクラスへ帰る鈴

血殺「やつと授業終わつたぜ」「  
一夏「血殺はずつと寝てただろ」「  
一夏はハアとため息をつく

血殺「そんな事より早く飯食いに行こうぜ」「

一夏「ああ、そうだな。篠、セシリ亞飯食いに行こうぜ」「  
篠「ま、まあお前がそう言つなら、いいだろ」

セシリ亞「そ、そうですね。行つて差し上げないことはなくつて  
よ」

どつちなんだ?

一夏達と他に数名のクラスメートを連れて、ぞろぞろと学食に向かつた。移動中に俺は簫とセシリアにこんなことを聞いていた。

血殺「簫とセシリアって一夏のこと好きなのか？」

簫「な、何を言っているのだ！」

セシリア「そうですね。何を言っているのかしら」

一人はかなり動搖している。

まつ、隠しても無駄なんだけどね

血殺「ふうん。そつかそつか、2人は一夏のことが好きか～。」

簫「おい、四死神！」

セシリア「四死神さん！」

照れ隠しなのか、よくわからないが、一人とも確かなのは顔が真つ赤だ。

てか

血殺「名前で呼んでくれ四死神は偽名だからな。おつ、着いたぜ」

鈴「待つてたわよ。一夏」

着くなり鈴が仁王立ちしている

一夏「まあ、とりあえずぞいでくれ。食券出せないし、通行の邪魔だぞ」

鈴「う、うるさいわね。わかってるわよ」

鈴が手で持っているお盆の上でラーメンが鎮座している。

# 血殺一夏「」のびぬけ「」

鈴一ううるさいわね。あんた達は！わかるてるわよ。

一夏と俺はとりあえず食券をおばちゃんに渡す。

一夏「それにしても久しぶりだな、丸一年ぶりになるのか。元気してたか？」

「夏、「おひるね」だよ、わづや」

困つたご様子だ

血殺「そういえば鈴、なんで急に転校して来たんだ？」

## 言葉を詰まらせる鉛

# 血殺「？？？・・・！」

まさか、鈴も一夏のことか！？

第「あー、ゴホンゴホン」

わざとらしく咳払いをする筈に続いてセシリ亞が言った

セシリア「ンンンン…！ 夏さん？ 血殺さん？ 注文の品、出来てまし  
てよ？」

## 品物を貰つ一夏と俺

一 夏「向ひつのテーブルが空いているな。行こひづ」

一 夏はお盆に乗っている口替わり定食の鯖の塩焼きを持ちながら歩き始める。

一 夏「鈴、いつ日本に帰つて来たんだ? おばさん元気か? いつ代表候補生になつたんだ?」

鈴「質問ばつかしないでよ。あんたこそ、なにエヒ使ってんのよ。ニコースで見たときびっくりしたじやない」

血殺「てか、お前ら仲良じな。鈴はたいていの男子の」と嫌うの

本当のことだ。

鈴は男子と普通はあまり話さない。俺も例外ではない

鈴「わ、私は偉そうにする奴が嫌いなだけよ」

血殺「俺は偉そうにしてなかつたけど嫌われたぜ」

鈴「あんたは勘にさわるしゃべり方だったから嫌いなの」

血殺「そ、そうなのか」

俺の口調、そんなにイラつくかな

まあ、今後直せばいいや

鈴「一夏、そろそろどうこいつ関係か説明してほしいのだが」  
セシリヤ「そうですねーー一夏さん、またかこいつらの方と付き合つしらっしゃるのー?」

鈴とセシリヤが棘のあるいい方で一夏に聞いた。

鈴「べ、べべ、別に私は付き合つてゐる訳じやない・・・」

一夏「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」  
血殺「筈、セシリ亞 こんな奴が女と付き合えると思うか？他人の  
気持ちにさえわからんこいつが」  
一夏「な、なんだよそれ」

心当たりがありませんって感じで言つてくる

血殺「本当のことを言つてこるだけだ」

筈「一夏、幼なじみとはどういうことだ！？」

一夏「あー、えつとだな。・・・・・」

一夏大変だなあ、知らず知らずのうちに女にモテてるからなあ

一夏「・・・から、会つのは1年ちょっとぶりだな

プルプル、プルプル

俺の携帯電話が鳴つた

血殺「もすもす、お前から電話して来るなんて珍しいな。えつ？今  
からか？ どうだろな。わかつた1時半でいいな？ じゃあまた  
な」

プツ

一夏「誰からだ？」  
血殺「知り合いから」  
一夏「出掛けるのか？」  
血殺「ああ、2、3週間ぐらいかな」  
一夏「気をつけろよ」

血殺「ああ、わかってる」

俺は食事を済ませ待ち合わせ場所に向かつ。

待ち合わせ場所

？？「早かつたわね」

血殺「あんたもな」

電話の相手は薄い金色の髪をした女性。  
仕事仲間なのだが、まだ仲間ではない

？？「今回の目標はイギリスの第3世代型の工Sよ」

血殺「誰が乗るんだ？」

？？「あの子よ」

俺の頭には一瞬でその人物の顔が出てきた。

血殺「ああ、あの憎らしい顔か」

？？「仕方ないわ。あの子だけまだ持つていらないもの」

血殺「わかった。回収するだけだな」

？？「ええ」

仕事仲間の女性は短く答えた

血殺「報酬は？」

？？「成功したら200、失敗しても100でどう？」

報酬はいつも万単位で執り行われるから「ちからすればかなり収入は良い。

血殺「わかった。じゃあ行つてくる」

？？「どのくらいで帰れる？」

血殺「さつと2週間ぐらいだな。観光もしたいし」

？？「そう、じゃあ行つてらっしゃい」

血殺「ああ、行つてくる。 “次元加速” ≪ディメンションブースト≫」

イギリスに着いてから十日後の未明

イギリス上空

血殺「行くぞ、青竜、玄武」

青竜「りょーかい」

玄武「あいよ」

血殺「白虎は常に準備をしておけ」

白虎「わかつたわ」

血殺「玄武をリージュモードで展開」

俺は玄武を展開していくにつれ見えなくなっていく。

玄武「正常に動いてるよ」

血殺「じゃあ今から突入する。隠密で行動するからみんなしゃべる時は「ンタクトで話すよ」にしてるよ」

「ンタクトは自分の言葉を声に出さずに直接相手の頭に送る」と超音波とよく似ているが、少し違う。

玄武「わかった」

青竜「りょーかい」

白虎「わかつたわ」

血殺「じゃあ、行くぞー！」

## 研究所内部

潜入から約一十四分

血殺『白虎、今どこだ?』

白虎『第2格納庫、私たちが向かうのは第4格納庫よ』

血殺『それはどの辺にある?』

白虎『4つ下の階よ』

血殺『わかつた』

血殺『ここか?』

## 第四格納庫

白虎『そうよ』

誰もいない。今は無人のようだ

玄武『田標つてあれじゃない?』

玄武の田線にはセシリアのブルー・ティアーズによく似た機体があつた

血殺『どうやらそういうみたいだ』

青竜『田標の名前は?』

血殺『『サイレント・ゼフィルス』つてやつだ』

俺は田標に接近し、データを読み込む

玄武『合ってるね』

血殺『回収するぞ』

俺は右目の眼帯を外す。

白虎『目痛くないの?』

血殺『仕方がないんだよ』

白虎『あんたの目だから、どうでもいいけど』

数秒後、サイレント・ゼフィルスが俺の眼に引き込まれる

血殺『回収は終わったから帰投するぞ』

イギリスト上空

血殺「”次元加速“！」

あるホテル

血殺「帰つたぞ」

？？「あら、早かつたわね」

血殺「五月蠅い奴らが出て来なかつたからな」

五月蠅い奴らとは研究施設の奴らだ

？？「ふうん。じゃあ、目標を渡して」

血殺「お前も報酬を渡せよ」

？？「これでしょ」

女性は大量の何かが入った鞄を俺に渡す

血殺「じゃあ、約束の品をだすぞ」

サイレント・ゼフィルスが俺の眼から出現する

？？「ありがと」

血殺「まじで、目がいてえ！」

？？「血が出るかもね。血殺だけに」

女性は笑いながら言つが、実際マジで血が出ている

血殺「珍しいなあんたがそんな事言つなんて」

？？「そういう時もあるのよ」

血殺「じゃあ、俺帰るから。またな」

## 転校生は元クラスメートー！？ + 秘密の仕事（後書き）

本編の内容が全く無く申し訳ありません。

誤字、脱字があつた場所教えていただけないと恐縮です。

朱雀の口調はわざと書きませんでした。

青竜、玄武、白虎の口調はわざとおかしく書きました。

いろいろと申し訳ありませんでした。

## 決戦！クラス対抗戦（前書き）

実際の戦闘シーンはほとんど出ません。

## 決戦！クラス対抗戦

5月

帰つて来たら世界が変わつていた。  
ていう程でもないけど

血殺「いつたい、何が起きたんだ？」

自分に問い合わせても出るわけがない。

鈴と一夏は何で喧嘩してるんだ？そして

自分の部屋をもう一度見直した。そこには、1人の女子が寝ていた。

血殺「誰だ？この人？」

その人はパジャマ姿で寝ている為、どこのどいつだかわからない状況であった。

同じクラスの人ではないな

血殺「先生呼ぼ」

俺が目を離した瞬間、俺はうつぶせの状態で倒れた。

血殺「何なんだよ！」

「？？」「あははっ。困っちゃつて可愛いねー」

女子は俺に馬乗りしてくるから、息がし辛い。

つか！

血殺「重い！あんたいつたい誰なんだよ！」

？？「私？自分が何者なのかは言わない。言ひ奴は馬鹿なんだよ。だっけ？」

女子は笑顔でその言葉を言つてきた。

血殺「そうだな、それなら！」

俺は体を反転させ腹筋を使い乗りかかるようにして相手を押し倒した。

？？「あら、強引ね。でもそういうのおねーさん好きよ

血殺「あんた、どこの人？」

馬乗りの状態で問いかげた。

？？「この学校の生徒よ」

血殺「じゃあ、あんたは何者？」

？？「さつきも言つた筈よ」

血殺「そうか。それは残念だ。あまり女性にこうしてほんとほんたくないのだが仕方ない」

両足で相手の両腕を押さえ、左手で相手の頭を押さえながら、右手で腰に付いているホルダーからサバイバルナイフを出し手にする。

？？「いつたい、それで何をする気かな？」

女子は平然とした顔で聞いてきた。

血殺「さあ？ 何でしよう？」

俺はナイフを女子の首筋に近づけた

？？「人を殺めることに迷いの無い目をしているわね。四死神血殺

君

これじゃあ埒があかないな

血殺「質問を変えよう。俺に何の用？」

？？「これを渡しに来たのよ」

女子が渡して来たのは、何かの腕章だった。

血殺「俺にこれをやれと言いたいのか？」

？？「そういうことよ」

血殺「考えておく。だからもう帰つくれ

俺は女子から離れたが、女子は寝転がつたまま足をバタつかせながら静かに騒いだ。

？？「え？」

血殺「じゃあ、知らん。先生に怒られてもな」

？？「はいはい」「じゃあね」

血殺「・・・」

バタン

血殺「疲れた。寝よ」

いろいろありすぎて疲れたな

試合

第2アリーナ第1回戦。組み合わせは一夏と鈴だった。

血殺「まあ、頑張れ」

一夏「ああ、負けない程度に頑張るさ」「じゃあ、行ってくる」

試合が始まった。俺は一夏を送った後、校内のテレビ中継がやつてる所まで走つて行つた。

俺が着いた時にはもう試合は鈴の一方的有利な試合なつていた。

その時

玄武『血殺！ 誰かが僕のフィールドを突破したみたい』

血殺『何！？』

玄武のフィールドはドーム型のバリアになつていて、大抵の攻撃は防げる代物だ。

白虎『血殺、出ましょ。みんなに危険が及ぶわ  
血殺『わかつた。朱雀のウイング、白虎の両手、玄武の両腕と両足、  
青竜の両肩と腰を展開！』

橙、白、緑、青の4つの光に包まれる。

血殺「行くぞ！朱雀！」  
朱雀「ええ」  
血殺「”次元加速“！」

アリーナ外

玄武『あれだよ！あの黒いエス！』

血殺『じゃあ、行くぞ！』//ワーズタートル“&”レッドライズ“  
！』

玄武を足に付着していた甲羅と朱雀を翼のビットが排出される。

ビットは黒いエスに向かつて行き、ビームで目標を狙い撃ち  
反射板《甲羅》で当たらなかつたビームを再び目標に跳ね返す。  
ビームは全て直撃した

血殺「青竜！」

青竜「準備出来るよ」

血殺は青竜の展開している肩からプラズマ砲を腰にマウントしてあるレールガンを放射する。

朱雀「やったの?」

血殺「いや、まだだ!」

刹那、敵のI-Sからビームが放射される。

血殺「玄武!」

玄武「ええ」

血殺「”水の盾”『ウォーターシールド』!」

空気中の水分を集め盾となる。

ビームとシールドがぶつかり合い爆風を起した。

見たところ黒いI-Sは無傷。

さらに、ビットも全部破壊されてるし、反射板も跳ね返しきれなくて破壊されている。

血殺「白虎!」

白虎「わかってるわよ

血殺「”死の槍”『デスランズ』!」

即座に赤黒い槍を展開する

血殺「うらあああああ

”死の槍“を黒いＩＳに向かって投げ飛ばした。だが、黒いＩＳは難なく避けて突っ込んでくる。

血殺「そうくるなら、”死の爪“《デスクロウ》だ！」

”死の槍“と同じ色をしたクロウを右手に展開する

”死の爪“を相手振りかざした。しかし、黒いＩＳはそれも避けて血殺に体当たりしてその状態のままアリーナの遮断シールドを破壊してアリーナに突っ込んだ。

血殺「いてーんだよ。このクソ野郎！」

再び”死の槍“を展開する。

血殺「死ねええええええええ！」

黒いＩＳに”死の槍“を突き立てて刺すが、黒いＩＳの手に防がれる。

そして、黒いＩＳの放つたビームが直撃し地面に叩きつけられる。

血殺「ぐつ」

一夏「な、なんだ？」

鈴「一夏、試合は中止よーすぐピットに戻つてー！」

鈴はかなり焦つた様子で一夏に叫ぶ。

一夏「お前はどうなんだよ」

鈴「血殺と一緒に時間を稼ぐわ」

一夏「女を置いてそんな事できるかよ！」

鈴「あんたの方が弱いんだから仕方ないでしょが！」

一夏「う、つ」

もつともなことを言われ、言葉を失う一夏。

鈴「あたしも最後までやり合いつもりはないわよ。すぐに学園の先生達が事態を收拾「あぶねえつ！」

鈴の体を一夏が抱きかかえてさらう。その後さつきまでいた場所にビームで砲撃された。

血殺「一夏ナイス判断だ。だけど、話してる時間があるなら集中しろ！」

一夏「血殺！ 大丈夫なのか？」

血殺「肋を何本かやつちまつたが、大丈夫だ」

”暗黒の鎌”《ダークサイス》、”竜の息吹”《ドラゴンズブレス》

右手で漆黒の鎌である”黒き鎌”を、左手で白の銃である”竜の息吹”を展開する。

一夏「なあ、血殺」

血殺「なんだ？」

一夏「あのISはなんだ？」

真剣な目で黒いISを見ながら俺に聞いてきた。

血殺「その前に鈴を離してやれよ」

一夏「ああ、そうだな」

一夏が手を離すと鈴は一夏の隣に移動した。

鈴「全く何時まで抱いてるつもりだったのよ」

一夏「わ、わりい」

鈴「まつ、いいけど」

鈴は軽く頬を赤くしている。

そんなに嬉しかったのかなあ?  
よくわからん。女は

血殺「一夏さつきの話だけど、たぶん無人機だ」

一夏「む、無人機!?」

鈴「ち、ちょっと待つてよ。もうつて人が乗らないと動かないんじ  
やないの?」

血殺「理論上はな」

そう、IISは理論上に言つと、人が乗らないと絶対に動かない。

まあ、どつかの天才ウサギの頭なら理論なんかも吹き飛ばすかもね

鈴「無人機なはずないわつ。絶対に」

鈴は首を左右に振り、ありえないという顔をしている。

血殺「まずは、あいつを破壊しよう」

一夏「でも、どうやつてだ?」

血殺「俺と鈴でお前の援護するから、お前は”雪片”『ゆきひら』  
であいつを破壊してくれ」

一夏「わかつた」

鈴「わかったわよ

数分後

血殺「一夏！一ちゃんと狙え！」

鈴「そうよー。これで4回田じやない。」

一夏「狙ってるつづーの

何回不意を突いても最後に避けられてしまい。一いちらの不利になつてきた

血殺「鈴、今いくつ？」

鈴「わつと一八〇つでとー」ね

血殺「一夏は？」

一夏「60を切つてゐる

血殺「まじかあ

俺も400を切つてゐる。  
殺れるのはラスト一回くらうだらうな

鈴「来るわよー。」

一夏、血殺「「！」「！」

黒いエスのゲームを避ける俺たち。

鈴「めんどくさいわね」

鈴は衝撃砲を展開し砲撃するが、黒いエスにたたき落とされる。

血殺「なあ、一夏」

一夏「なんだ？」

血殺「あいつに向かつてフルで攻撃出来るか？」

一夏「できるが、また避けられるぞ」

血殺「”瞬時加速”『イグゼーションブースト』ならどうだ？」

一夏「エネルギーがないぞ」

血殺「一夏の背中に”竜砲”『りゅうほう』をぶつけて加速すればいい」

一夏「なるほどな。そつと決まれば早速」一夏ああああああー。」

まさか、この声は篠か！

篠「男なら、男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとするー。」

大声で叫んだせいで黒いエスが篠の方へ向きを換える。

血殺「ちつ、あの馬鹿！ 鈴！」

鈴「何よ？」

血殺「あいつに向かつて”竜砲”を打てフルパワーで」

鈴「当たんないわよ」

血殺「いいから早くしろー！ 一夏！ 準備しろ！」

一夏「わかつたが、簫が！」

血殺「簫は任せろ！」

”次元加速“！

簫の前まで移動し、抱きかかえて再び飛び始める。

血殺「何やつてんだよ！」

簫「私は……」

血殺「もういい。何も言つな

一夏「ぐつ！」

一夏は”零落白夜“で右腕を壊したものの、左手に殴られ地面に叩きつけられた。

簫、鈴「一夏つ！」

一夏「狙いは？」

セシリア「完璧ですわ！」

血殺「当てて当然だろ」

刹那、客席からブルー・ティアーズの4機のビットが黒いエスに狙撃した。

一夏の方へ向かう俺とセシリア。

血殺「危なかつたな。一夏」

セシリア「ギリギリのタイミングでしたわ」

一夏「セシリアならやれると思つていたぞ」

俺たちが喜びに浸つた刹那、一夏は黒いエスにロックオンされ撃た

れた。

血殺「一夏！ ちくしょー！」

俺が放つた”竜の息吹“の砲撃が直撃し黒いＩＳは大破した。

## 保健室

血殺「おっ、気がついたか」

一夏「血殺、あのＩＳは？」

血殺「破壊した。大丈夫だ！ 俺とお前以外誰も怪我してない」

俺は胸に包帯が巻かれているし、一夏は当分、辛い想いをするだろう。

一夏「そつかあ、そりゃ良かつた」

安心した表情を見せる一夏。

千冬「気がついたみたいだな」

一夏の声を聞いてか、千冬が近づいてきた。

血殺「じゃあ俺は外で待つてますね。先生」

千冬「ああ、わかった」

保健室を退室し、壁に寄り掛かって待っていた。

保健室前

プルプル

血殺「もすもす 何の用？ ああ、あれのことね 仕方無いだろ。こっちにも役割がある わーつたわーつた。じゃあ、また今後連絡する」

ふう、なんか疲れたなあ

はあ、とため息をついてると簞がやつってきた。

血殺「簞？」

簞「・・・・・」

無言でこいつを見ている。

な、なんだか不気味

血殺「ああ、一夏なうもひ起きてるが」

簞「そ、そつか。・・・・・あつがとな

血殺「何が？」

簞「助けてくれただろ」

意外だった。筈から礼を言われるなんてな

血殺「ああ、白い王子様じゃあなくて悪かつたな」

筈「血殺！」

血殺「さつさと入つてきなよ」

筈がムスッとした顔で入つて行つた。

筈と入れ違いで千冬が出てきた。

千冬「じゃあ、行くぞ」

血殺「そうですね」

俺たちはある場所に向かつた

ある空間

。 いた  
レベル4権限を持つ関係者以外立ち入り禁止区域に俺と織斑先生が

真耶「織斑先生？」

血殺「山田先生じゃないですか」

真耶「四死神君？ どうしてここに？」

レベル制限があるからか、

少々驚いた感じで真耶は入室した。

血殺「織斑先生に許可を得たからです」

真耶「そ、そうなんですか」

千冬「で、結果は？」

真耶「はい。あれは・・・無人機です」

血殺「そうだったんですか？ 何か違和感があると思いましたが」

はあ～、嘘つくつて大変だなあ

千冬「コアはどうだった？」

真耶「登録されていないコアでした」

千冬「そうか」

真耶「何か心当たりがあるんですか？」

千冬「いや、ない。今はまだな」

## 決戦！クラス対抗戦（後書き）

いかがだつたでしょうか？

次の話からシャルとラウラを出します。

では、また次回

ルームメイトはアラン・ド・貴公子（前書き）

前々回に続きまた謎の力がでてきます。

さらに血殺の過去の話。第2弾。これでだいたい完成します。

## ルームメイトはブランド貴公子

6月

プルプル

血殺「もすもす？ ああ。久しぶりだな。えつ？ そんなわけないだろ！ お願ひ？ 珍しいあんたが、で？ どんなお願ひなの？ ふむふむ、お前の部隊の隊長ねえー。名前は？ ラウラ・ボーデヴィイッヒだな。 了解したよ。 じゃあ、今度は俺のお願いだ。 ビールと銃送つて ああ、何でもいいよ。 じゃあな」

懐かしいな。 あいつと最初に会ったのは十三年前の秋だっけか

血殺「転校生を見るついでに、授業でも受けれるか」

教室

真耶「今日は転校生を紹介します」

ガラガラと入つて来たのは金髪の少年と銀髪の眼帯少女だった。

？？「失礼します」

?

「…シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では慣れなことが多いかと思いますがよろしくお願ひします」

フランスか。あの国は昔よく連れて行ってもらつたっけ

女子B 「お、男？」

シヤル川へはいこせらに僕と同じ境遇の方かしると聞いて本国から転入を……」

「うむ。コノアは口禡だけ男のようだ。」

シャルル「はい？」

五月蠅いなあ。餓鬼か！？  
貴様らは

女子E「男子！3人目の男子！」

女子C 「しかもうちのクラス！」

女子G「地球に生まれて来て良かった」

「冬休みに駒ヶ岳に登る。」

織斑先生と曰田先生によつやつと静かになる教室。

？？？「…………」

千冬「挨拶しゆ、ラウラ」

ラウラ？ あいつが書つてたやつと今は同じだな

ラウラ「はい、教室」

千冬「じじではそう呼ぶな。もつ私は教室ではないし、じじではある前も一般生徒だ。私のじじは織斑先生と呼べ

ラウラ「了解しました」

ラウラはドイツの軍人のような

ラウラ「ラウラ・ボーデウイッヒだ」

うん、合つてゐな。あいつに書つておくれ

真耶「あ、あの、以上ですか？」

ラウラ「以上だ」

てか、眼帯キヤラがかぶつてんじやん！

どひすんだよ！？ 作者さん！

ラウラ「…貴様が」  
バシンツ

全員「…………」「…………」「…………」

一夏「うへ…」

俺がどうでもいいことを考へてゐるうちに問題が起つてゐた。

ラウラが一夏にビンタしたのだ。しかもすんげーいい音が教室中に響き渡つた。

ラウラ「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

一夏「いきなり何しやがる！」

ラウラ「ふん・・・」

止めないとマズいな

血殺「ドイツの人つてみんなそうなの？」ラウラ・ボーデヴィッヒ  
ラウラ「貴様に教える筋合いはない」

ラウラは貴様などに興味は無い。とまで言つてゐた。

血殺「さすがドイツの冷水だ。説得は一筋縄ではいかないか」

ラウラ「！ 貴様何故それを！？」

何故知つている！？と言わんばかりの顔をしてゐる。

血殺「それともこう言つべきかな。ドイツEIS部隊黒ウサギ隊長殿」「

ラウラ「貴様！ どこでその情報を手にいれた！」

血殺「今度の大会で俺に勝つたら言つてやる」

俺たちの言い争いに終止符をつつかのように織斑先生が話を割つてきた。

千冬「静かにしろ！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第

2グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散!「それから織斑、四死神。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男だろ」

織班先生が言い終わるとデュノアは一夏に向かつて歩いて行つた。

シャルル「君が織斑君？始めまして。僕は」「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるかついで」

血殺「さつさと行くぞ。だいたいの説明は移動中にする」

俺たちは階段を下つて1階へ。しかし

女子K「ああっ！転校生発見！」

女子M「しかも織斑君と四死神君が一緒に

正義

逃げても逃げても「キブリのように湧いて来やがる。  
じからかと言うと、エアのクモのようだ。

女子H「いたつー！」  
H「ちよー！」

女子の「着ども出会え出会えい！」

女子II「織斑君の黒髪や四死神君の紺もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

女子」、「しかも瞳はエメラルド！」

女子P「きやああつ！見て見て！織班君と転校生！手！繋いでる！」

女子R「田本に生まれて良かった！ ありがとうお母さん！ 今年の毎の日は河原の花以外のをあげるねー！」

だるいな。時間の方を使うか

血殺「はあ、やつと静かになつたよ。早く行こ」

全員がピタッと止まつている。

別に人が止まつてゐるわけではなく、時間 자체が止まつてゐるのだ。

女子の軍勢から逃げてから俺は時を再び動かした。

血殺「さあ、動け」

一夏「あれ？ 血殺が消えた！」

シャルル「ホントだ！」

女子S「四死神君がいなくともまだ2人いるわよ！」

お、女つて怖い。

一応、言つておこう。

血殺「一夏！俺は先に行つてるぜ！」

一夏「なつ！ 血殺！ 何でそんなとこいんだよ」

血殺「その前に自分の心配しろ！…じゃあな！」

わりいな一夏、俺はまだ死にたくない！

## 第2グリウンド

血殺「ふつ、間にあつたぜ」

俺が着くなり、簞が近寄ってきた。

簞「一夏と一緒にじゃないのか？」

第一声がそれですか！？

まあいいや

血殺「一夏なら遅刻するぜ。絶対に」

簞「何をやつてているのだ。全く」

やつぱり戻になるんだ

千冬「遅いー！」

一夏「はい、すいません」

結局、二人とも遅刻して来た。

誤るなり列に並ぶ一夏とシャルル

セシリア「ずいぶんゆっくりでしたわね」「スーツ着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら?」  
血殺「一夏曰わく、ひとつかかるらしいぞ」

俺は正直に言った。

一夏の考えを正直に言つただけ

セシリア「なつ!」

一夏「なんで知つてんだよ!」

千冬「うるさいぞ! 織斑!」

一夏「すいません。織斑先生」

一夏は織斑先生に怒られるが、誤る。

見ていくとかなり面白い関係だ

千冬「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

生徒「はい!」

一組と合同なだけにいつもよつとてつもなく五月蠅い。

千冬「今日は戦闘を実演してもらおう。凰! オルコット!」

セシリア「な、なぜわたくしまで!?」

鈴もセシリアもどばつちりだな。

千冬「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出る」

セシリア「どうしてわたくしが…………」

鈴「なんでアタシが…………」

文句をいいながら前に出る2人だが、千冬に耳打ちされた刹那2人は人が変わったようにやる気を出し始めた。

セシリア「やはっこはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですわね！」

鈴「まあ、実力の違いを見せつけるいい機会よね！専用機持ちのー！」

織斑先生も酷いことするなあ

セシリア「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

鈴「ふふん。こっちの台詞よ。返り討ちよ」

千冬「慌てるなバカども。対戦相手は「ああああーっ！　ビ、ビー、  
てくださーーーっ！」

キィィィン……

真上から風を切る音が響いたから俺は空を見上げた。

山田先生！？　てか、俺と一夏にぶつかるぞ！　朱雀でも間に合わないな　なら、また時の方だな

血殺「あつぶねー。一夏！大丈夫か！？」

一夏「ああ、ギリギリ間に合つた」

真耶「あ、あのう、織斑くん・・・ひやんつ」「そ、その、ですね。  
困ります・・・こんな場所で・・・」「

一夏はまったく大丈夫ではなかつた。

まずいぞ。何故かわからんが山田先生が下で一夏が上に乗つている  
状態！しかも、一夏の手が山田先生の胸を驚掴みしている！セシ  
リアは狙つてるし！ 鈴なんか何時でもOKつて顔してゐるし！

真耶「ああでも、このまま行けば織斑先生が・・・」「

頼む！ 山田先生、現実に戻つてくれ！

一夏「ハツ！？」

血殺「バカ！」

一夏が体を起き上がつた刹那、一夏の頭があつた場所をレーザー光  
が貫く。

セシリ亞「ホホホホホ。残念です。外してしまいましたわ」

セシリ亞が外したのを補うかのように、ガシーンという音と共に鈴  
が“双天牙月”を連結投げ飛ばした。それは一夏に向かつて真つ直  
ぐ飛んでいった。

一夏「い！」

ドンッ！ドンッ！と2発の銃声が双天牙月を打ち飛ばす。それを撃  
つたのが意外にも真耶だった。

真耶「大丈夫ですか？織斑君」

千冬「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今の射撃ぐら  
い造作もない」

真耶「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし」

候補生止まりか。つまんねーの

千冬「さて小娘どもいつまで惚けてる。さつとじめんが  
セシリア「え？あの、2対1で？」

鈴「いや、さすがそれは」

千冬「安心しろ。今のお前達ならすぐ負ける」

負けると言われて鈴とセシリアが瞳に闘志をたぎらせる。

千冬「では、はじめ！」

鈴、セシリア、真耶が浮上していく。

千冬「さて織斑、四死神。あいつらの戦いが終わったらお前達にも  
やつてもらう。準備をしろ」

血殺「はい」

一夏「え？俺もですか？」

千冬「そうだ、さつさと準備しろ」

コントクト開始

血殺『さて、誰が出る？』

白虎『私が出たい』

血殺『じゃあ、白虎でいいな』

朱雀『別にいいケビ』

朱雀は戦いは好まない主義だ。

青竜『近接戦闘には興味無い』

セシリアの時に出すべきだつたな

玄武『御勝手に』

め、珍しい

血殺『じやあ行くわ。白虎』

コンタクト終了

千冬「四死神！はじめるだー！」

血殺「あ、はい」

一夏は白虎、俺は白虎を展開する。

千冬「それでは、はじめ！」

浮上していく一夏に続いて俺も浮上する。

一夏「この前のとは違つんだな

血殺「近距離のお前に中遠距離の武器を使つたら可哀想だと思つてな」

一夏「そうかい」

血殺「じやあ、行くぜ！」

一夏「ああ、何時でも来い！」

俺は”瞬時加速“を使い一夏の後ろをとる。

血殺「もらったあ！」聖なる剣“《ホーリーブレード》”

真っ白の剣を展開して、一夏に斬りかかった。

一夏「くつ！」

血殺「うんうん、止め方は上手いけど隙だらけだ！」

一夏「えつ！？」

血殺“曲長刀”《きょくじょう》！

俺は左手で伸び続ける刀を展開し振り回す。それを回避する一夏。

血殺「上手く避けたね。でも残念これで終わりだ！」

血殺の”曲長刀“が一夏の五体を縛り、刃先は地面に刺さった。

一夏「何！？」

血殺“曲長刀”は切る為にあるんじゃない。捕獲用に作られた刀なのさ。だからこれで終わりだ。”死の槍”！

俺は死の槍を展開。

一夏に向かつて投げ飛ばした。

”死の槍“は白式を直撃する。

一夏「なつ！？」シールドエネルギーが一撃で0に！

血殺「そう、”死の槍“は当たった瞬間エネルギーが0になるぜ」

千冬「終わつたな」

血殺「ええ、終わりましたよ」

俺と一夏がゆつくり地面へと着地する。

千冬「では、専用機持ちの織斑、オルコット、凰、デュノア、ボーデヴィッシュに各グループ8人で実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやるよう！」では分かれろ」

血殺「先生！俺はどうすれば？」

千冬「四死神は全グループのサポートをしろ」

血殺「了解」

千冬が言い終わるや否や、一夏とシャルルに一気に2クラス分の女子が詰め寄る。

女子F「織斑君、一緒に頑張ろう！」  
女子G「デュノア君の操縦技術見たいなあ」

千冬「この馬鹿者どもが。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさつき言った通り。次にもたつくよつなら今日はE.Sを背負つてグラウンド百周させるからな！」

一夏とシャルルに群がっていた女子が蜘蛛の子のように散っていく。

千冬「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

血殺「さてと、俺は様子見でもするか」

俺は各グループを見て回りながらそれぞれのグループにアドバイスを行つていった。

千冬「今日はここまでとする。因死神は後で職員室に来い。では解散！」

職員室

血殺「失礼します。織斑先生！来ましたけど何か？」

千冬「だいたい想像はついてるんだろ？」

織斑先生は短い笑みを浮かべる。

血殺「じゃあ、場所を変えましょう。山田先生も一緒に来てください

い

真耶「えつ？ 私も？」

血殺「何度も説明するのだるいん

で」

真耶「わかりました」

千冬「場所はどこがいい？」

血殺「空き部屋」

ある空き部屋

千冬「では話してもらおうか」

血殺「俺のＩＳのことですね」

千冬「ああ、そうだ」

俺も少し真面目な顔をして言葉を始めた。

血殺「先生も察してゐる通り元々は俺のＩＳではありません」

千冬「だろうな。お前のＩＳの名前は元日本の代表候補生のＩＳだつたが何故お前が持つてゐる！？」

血殺「このＩＳの元所有者は俺の友達にして俺が殺害した人です」

真耶「殺害つて！四死神君！人を殺したんですか！？」

血殺「はい」

俺は力がない声で返事をした。

千冬「何故そんなことをした！？」

血殺「俺だつて殺りたくなかった！」「でも、気がついたらみんなが死んでいた！」

千冬「気がついたらとまどうことだ！？」

織斑先生は驚いた顔をして聞いてきた。

血殺「俺の親指に墳めてあるリングもエスなんですけど、俺がこれをたまたま見つけて触つたら勝手に展開して暴走を起こしたんです。それでみんなを殺したんです」

真耶「でも、おかしくないですか。なんで四死神君はそのエスをつけたんですか？」

血殺「ちょうど、その日に友達の家に行つたんですよ。そしたら試作品であるこのエスをみつけたんです」

俺はエスのことは正直に言った。

千冬「なるほどな。では次にお前の家族について聞きたい」

血殺「前にも言いましたよね。家族のことは聞かないでくれって」

千冬「ああ、覚えいる。だが・・・」

血殺「わかりました。確かに気になるでしょ」から

千冬「礼を言つ」

血殺「では、本題へ移りましょ」うか。・・・俺の本当の親は幼い頃に俺をドイツの研究所に売つたんです。俺はそこで苦しい実験を受けてきました。この眼帯の下の目はその時に受けた実験の物語つているんです」

俺はそう言つて右目を隠している眼帯を外す。俺の右目は赤と青の2色に分かれている。

千冬「その目は何の意味がある？」

血殺「時間を止める作用があります」

千冬「時間を止めるだと?！」

織斑先生はかなり大声で聞いてきた。

血殺「ええ、そんでもってこの力を手に入れた時にその研究所の人間を1人残らず殺しましたけどね」

千冬「しかし、そんな話を聞いたことがない」

血殺「当たり前ですよ。あいつらは人体実験をしていたんですから。言つたら自分達の首を絞めてるのと同じですから」

この人は俺のことを信じてないな

まあ、疑われるのはなれてるしいや

千冬「その後、お前はどうしてた？」

血殺「あるドイツの人に拾われました。先生もよく知っている人です。名前ぐらいは自分の力で知つてください。で、その人に日本まで送つてもらつてある学校の先生に拾つてもらつたんですよ」

千冬「その先生はどうした？」

血殺「死にましたよ。白騎士事件のせいで」

千冬「！」

俺の言つた言葉に動搖を隠せない織斑先生。

千冬「どういうことだ！？」

血殺「今言つた通りです。だから俺はそいつが憎い！自分は何も成し遂げていないので！成し遂げたかのように平然とするそいつが！何故先生の事件が報道されなかつたかわかりますか！？実験が好きだつた先生には山奥に別荘があつたんですね！だけどその別荘は野鳥を観察するため作つた物でした！しかし！事件は先生の実験が失敗したため爆発したと見てもいいのに調べてもいないので言われた！俺が唯一の目撃者なのに誰も信じない！だから俺は許さない！この事件を起こした束も！護りきれなかつたそいつも！」

俺は心の中で叫んだ。

「お前をいつか殺してやるよ」って

千冬「お前は白騎士のパイロットを知っているのか?」

血殺「ええ。全部、束から聞きました」

真耶「で、でも確か撃たれたミサイル全てを白騎士は壊したんじゃ  
ないんですか?」

血殺「本当に撃たれたミサイルが2341発だったんですけれど」

千冬「どういう意味だ? 四死神」

血殺「束さんのパソコンをいじってたら発射数が書いてあつたんで  
すよ。そうしたら、2342発だったんですよ」

千冬「なつー?」

真耶「まさかそんなことって!」

血殺「今のが真実です。じゃあ俺は部屋に戻ります」

俺は殺意を残しながら部屋を退室した。

血殺「はあ、言わなきゃ 良かつた」

朱雀「大丈夫？ 血殺」

白虎「大丈夫なわけないでしょ」

青竜「確かにね」

玄武「復讐の相手が目の前にいたらね」

血殺「みんな、頼むから静かにしていてくれ。俺は寝るから4時ぐらいに起こしてくれ」

朱雀「うん、わかつた」

3時半

ブルブル

血殺「ん？ もしもし。 ああ、お前か。 何か用？ ああ、そんな約束してたな。 あいつ同じクラスだつたぜ。 お前が教えてくれた情報にビックリしてたぞ。 ああ、いいけど。 俺のお願いも追加するぞ。 僕が昔から吸つてる煙草送つてくれ。 それからもう1つお願いがあるんだ・・・・・。 ジゃあまた後で  
プツツ

血殺「コイツら回収しよ」

そういうて朱雀 白虎 青竜 玄武を回収する。

プルプル

血殺「もすもす。ああ、調べがついたのか。で?どうだつた? やつぱりか。 ありがとな。 今度、漫画送るぜ。ああじやあな」

4時

ガチャ

シャルル「お邪魔しまーす」

血殺「シャルル?」

シャルル「ぼ、僕この部屋になつたんだけど」

血殺「そうなのか。じゃあ、そつちのベッドを使つてくれ。 それから、風呂の時間は7~9時の間に入つてくれ」

シャルル「う、うん。わかつた」

返事をするのが精一杯のシャルル。

血殺「それともう一つ」

シャルル「何かな?」

血殺「お前、女だろ」

シャルル「！な、何のことかな？」

シャルルはむちゅくちゅく動搖している。

血殺「とぼけても無駄だぜ。もつ調べはついてる」

シャルル「そ、そなんだ。はあ、やっぱり駄目だったかあ」

諦めたかのように元気が無くなるシャルル。

血殺「何が狙いだつたの？」

シャルル「それはもちろん一夏だよ」

血殺「だらうな。お前の父さんの会社、倒産しそうなんだろ」

シャルル「うん。デュノア社は第3世代型を開発してんだけど、なかなか形になりなくて、それで政府からの通達で予算が大幅カットされたんだ。そして、次のトライアルで選ばれなかつたら援助を全面カット、その上、HSの開発許可も剥奪するつて言い渡されたの」

まあ、当たり前か。使えなかつたものは処分するのが基本だ

血殺「ふうん。それで男でもHSを使える一夏に近づいた訳か」

シャルル「そういうこと」

血殺「よく実の娘にそんなことできるなあ」

淡々と言つシャルルに呆れたように言った。

シャルル「僕は愛人との間で産まれた子だからかな」

血殺「だから、どうでも良いと」

シャルル「そう想つてると思うよ」

愛人と p1a する人が悪いと思つたなどな

血殺「お前は父親から解放されたいのか?」

シャルル「うん。 でも出来ない」

血殺「なんでだ?」

シャルル「たぶん逃げても何時か捕まると思う」

血殺「じゃあ、逃げなきゃいい」

シャルル「無理だよ」

まあ、大抵のガキはこうなるよな

けど

血殺「間違つてるよシャルル。 何もしていのに無理と言つ言葉  
は出してはいけない。 現実に、 お父さんに向き合わないと」

シャルル「でも、どうしたら」

血殺「俺に良い案がある」

シャルル「良い案?」

首をくにゅつと横に曲げて聞いてきた。

血殺「ああ、準備出来たらフランスへ行こう」

シャルル「え? でも、前に本妻の人に殴られたんだけど」

血殺「大丈夫だ。任せろ。あつちには何も言わせない。その代わり  
条件がある

シャルル「条件?」

正直嫌だが、この方法しかない

血殺「その場だけでいい。俺とお前が付き合つてゐるよつて見せると  
だ」

シャルル「えつ！？付き合つてー？僕と血殺が！？」

シャルルもかなりあたふたとしている。

血殺「ああ、その方が説明が付けやすい。それにあつちが殴つたら  
殴り返してやる」

シャルル「それで捕まつたりしない？」

シャルルは何を言つてんだか

血殺「そしたら、あつちをシャルルに対する人権を壊してゐるつて言  
えばいい」

シャルル「でも、何をするの？」

血殺「第3世代型のI-Sの設計図とシャルルの自由の交換」

シャルル「よ、よくわからない」

シャルルの頭の上にははなマーカーが十個ぐらい浮いている。

血殺「簡単に言えば、第3世代型の設計図を渡して、シャルルを自

由にさせろつて言つて」

シャルル「中に入れてもらえなかつたら？」

血殺「損するのはあつちだ。会社は潰れ、開発も出来ない、その上

頼みの綱であるシャルルとは連絡が繋がらない」

シャルル「僕はどうすれば？」

血殺「俺の金でなんとかなる」

そり、俺には金が有り余っているからな

シャルル「なんで？」

血殺「言つてなかつたつけ！？俺、日本のI-S開発の手伝いをしていて、年収10億貰つてんだぜ」

シャルル「解雇されないの？」

シャルルは顔をむちゅくちゅ近づけて詰め寄つてきた。

血殺「も、貴い手なんていくらでもあるから大丈夫」

シャルル「なんで？」

血殺「白騎士以外の日本のI-Sは俺が考へたから」

シャルル「えつ！？」

俺はちょっと距離をおいた。

血殺「意外か？」

シャルル「うん。とても」

血殺「他に質問は？」

シャルル「第3世代型のI-Sの設計図は？」

「こままで言つてもわからないのか！？」

血殺「俺が作る。 そうだ、お前の本当の名前を教えてくれ」

シャルル「シャルロット」「ト

血殺「シャルロットか。 良い名前じゃん。 じゃあこれからはシャルつて呼ぶよ」

シャル「うん。 わかった」

難なく了解を出すシャル。

血殺「じゃあ、飯食いに行こひが。それから一夏にも訳を言おひ」「ひおひ

シャル「うん！」

血殺「良い顔してんじやん」

シャル「えつ！？ そうかな？」

血殺「ああ、前より良い顔だ。じゃあ、わざと行へれ」

俺たちは食事を済ませ、一回部屋に戻った。

血殺「そういえば、一夏の部屋つてどいだ？」

シャル「僕もそこまではわからな」

血殺「仕方ない。明日こしよつ

シャル「そうだね」

血殺「じゃあ、おやすみ。シャルロット」

シャル「おやすみ。血殺」

いかがだつたでしょうか？

血殺の意外な過去。

意外でもないかな？

私は考えるのに結構疲れました。

では、また次回

ブルー・ダイズ／レッド・スイッチ（前書き）

ちゅうと本編と違つたところがあつて面白いと思います。

## ブルー・ダイズ／レッド・スイッチ

土曜日 アリーナ

シャル「一夏がオルゴットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

一夏「そうなのか？一応わかっているつもりだつたんだが……」  
血殺「でも、わかつてないから。さつき、シャルに負けたんだろ」

さつき、一夏とシャルで模擬戦をしたところシャルの圧勝。  
一夏はなにも出来ずに終わったのだ。

一夏「そななだけどさあー」

血殺「たぶん、今まで教えてくれた人がひどかつたんだろう」

シャル「誰に教えてもらつてたの？」

一夏「箒と鈴とセシリアだ」

一夏//スマッシュな三人かよ！

血殺「おそらく箒は擬音が多くて、鈴は経験や感覚、セシリアは理論的に言つんだろう？」

一夏「よくわかつたな」

血殺「女の勘ならぬ男の勘」

シャル「そういえば、一夏の由式つて”後付武装”『イコライザ』がないんだよね？」

一夏「ああ。何回か調べてもらつたんだけど、”拡張領域”『パススロット』が空いてないらしい」

俺の内心は罪悪感で満たされてた。

なぜなら、白式も作ったのは俺。  
正確には設計しただけだ。

一夏にはまだそのことを話していないから他人事で言つたほうが良さ  
そうだ

血殺「ふうん。結構大変だな」

シャル「たぶんだけど、ワンオフ・アビリティの方に容量を使つ  
ているからだよ」

一夏「ワンオフ・アビリティって何だっけ?」

血殺「まあ言葉の通りだな。お前で言つと”零落白夜”がそうだな」

一夏「ああ、なんだか思い出した気がする」

かなりテキトーに言つたつもりが、一夏はかなり納得した表情だ。

血殺「じゃあ、射撃練習でもするか。シャル、一夏に武器貸してあ  
げて」

一夏「他人の武器つて使えないんじゃないのか?」

シャル「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、登録してある人  
全員が使えるんだよ」

血殺「じゃあ、終わつたら、オープンチャンネルで呼んでくれ」

そう言い残してその場から去つた。

少し離れたところに見覚えのある面が発見した。

血殺「ん? あれば・・・。ラウラ・ボーデヴィッシュヒューバルツ  
エア・レーゲン」

俺がラウラを見ているとシャルから通信が入った。

シャル「血殺、僕のは終わったから次は血殺の番だよ」「

血殺「わかった。今戻る」

俺はシャルと一夏の元に戻った。

血殺「どうだつた? 一夏」

一夏「とりあえず、速いって感じだな」

血殺「そうか。じゃあ次は近接戦闘やるぞ。ん? 何の話だ?」「

アリーナのざわめきにさすがに気がついた俺たち。

女子B「ねえ、ちょっとアレ・・・」

女子D「ウソつ、ドイツの第3世代型だ」

女子E「まだ本国でもトライアル段階だつて聞いたけど・・・」

女子たちの田線には人を見下した目で立っているラウラがいた。

ラウラ「おい」

一夏「・・・なんだよ」「

イヤイヤで返事を返す一夏。

ラウラ「貴様も専用機持つだそつだな。ならば話は早い。私と戦え」

一夏「イヤだ。理由がねえよ」

ラウラ「貴様にはなくとも私にはある

俺も一夏もだいたい想像がついた。

だけど、あえてラウラに聞いた。

血殺「おい！ボーテヴィッシュ。一夏と戦う理由は何だ？」

ラウラ「私はそいつの存在を認めない。だから始末する！」

血殺「それは、織斑先生に認めてもらうためか？それとも、人を殺めれば織斑先生に近づけるとでも思っているのか？」

返ってきたのはアホらしく答えた。

ラウラ「私はそいつが憎いだけだ。あの人にあんな目をさせるやつが！」

一夏「一体、千冬姉がどんな目をしたって言つんだよー。」

ラウラ「私と戦つて勝つたら教えてやる」

一夏「ならいい。また今度な」

ラウラ「ふん。ならば・・・戦わざるを得ないようにしてやるー。」

ラウラは自分のHISを戦闘状態にして、左肩の大型の実弾砲を放つ。それと同時に俺は玄武を開く。

血殺「”氷壁“『ひょうへき』」

俺は空気中の水素を凍らせ、氷の壁を作る。

砲撃は氷の壁に当たると一瞬で固まり、粉々に砕けた。

ラウラ「何ー？」

血殺「どうだ？』自慢の大型の実弾砲が効かないのは？結構悲しいだろ？」

ラウラ「貴様に用は無い！」

再び大型の実弾砲を構えるラウラ。

血殺「はつー目指す所が織斑先生つて時点でお前は俺に勝てねえよ！」

ラウラ「貴様！教官を侮辱する気か！？」

血殺「侮辱も何もあの人より俺の方が強いし」

ラウラ「貴様あ！！」

血殺「やっぱり、殺るしかないか」

俺は玄武の無駄なバーツをページした。

教師『そこの生徒！何をやつている！学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナに声が響き渡った。

騒ぎを聞き駆けつけたのだろう。

血殺「よかつたな。死ななくて」

ラウラ「ちつ！」

血殺「俺と戦いたいなら大会頑張れよ」「一夏、今日は中止にしよう。また今度見に行つてやる」

一夏「ああ、またな」

俺は少し離れたあとに、大切なことを思い出した。

血殺「それと、俺少し出でるからシャルよろしくな！ 小包が来た  
らもりつておいて！」

一夏「ああ、わかつた」

血殺「じゃあな」

その場から消える俺に怒りをこみ上げるラウラ。

「ウラ 「今度の大会で叩き潰してやる」

ある場所

血殺「失礼しま～す」

？？「あら、来てくれたんだ。お姉さん嬉しい！」

相変わらずのハイテンションだ。

血殺「俺は断りに來たんです」

？？「あっ、そうだったの？ お姉さん残念」

見た目は落ちこむどるよつみせているが、内心は酷いことを考えている。

血殺「でも良い人見つけましたよ

？？「何で言う子？」

血殺「織斑一夏ですよ」

？？「ああ、あの子か。良いかもね！採用してあげる

血殺「じゃあ俺はこれで、さいな」

俺は退室した。

あの人は話すだけで疲れる。

血殺「そうだ！ボディーソープ入れ替えるの忘れてた！シャルに電  
話しよ」

プルプル

プルプル

プルプル

血殺「繋がらない。一夏に頼も」

プルプル

プルプル

血殺「あっ、もしもし一夏？ボディーソープ入れ替えるの忘れた  
からシャルに渡しておいて。机の上にあるから。たぶん、今風  
呂入ってると思う。うん、じゃあよろしく」

プツツ

血殺「さて、行くとするか

## 第一整備室

血殺『じゃあ束さん、プログラム送つてください』  
束『うん! 送るね。・・・・・送ったよ』

血殺『ありがと! これも』

確かに送られてきた。

変なウサギがピョンピョン跳ねているプログラムも一緒に

束『このプログラムを使う時は十分に注意してね』

プログラム名はバーサーカー。

狂戦士という意味だ。

血殺『わかりました。じゃあ』

束『うん。またね』

血殺『さつせとインストールしよ』

俺はプログラムのインストールを済ませ、自室に戻った。

部屋内

血殺「ただいま」

シャル「あっ！お帰り」

部屋にはシャルと一夏がいるが、シャルは胸を潰していない。

血殺「シャル、隠さなくていいのか？」

シャル「バレっちゃった」

血殺「そうだったのか」

納得がいった。

といつより俺に責任がある。

一夏「血殺、お前知つてたのか？」

血殺「まあ、先日だけどな」

一夏「何で言わなかつたんだよ」

血殺「お前の部屋番号わからんから」

一夏「マジか！？ 隣だぞ」

血殺「嘘だろ？。何で気付かなかつたんだ？俺！」

馬鹿過ぎる自分にショックを受けた俺であった。

血殺「で？シャルから理由はきいたのか？」

一夏「ああ、聞いた」

血殺「どう思つた？」

一夏「ひでー話だなつて思つた」

一夏は難しそうな顔をしながら言つた。

血殺「お前は親に捨てられたんだつてな」

一夏「何でそんなこと知つてんだ？」

血殺「鈴から聞いた」

本当は鈴から聞いていない。  
自分でこそこそ調べていただけだ。

一夏「そうなのか」

血殺「俺たちはよく似ているな」

シャル「血殺も親に捨てられたの？」

血殺「正確には売られたかな。両親のエゴのせいだ」

一夏「確かに似てるな」

俺は自分で言つた言葉にイライラした。

「俺たちはよく似ているな」と言つ言葉に。

血殺「唯一違うのはその時にそばに人がいたかいなかつたかだな」

一夏「血殺にはいなかつたのか？」

血殺「ああ、俺にはあの時も今も大切な人はいない。家族も恋人も

親友も」

一夏「俺もう親友だと思つてゐる」

血殺「そつとつてもうれるとうれしいよ」

笑みをこぼした。ウソで固められた笑みを。

一夏「で?シャルはこれからどうすんだ?」

血殺「一旦、ここに残る。そして、フランスに行く」

一夏「フランスにだと! ふざけるな血殺!」

一夏は俺の胸ぐらを掴んで叫んだ。

血殺「俺は大真面目だ! シャルも了承した。心配すんな絶対に戻つてくる」

シャル「一夏、血殺を信じあげて」

一夏「わかった」

コンコン

ドアのノック音が部屋に『床くと同時に俺たちの脳中に冷汗が出了た。

一夏、血殺、シャル「――?」

セシリ亞「血殺さん。一夏さんほこりつしゃいますか?」

俺たちは小言で会話を始めた。

血殺「ま、ままずこだわー。」

シャル「ビ、ビうじょう」

一夏「と、とりあえず隠れる」

セシリ亞「血殺さん? 入りますわよ?」

ドアノブが45回転した。

血殺「ちよつとまつた！一夏は今トイレにいるんだ。部屋に入らす少し待つて」

セシリ亞「では、少しお待ちします」

ドアノブが戻つていく。

俺が時間を稼いでいる間に布団の中にシャルを覗いた。

血殺「一夏～。トイレまだ？セシリ亞待つてゐよー。」

一夏「い、今行く！」

俺と一夏は息の合つた三文芝居をする。

一夏「セシリ亞お待たせ」

セシリ亞「い、いえ。全然待つていませんわつ」

布団の中＝風邪気味

というのが俺の頭の中に浮かんだ。

血殺「い、一夏。俺、シャルの看病するから俺ヒシャルの飯取つてきて！」

セシリ亞「デュノアさんは風邪ですか？」

血殺「び、微熱だよ！今寝てるからたぶん大丈夫だと思つ」

一夏「じ、じゃあセシリ亞いこひが」

セシリ亞「そうですわね」

血殺「じ、じゃあな」

バタンッ

嵐が去つていった。

血殺「もう大丈夫だぜ」

シャル「あ、ありがと」

血殺「一夏は遅いと思うから何かする?」

シャル「あ、あのぉ」

言ひながら口元にひらひらと濁らせるシャル。

血殺「ん?」

シャル「さつき話してた血殺の昔の話を聞きたいなあ

血殺「……」

正直驚いた。目を見開いてしまつぐらに意外だった。

シャル「あつ、嫌なら言わなくていいから」

血殺「いや、シャルも聞きたいと思うだらしきの際全部言つよ」

シャル「あ、ありがとう血殺」

シャルの笑顔は確かに可愛かった。

だけど、お前は俺の同類にはなれない

血殺「でも、一夏が来たら止める」

シャル「う、うん」

血殺「俺の本当の両親は……」

俺は千冬に話したことと回りことを全てシャルに話してた。

血殺「これが俺の全てだ」

シャル「血殺は白騎士のパイロットのことが憎い?」

血殺「ああ

話せば話すほど俺は空気が重く感じた。

シャル「でもそれは間違つてると思つ。白騎士のパイロットだつて必死に頑張つたんだから」

血殺「でも目的を果たせなかつたらやつてないと同じじだ」

シャル「・・・」

黙つてしまつた。

強く言い過ぎたかも知れない

血殺「別にもういい。俺の名字は自分の人生のことだから」  
シャル「どういうこと?」

血殺「俺は本当の名字を知らない。研究所では名前で呼ばれていたんだ。だから自分で名字を考えたんだ。その時は研究所のイメージが強くて研究所の4つの実験を思い出したんだ。俺は実験1つ1つを死神と考えて今の名字の四死神が出来たんだ」

俺は真実の中に嘘を混ぜた。

シャル「そんなんに奥深かつたんだ」

血殺「でも、今は違う意味だよ」

シャル「えつ！？」

この娘は感情の入れ替わりが激しい。

血殺「今は今までの俺の人生に関係しているんだ」

シャル「何で？」

血殺「1人目は俺を死ぬ寸前まで追い詰めた奴。2人目は俺から先生を奪つた奴。3人目は俺の友を奪つた奴」

シャル「4人目は?」

血殺「今はいない。しかし、もしかしたらこの学園の誰かが死ぬかもね」

苦笑いで言った。

シャル「それは考え過ぎじゃない?」

血殺「だといいけどな」

最後の一人は俺自ら殺すかもね

コンコン

血殺「はい」

一夏「持つてきたぞ」

血殺「サンキュー! 一夏」

一夏「じゃあ俺は部屋に戻るな」

血殺「ああ、またな」

バタンッ

一夏は自室に帰つていった。  
隣だけど

血殺「シャルつて焼き魚食える?」

シャル「う、うん」

血殺「じゃあ食べようか」

俺は食べ始めるが、シャルはトレイを持って硬直している。

血殺「食べないのか？」飯冷めちゃ「わいわい  
シャル「そ、そうだね。いただきます」「あつ・・・  
ぽろつ  
ぽろつぽろつ

シャル「あつ、あつ・・・  
「

むちゅやくちゅやく飯を落としてるし、割り箸も割れ方がおかしい。

俺はあることに気がついた。

血殺「箸苦手なのか？」

シャル「う、うん。練習してはいるんだけどね

案の定、シャルは箸が苦手だった。

血殺「スプーンもうひとつようか？」

シャル「ええつ？い、いいよ、そんな

血殺「シャルはもつと人に頼れよな

俺は席を立つて、取りに行く準備が出来た。

シャル「うつ・・・  
「

血殺「まあ、最初からなんて誰でも無理だ。少しづつ慣れていくと  
いい

シャル「じゃ、じゃあ、あの・・・  
「

血殺「なんだ？」

俺は沢庵をつまんだ。

もちろん立ち食い。

シャル「え、えっと。その・・・血殺が食べさせて」

# 血殺

あまりにも意外で舌を咬んだ。

得聖白這事一時在叫人方說是大恩上天

血殺「ひのき」つかう。死「死」かう。

ヤマハ「アーティスト」

血殺 ああ、鰐な

俺は鰯の切り身をほぐして少しつまんだ。

血殺「あ、あん」

シャルー・・・あん

口希

卷之三

久しぶりだつたから、身体はついてきているが、頭がついてい  
ない。

血殺「つ、次は何がいい？」  
シャル「次はご飯がいいな」  
血殺「あ、ああ」

女子一 口모모비의 “饭をつまむ。

血殺「あ～ん」

シャル「ん・・・」

あんなこ～んでシャルに“饭を食べさせた。

月曜日 朝 教室

セシリア「そ、それは本当ですの！？」

鈴「う、ウソついてないでしょ？ うね！」

血殺「なんの騒ぎだ？」

シャル「さあ？ ・・」

クラス内での異常で盛り上がりを不思議に思った。

女子A「本当だつてば！」の噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき、四死神君の手作りお菓子が食べられるんだって」

血殺「へえ～。そんなことになつてゐのかあ～。ちょっと知らなかつたなあ～」

女子C「し、四死神君！？」

背後から前触れもなく現れた俺に話をしていた女子数人が驚いている。

血殺「別に優勝しなくても菓子ぐらい作ってやるが、一夏との交際は無理だと思うぞ」

一夏「俺がどうした?」

女子「「「さやああつ!」」」

どこから湧き出でたんだ? 」」」

つつても、俺も同じなんだけど

一夏「で? 何の話だつたんだ? 俺の名前が出ていたみたいだけ?」  
血殺「ああ、たとえ話をしていたんだ」

一夏「どんな内容なんだ?」

血殺「ここから先は有料です!」

俺は手でコインマークを作つた。

一夏「金取んのか! ? 一応聞くが、いくつだ?」

血殺「1万」

一夏「たかっ!」

血殺「当たり前だ。時は金なりつて言ひじやん

意味はまったく違つと思つ。

一夏「じゃあ止める」

血殺「そうか、じゃあ早いとこ席に座んな。じゃねーと、また人型怪獣に襲われるぞ」

一夏「そ、 そうだな

曲がり角の先から聞こえてきた声に反応し、 角に身を潜める俺と一夏。

### 授業の合間

血殺「ほら、 急げ

一夏「ああ、 わかつてゐる

トイレの帰り道。

俺たち男子は教室からトイレまでかなりの距離があるため、 授業が終わったら全力疾走。 トイレが終わったら全力疾走。 といつ感じだ。

ラウラ「なぜこんなところで教師など…」  
千冬「やれやれ…」

千冬「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」  
ラウラ「EJのような極東の地で何の役目があるというのですか！」

血殺「何か言い争つてるな」

一夏「みたいだな」

俺たちはそれを物静かに聞いていた。

ラウラ「お願いです、教官。我がドイツで再びEJ指導を。EJではあなたの能力は半分も生かされません」

千冬「ほづ」

ラウラ「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありますせん」

千冬「なぜだ？」

ラウラ「意識が甘く、危機感に疎く、EJをファッショングループかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割られるなど「そこまでにしておけよ、小娘」

ラウラ「つ・・・！」

凄味のある千冬の声にすくんでしまったラウラ。

千冬「少し見ない間に偉くなつたな。15歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

ラウラ「わ、私は・・・」

千冬「さて、授業が始まるな。さつさと教室に戻れよ

ラウラ「・・・・・・」

無言のままその場を離れていくラウラ。

千冬「そこの男子2人。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

血殺「俺じゃあありません。一夏が聞きたいくて」

一夏「なんでそうなるんだよ！ 血殺！」

血殺「ほんの冗談だ」

あはは、と笑いごまかした。

千冬「そら、走れ劣等生。このままじゃ織斑は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

血殺「そうだぞ。一夏」

一夏「わかつてるつて」

千冬「そつか、ならいい」

一ヤリと笑みを浮かべる織斑先生。

血殺「先生。話があるんですが」

千冬「なんだ？」

血殺「放課後に職員室に行くので、また後で」

千冬「わかつた」

織斑先生は教師としてではなく、一人の戦士のような感じの顔だった。

血殺「行くぞ！ 一夏」

一夏「ああ」

千冬「廊下は走るな。・・・・とは言わん。バレないよ！」と走れ

血殺「その前にトイレの数を増やしてください」

学園の大きさと男子トイレの数が比例していない。

千冬「贅沢言つな。弱優等生」

血殺「弱つて何ですか!? 弱つて! ?」

千冬「ああ、悪かつたな。弱優等生」

血殺「もういいや」

文句を言いながら走つて行く俺と苦笑いしながら走つて行く一夏。

放課後 職員室

血殺「失礼しや～す。織斑先生、お話しがあります」

千冬「ああ、今行く」

血殺「それと部屋を変えましょ～。聞かれると困るのは織斑先生ですから」

千冬「わかった」

空き部屋（毎回同じところの設定）

千冬「で？何の用だ？」

血殺「この間の白騎士事件についてです」

千冬「やはりな、私だと知つているんだろう？」

血殺「ええ。知つてます」

俺は不思議な笑みを浮かべた。

誰もが不思議と思う笑みを。

千冬「なら、聞く事は無いだろ？」

血殺「いえ、聞く事があるんですよ。実は・・・」

千冬「！」

血殺「僕はこれについてはよく知りません。だから本人に言ってください。そろそろあの時期なんで」

あの時期はあの人の大切な妹の大切な日のことだ。

千冬「わかった」

血殺「じゃあ、僕はこれで・・・」「ドゴォンッ！」

千冬「なんだ？」

俺はすぐさま青竜を部分展開して情報を得る。

血殺「どうやら第3アリーナで模擬戦をしているみたいです」

千冬「誰がだ？」

血殺「そこまではわかりませんが、大体わかつています」

千冬「ボーデヴィッシュか」

血殺「たぶんですけどね。僕は先に行って来ます。朱雀展開ー！」

”次元加速“

ラウラ「面白い。世代差といふものを見せつけてやるが！」

第3アリーナ

シャルの手がシュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーブレードに捕まっている状況だ。

血殺「シャル！下がれ！」

俺は上空から一気に急降下してラウラに突っ込んだ。

ラウラ、一夏、シャル「！」

血殺「”レッドライズ”！▼e▼ライフル」

名を言つた瞬間、60の”レッドライズ”が一つの銃に変わる。

血殺「オーバーショット！」

ラウラ「ちつ！」

俺の銃撃を避けて後退していくラウラ。

ラウラ「また貴様か！この際貴様も潰してやる！」

血殺「こんな事が2日前にあつた氣がするのは俺だけか？」

突っ込んでくるラウラ。血殺はそれに対抗するかのようにレッドライズを20個しまい、翼の4本の剣を抜く。血殺はその4本の剣を2本になるように付けた。見たまんまを言うと前後に刃が突き出ている剣と言える。

ラウラ「貴様が何をしようとした私には勝てない！」

血殺「そうかい。だがそれは勘違いだ！」

二刀連流第壱ノ舞 八重桜

ラウラ「！…！」

血殺「！…！」

千冬「これだからガキの相手は疲れる」

血殺「織斑・・・・先生」

千冬の持つている2本のHSのブレードにより2人の剣が止められた。

千冬「模擬戦をやるのは構わん。・・・が、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならっては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

ラウラ「教官が仰るなら」

ラウラはシュヴァルツェア・レーゲンを待機状態に戻す。

血殺「自分は最初からそのつもりでした」

俺も朱雀を待機状態に戻す。

千冬「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな?」

一夏「は、はい」

シャル「僕もそれで構いません」

千冬「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散

!」

保健室

鈴「別に助けてくれなくてよかつたのに」

セシリ亞「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

俺は最後しか居なかつたから知らないが、聞いた話だと1対2なのにラウラにフルボッコされてたとか。

一夏「お前らなあ・・・。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

鈴「こんなの怪我のうちに入らな いたたたつ！」

セシリ亞「そもそもこうやって横になつていること自体無意味 つうつう！」

強がつてゐるが、実際は危ない状況だ。  
ISが強制解除される時点で危険。

シャル「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

血殺「一理あるな」

だけど、怪我をしてるかなんて関係ナッシング。

俺とシャルは年中無休で人を苛めます。

鈴「ななな何を言つてゐるのか、全つ然わからんわね！」

セシリ亞「そ、そういう邪推をされるところさか氣分を害しますわねっ！」

感情が面に出過ぎだろ

血殺  
一  
はいはい、わかつたから「

ね  
?

セシリア「不本意で

とお茶を飲むセミに一合の銅

「夏一、ま、先生も落ち着いたら帰ってきていいで話しかねば、しまり休んだら……」

ドカーンと勢い良く保健室のドアがぶつ飛ばされ、女子がなだれ込んだ。

女子B「織斑君！」

女士曰  
四死祁君！」

血殺「な、なんだ？」

女子「「「「「」」」」

差し出されたのは一枚の紙。

シャル「な、なになに・・・?」

一夏「? 今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締

め切りは・・・？」

女子A「ああ、そこまでいいからーとこかくつー」

女子G「私と組もう、織斑君！」

女子F「私と組んで、デュノア君！」

女子I「一緒にやつ、四死神君！」

手が四方八方からによきによきと出でてくる。

まずいな、このままじゃあシャルの正体がばれる。しかし、俺は組みたい奴がいるし、

仕方ない

血殺「悪いみんな！ 一夏はシャルと組むらしいし、俺はもう先着がいるんだ！ また今度な」

女子C「先着がいるんじや、仕方ないか」

女子H「まあ、男同士も絵になるし」

さつきの巻き戻しかのよつこ、女子が去つていく。

血殺「悪いな一夏、俺は用事あるからこれで」

一夏「ああ、じゃあな」

用もないのに保健室を退室する俺。

白室

血殺「はあ、疲れたなあ。ゆっくり寝よ。月末に大会もあることだし

## ブルー・ダイズ／レッド・スイッチ（後書き）

まあまあですね。

それでも一応、しつかり考えました。

口調とかおかしいのはすいません。

では、また次回

フラインド・アウト・マイ・マインド（前書き）

一部分だけエグい部分があります。

6月 最終週

一夏「しかし、すごいなこりや・・・」  
シャル「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。1年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさつそくチェックが入ると思うよ」

一夏「そりいえば、血殺は?」

シャル「さあ? 朝にはもう居なかつたから」

一夏「そうなのか、何やつてるんだ? あいつ」

血殺「俺にはいろいろと事情があんだよ!」

一夏、シャル「!」

一人とも誰? って顔をしている。

まあ、無理もない。マイクで目を一重から二重に変えて、ヘッドホンは外したし、赤のジラ被つてるし、女のTシャツ着てるからわからなくとも無理もない

一夏「もしかして血殺か?」

血殺「おうよ、随分変わるもんだろ?」

シャル「すごい。全くわからない」

あのなシャル、別に感心するところじゃないぞ

血殺「一応、正体を隠している身だからな気をつけないといけないんだよ。それに神崎 花蓮って言う偽名も使つてるしな」

一夏「ふーん。やうなのか

どうでもよさそうに言つたなー。

シャル「そりいえば、血殺つて誰と組むの?」

血殺「知らない。わざと抽選にしたから」

一夏「えつ? なんでだ?」

血殺「その方が女子には公平だから」

一夏「理由はまったく違つけどね

シャル「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

一夏「1年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな

シャル「えつ? どうして?」

一夏「待ち時間に色々考えなくて済むだろ。こうこうのは勢いが  
肝心だ。出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

一夏の言いたいことの意味がまったく分からな

血殺「最初も最後も変わんないけどな」

シャル「僕だったら1番最初に手の内を晒すことになるから、ちよ

つと考えがマイナスに入つていたかも」

血殺「どのみち、手の内は晒すけどな」

ダメ出しされて一人は言葉を失つた。

シャル「あ、対戦相手が決まつたみたい

一夏、シャル、血殺「「えつ?」」

一夏たちの一回戦の対戦相手。それはラウラと俺のペアだった。

1 2 3 4

試合開始まであと5秒

アリーナ

ラウラ「一回戦で当たるとはな。待つ手間が省けたといつものだ」  
一夏「そりゃあ何よりだ。こつちも同じ気分だぜ」

開始。

一夏、ラウラ、「叩きのめす」

一夏は開始直後の“瞬時加速”を行う。

一夏「おおおつー！」

ラウラ「ふん・・・・」

ラウラは右手を突き出し、“A.I.C”《アクティブ・イナーシャル・キャンセラー》を使つ。

一夏「くつー！」

ラウラ「開始直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

一夏「・・・そりやどうも。以心伝心で何よりだ」

ラウラ「ならば私が次にどうするかもわかるだろ？」

ガキンッと巨大なリボルバーの回転音が轟き、大型レール砲の初弾が装填される。

シャル「させないよ」

シャルが一夏の頭上からアサルトキヤノンをラウラに向かって放つ。

ラウラ「ちつー！」

シャル「逃がさないー！」

後退するラウラに“高速切替”《ラピッド・スイッチ》で呼び出し

たアサルトライフルで射撃する。

血殺「俺もいるんだぜ。シャル！」

今回は青竜を展開している俺がラウラの前に出て青竜のウイングを使い突風を巻き起こして放たれた弾を全て吹っ飛ばす。

血殺“青き突風”《あおきとつふう》！ からの“逆鱗”《げきりん》！

巻き起こした風が炎に変わりシャルと一夏を襲う。

シャル「一夏引くよ一夏」

一夏「ああ」

ラウラ「逃がすか！」

後退するシャルと一夏を追走するラウラ。

血殺「待て！ボーデヴィッシュ」

ラウラ「私に指図するな！」

血殺「言うこと聞かない奴には……仕置きだ！……」

ちょっとキレ気味の俺は“竜の尻尾”《ドラゴンズテイル》を使いラウラを地面に叩き落とす。

ラウラ「貴様！ 何をする！」

血殺「それはこっちの台詞だ！ いいか！？ 冷静さを失うな！

それを失っては勝てるものも勝てない！」

俺は腕を組みながら、見下すような目で言った。

ラウラ「ふん。貴様の指図は受けない」

血殺「なら、御自由にどうぞ。負けたら國に帰つてもうひからな」

ラウラ「では私が勝つたら、貴様がここを出でいけ」

血殺「いいぜ。勝つたら、な」

言いたいことだけ言って俺はアリーナの隅に行き、座り込んだ。

血殺「さて・・・ここからが本番だぜ。一夏」

一夏「これで決める。」

”零落白夜“を発動させた一夏は、ラウラに向進する。

「ラウラ「無駄なことを…」

ラウラは“AICO”で一夏の動きを止めた。

一夏「…………ああ、なんだ。忘れてるのか？それとも知らないのか？俺達はふたり組なんだぜ？」

「ラウラ「…？」

ラウラは慌てて視線をうごかすが、遅かった。シャルのショットガンが火を噴き、ラウラの大型レールカノンを爆散させた。

「ラウラ「くつ・・・・！」

シャル「一夏…」

一夏「おつ…」

再度、”雪片式型“《ゆきひらにがた》を構え直しラウラに突っ込んだ。

キュウウウン・・・・・・・・・。

起きたのはエネルギー切れ。

”零落白夜“を使い過ぎたのだろう

一夏「なつ…？」にきてエネルギー切れかよ！」

「ラウラ「限界までシールドエネルギーを消耗してはもう戦えまい！」

シャル「やらせないよ…」

「ラウラ「邪魔だ！」

援護しようとしたシャルにワイヤーブレードで牽制する。

シャル「うあつ！」

一夏「シャルル！くつ・・・・・」

ラウラ「次は貴様だ！墮ちりつー！」

一夏「ぐあつ・・・・・！」

白式から力が無くなり、床へと落びる一夏。

シャル「まだ終わっていないよ」

シャルは一瞬で超高速状態へと移りラウラとの間合いで縮める。

ラウラ「なつ・・・・！“瞬時加速”だと！？。そんなデータは無かつた！」

シャル「今、初めて使ったからね」

ラウラ「まさか、この戦いで覚えたというのか！？」「だが私の停止結界の前では無力！」

ラウラは右手を前に”AIC”の体勢になるが、後方から射撃を受け体勢を崩す。その射撃をしたのはギリギリのシールドエネルギーがギリギリ残っていた白式だった。

一夏「これなら”AIC”は使いまい！」

ラウラ「こ、のつ・・・死に損ないがあああつ！」

シャル「どこを見てるの？」

終わつたな

シャル「この距離なら、外さない」

ラウラ「”盾殺し”『シールド・ピアース』！」

ズガンツ！――！

ラウラ「ぐうづつー！」

ラウラの腹部に、パイルバンガーの一撃が叩き込まれる。

ズガンツ！ズガンツ！ズガンツ！

続けざまに三発を撃ち込まれ、ラウラの体は大きく傾く。

次の瞬間、異変が起きた。

ラウラ「ああああああつ――！」

血殺「！？ あれは！ “VTS” 《ヴァルキリー・トレース・シ

ステム》――！」

何故だ？あれの実用おろか研究は行つてはいけないはず

一夏「”雪片“ 《ゆきひら》・・・・！」

一夏が刀を握りしめ、中段に構えた。刹那、シュヴァルツェア・レ

一ゲンだった黒いEISは千冬の太刀筋で、一夏の刀を弾き白式に向かって刀を振り下ろす。千冬の戦法を知っていた一夏はかろうじて避けたが、刃が軽く振れた左腕からじわりと血がにじんだ。そして白式は光となって一夏の全身から消えた。

一夏「うおおおおお！」

白式は待機状態になつたのにも関わらず、VTSに走つて突っ込む一夏。

血殺「何やつてんだ！ 馬鹿！」

俺は一夏の首を掴んで動きを封じた。

一夏「離せーーー！ あいつ、ふざけやがつてーーー！ ぶつ飛ばしてやるーーー！」

血殺「落ち着け！ 一夏！ そんなんじや見えるものも見えなくなる！」

一夏「あいつ、千冬姉と同じ剣術を使つてきやがつた。あれは千冬姉だけの技なんだ！」

こいつはラッキー

野郎のVTSなら丁度良い

血殺「へえー。 あいつ、織斑先生の技使うんだあー。じゃあ、俺がやる！」

一夏「ふざけるなー！ 血殺！ あいつは俺が！」

血殺「エネルギー切れだろお前」

一夏「くつ！」

一夏は何も出来ない自分に腹を立たせている。

血殺「大丈夫だ！俺の親友は、俺の大切な人は俺が守る！そのかわり、今度はお前が誰かを守れ」

一夏「わかった。ただし、負けんなよ！」

血殺「ああ、わかっている」『行くぜ！青竜！』

青竜『あれをやるのね』

血殺「”青炎龍刀”『せいえんりゅうとひ』！」

俺は青竜唯一の近接戦闘の武器を展開する。

”青炎龍刀”は文字通り、青い炎を纏つた刀。

血殺「ワンオフ・アビリティー発動！ “絶永龍域”『ぜつえいりゅういき』！」

俺の体が竜に包まれ、姿を現すと体そのものが竜のようになつていた。

血殺「フツ・・・・」

刹那、俺は黒いISとの間合いを一瞬で詰め、そのISを切り裂いた。そして、黒いISから弱々しい目をしたラウラが現れた。

血殺「やつぱりお前じや、一夏には適わなかつたな。 ラウラ・ボーデヴィッヒ」

そうそう、なんで、龍刀かと言つと

絶永龍域時じやなれば、ただの刀だからだ

保健室

ラウラ「う、あ・・・・・」

ぼやつとした光が降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました。

千冬「気がついたか」

ラウラ「何が・・・・・起きたのですか・・・・?」

千冬「ふう・・・・・一応、重要案件である上に機密事項なのだが  
な」「バーチシステムは知っているな?」  
ラウラ「ヴァルキリー・トレース・システム・・・・」

軍人なら誰もが知っている言葉だ。

千冬「そうだ。IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・全てが禁止されている。それがお前のISに積まれていた」

ラウラ「…………」

千冬「操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意識……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになつていたらしい」

ラウラ「私が……望んだからですね」

ラウラは手を強く握り締めた。

手元にあつた布団のシーツにしわが出来るほど強く。

千冬「ラウラ・ボーデヴィッヒー」

ラウラ「は、はいっ！」

千冬「お前は誰だ？」

ラウラ「わ、私は……私……は、……」

言葉の続きを出せないラウラ。

今はラウラ・ボーデヴィッヒといつも織斑千冬だからだ。  
VTSを使えばの話だが。

千冬「誰でもないなら、ちようどいい。お前はこれからラウラ・ボ

ーデヴィッヒだ」

ラウラ「あ……」

千冬は立ち上がりドアへと向かつ。

千冬「ああ、それから」「お前は私にはなれないぞ」

そり、言い残して千冬は立ち去つた。

「ラウラ「ふ、ふふ・・・ははっ」

血殺「笑う元氣がある程なら大丈夫だな」

「ラウラ「・・・・四死神・・・血殺」

俺は近くに寄らず、入ってきてすぐ側の壁に寄つ掛かつた。

血殺「結局、お前は一夏には勝てなかつたな」

「ラウラ「ああ、私は負けた。あいつに、そしてお前に・・・」

まあ実際のところ、試合は中止だからあの賭けはなしになるわけだ。

血殺「ふん。やつぱりあいつの言つ通りだ」

「ラウラ「あいつ?」

血殺「クラリツサだよ。昔、出合つて仲良くなつたんだ」

「ラウラ「まさか、お前に情報提供したのもか?」

「ラウラは少し驚いた顔をした。

予想が外れたような顔。

簡単に言えば、少し間抜けな顔だ。

血殺「ああ。あいつ、お前のことを相当心配してたぞ」

「ラウラ「クラリツサめ、余計なことを!」

血殺「そういうえば、戦いのためにお前は作られたらしいな」

「ラウラ「ああ、そうだが」

血殺「俺は暗殺のために育てられたんだ。ドイツで」

「ラウラ「なつ!」

祖国に渴くしてこらからか、かなり動搖している。

血殺「俺のこの眼帯の下の目は特殊でね、時間と空間を操るんだ」  
ラウラ「時間と空間を操るだと！？」

血殺「けど、時間の方のは相手がIISを展開していると効果が発生しないし、空間の方は対象が生き物だと意味が無い」

ちょっとぐらい嘘をつこても良いか。結局殺らないといけないんだから

ラウラ「だが何故、お前がドイツ！」

血殺「親のエゴだよ。金の欲しさに俺を売ったんだ」

研究所で聞いた話だ。眞実ではないと思へ。

ラウラ「…………」

ラウラ「お前も1人なんだな」

血殺「だから、俺には家族がない。でも、クラリッサは家族だと思えるかな」

血殺「いいや。1人じゃないさ、一夏が居て、シャルが居る。そして、何よりボーデヴィッヒが居るからな」

ラウラの顔はボワッと真っ赤に染まった。  
夕焼けのせいではなさそうだ。

ラウラ「……でいい」

血殺「ん？」

ラウラ「ラウラでいい」

少しは距離が縮んだかな？

血殺「じゃあ、俺のことも血殺で呼んでくれよ。」ラウラ「」

ラウラ「り、了解した」

血殺「じゃあなラウラ。また明日」

ラウラ「助けてくれて礼を言つた」

血殺「また助けてやるよ」

そう言つて、俺は部屋を後にした。

血殺「言つた通りだろ?」

シャル「確かにね。一夏、七味取つて」

一夏「はいよ」

シャル「ありがと」

血殺「ん?なんだ?あれ」

少し離れたところで落胆している女子がいた。

女子C「・・・優勝・・・チャンス・・・消え・・・」

女子E「交際・・・無効・・・」

女子「「うわあああああああんつー」」「」

バタバタと数十名の女子が消えていく。

一夏「な、なんだ?」

あれのことか

血殺「! あれって」

一夏「ん?」

数十名の女子が消えた後に呆然と立ちつくしている筈がいた。

一夏「あつーそういえば

やつぱり筈に近づく一夏。

血殺「さて、一夏は筈にどんな風に起こられるかな?俺に殴られる。

シャルは？」

シャル「う~ん。蹴り飛ばされる！」

第「そんな事だと思ったわ！」

一夏「ぐはあつ！」

第の足は迷うことなく一夏の溝にヒットした。

血殺「シャルの予想的中したぜ」

シャル「何かうれしくない」

血殺「まあ、良いじやん」

真耶「四死神君、織斑君、デュノア君。朗報です！」

俺には微かに見えた真耶の胸が。

血殺「先生・・・・・見えてます」

真耶「えつ？」

血殺「ブラと胸が見えてます。ちなみにロベルト」

俺は夕食のプリンと唐辛子を食べながら無心で言った。

真耶「し、四死神君！ 先生は真面目に」

血殺「真面目に話をするなら尚更でしょ」

つーか、無理して大人の服を着るからいけないだよ！

真耶「し、しかしですね」

血殺「早く本題に入つて下さい。食器片付けたいので」

食器と言つても、唐辛子の種が転がつてゐるせりとプリンが乗つてた皿に、スプーンのみ。

真耶「そ、そうですね」

血殺「で？何か？」

真耶「今日から男子の大浴場が解禁になつたんですね！」

## 大浴場

一夏「いやー。良い湯だ」

血殺「これが大浴場なんだ。そのままだな」

一夏「そういえば、血殺つてこういうの初めてか？」

血殺「ああ、今まで入つたことがない」

ほとんど無駄な外出はしなかつたし、大人数で入るわけでもないから風呂は普通の大きさだった。

一夏「へえー。日本人なのに珍しいな」

血殺「まあな。それにして、シャルがいないと静かだな」

一夏「流石に、男が入ってんじゃあな」

血殺「確かにな」

カラカラカラ

なんだ？ 今の効果音？ 幻聴か？

シャル「お、お邪魔します」

一夏「なつ！？」

血殺「何やつてんだ？ シャル」

先ほどの音は幻聴ではなかつた。

一夏は顔が真つ赤だ。

ガキンちよだなあ」

シャル「ふ、2人と一緒にお風呂に入つてみようかなつて」  
血殺「入ればいいじやん。風呂は沢山で入つた方が楽しいらしいし」

一夏「なつ！ 血殺！ お前！」

血殺「俺は2人だけに言いたいことがある」

シャル「ぼ、僕も」

一夏「わ、わかつたよ」

諦めがついたのか。

あつさり承諾した。

シャル「あんまりこつち見ないで。血殺たちのえつち

血殺「別に良いじやん。減るものではないだろ？」

シャル「そ、そういう問題じやないよ」

シャルまで顔が真っ赤になつてゐる。  
そんなんじやあ、逆上せるぞ

血殺「さて、本題に入るか

一夏「ああ

シャル「じゃあ、僕から言うね

シャルは少しため息をして話を始める。

シャル「僕ね、決めたんだ僕の在り方を。血殺達が教えてくれた僕の在り方をね」

一夏「そ、そうなのか

血殺「それでいいのか？」

恐らく明日から女子でいるみたいだからな。部屋に制服あつたし

シャル「うん、もう決めたんだ」

血殺「なら、もう大丈夫だな。フランスに行つても

シャル「うん」

血殺「じゃあ、今日出るだ。もう設計図は出来ている

本当は一、三日前に出来ていたけど、トーナメント戦があつたから止めていた。

一夏「本当に行くのか？」

血殺「心配なさんな

一夏「血殺は心配しなくても帰つてくるのは知つてるから

一夏はニヤツと笑つた。

血殺「じゃあ俺な、実は明日俺がIISを動かせる」とを公式発表し  
よつと思つんだ」

シャル「で、でも。そしたら研究施設はどうするの?」

血殺「辞めるしかない」

研究材料に成りたくないしね。

一夏「どうということだ? 研究施設つて」

血殺「お前には言つてなかつたな。俺はIISの研究施設で働いているんだ。そんでも白騎士以外の日本のIISは全部俺が設計したんだ。もちろん白式も」

一夏「白式つて血殺が作ったのか?」

血殺「作ったのはうちの部下。俺は設計しただけ」

そう、俺は設計しただけ。

一夏「でも、すげーよ」

血殺「そうかい。じゃ、俺は上がるよ」

シャル「あ、後でね」

一夏「またな」

血殺「ああ」

カラカラ

ふー。流石に逆上せるな

風呂を出た俺は外出用の服に着替えて自室に戻った。



血殺「さてと、始めるか」

そう言って、俺は1人しかいない部屋で淡々とある準備をした。その手にはアイスピックが握られている。

血殺  
フー

グシャツ！

俺は自分の右眼をアイスピックで刺した。

血殺「ぐつ！ あああああああつーーー」

ボトツ！

アイスピックで右眼をえぐり出した。

血殺「グアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！！」

バンツ！

シャル「どうしたの！？血殺！」

悲鳴に気づいたのか、シャルがドアを突き飛ばして来た。

シャルー大丈夫！？今、先生を呼ぶから」

シャル「で、でも・・・・・」

シャルは涙目になつてゐる。

悪いことをしてしまつたな

血殺「大丈夫だ。心配すんな」「それより、行くための支度をして

シャル「…………うん…………わかつた…………」

## 血殺さでと瀕すか

グチャッ！

俺は自分の目を手で潰した。

自室 22:00

血殺「じゃあ、行くか」

シャル「うん」

血殺「窓から出るぞ」

シャル「うん」

朱雀展開

俺と同時にシャルもリヴァイヴを展開する。

シャル「バレない?」

血殺「大丈夫。一瞬だから、掴まつて」

シャル「う、うん」

血殺「行くよ。」次元加速“”

フランス 15:00

血殺「一瞬だつたろ?」

シャル「本当に一瞬だつた

血殺「じゃあ、行くか。場所わからないから教えてくれ  
シャル「う、うん」

## デュノア社前

血殺「じゃあ、入るか」

シャル「うん。あと、最初は召使いの人が出ると悪いよ」

ピンポーンヒンター ホンが鳴る音が響く。

召使い『はい?』

インター ホン越しで聞こえてきたのは、男性で20代くらいの声だった。

血殺「はじめてまして、私は日本のITSの研究をしている者ですが、社長のデュノアさんに会いたいのですが、よろしいでしょうか?」  
召使い『お名前をよろしくでしょうか?』

血殺「四死神 血殺です」  
召使い『少々お待ち下さい』

作者より

フランス語が分からぬから日本語だけど、血殺は普通に全部の国の言葉を使えます。

5分後

召使い『只今、門を開けますのでお待ち下さい』

ギイイイイイイイといふ音を発しながら門が開いてゆく。そして、さつきの声の持ち主が中から出でてきた。

召使い「お待たせ致しました。どうぞいらっしゃく

召使い「少々お待ち下さい。そろそろ来られますので」

そう言って部屋を出ていく召使い。部屋には2人だけが取り残された。

血殺「どうやら、あの召使いはシャルのことを知らなかつたようだな」

シャル「みたいだね」

血殺「だけど、これからが本番だ」

シャル「うん、わかってる」

数分後

ガチャツ

シャル父「すまないね。こちらにも事情があつ・・・・て・・・」

シャルの父はシャルを見た瞬間言葉を失つた。

血殺「はじめましてデュノアさん。自分は四死神血殺といいます

シャル「お久しぶりです。お父さん」

シャル父「どうこうとかね？」四死神君

「すいぶん焦った様子だ。

血殺「ああ、言ひそびれてました。私の彼女のシャルロット・デュノアです。まあ、言わなくてもわかりますよね？実の娘なら

「シャル父」な、何故あなたがシャルロットと・・・」

血殺「無駄話はそこまでにしましよう。本題に入ります。デュノアさん。あなたはシャルを使って織斑一夏の情報を手に入れようとしたしましたよね？」

俺はわざと話を切った。

なんでシャルと知り合つた？なんて聞かれたら答えづらいし

シャル父「・・・・・ええ・・・・・」

血殺「シャルから理由は全て聞きました。そして、家族のことも

「シャル父」・・・・・」

シャルの父親は死んだように無言だ。

何も言わない。反論も、謝罪も

血殺「あなたの欲しい物は私が設計しました。もちろん、フランスの第3世代型です。あなたが私の要望に応えてくれるなら渡しますよ」

シャル父「一体、何をすればいい？ いくら出せば譲つて貰える？」

「金はもうこらない。金で手に入らぬものがあることは俺が一番よ

く知っている

血殺「簡単です。もう一度とシャルを道具として扱わないでください。そして、シャルは今まで通りの生活をさせてあげてください」

シャル父「わかつた」

血殺「では、これがその設計図です」

血殺が設計図を渡した瞬間、ドアが勢いよく開けられた。

シャルの父親と同年代ぐらいの女性。おそらく、本妻の人だらう。

婦人「あなた！なんでこんな泥棒ネコの娘の男の言いなりになつてるの！？」

シャル父「お前……」

血殺「では、僕らはこれで失礼します。夫婦喧嘩に巻き込まれたくはないので」

俺とシャルが立ち上がり去ろうとした時、婦人が俺の腕を掴む。

婦人「あなた、何様のつもりなの？」

血殺「あんたこそ、何様のつもりだ？ あんたの人生は俺が握つていると言うのに。自分の立場がわかつてないだろ？」

婦人「ふん。あんたに助けられるぐらいなら、不味い」ご飯を食べた方がマシね」

意気込みは良し

だが、相手がひよっこではな

血殺「じゃあ、今すぐ務所にぶち込んでやるつか？」

婦人「なつ・・・・・！」

血殺「自分だけじゃ何も出来ないくせにえらがつな」と呟つてんじ  
やねー！」

婦人「…………」

ほんの少しキレただけで、金魚みたいに口をパクパクさせ、何も言  
わなくなつた婦人。

血殺「では、僕らはこれで帰らさせていただきます。学校に遅れる  
と面倒なので」

シャル父「あ、ああ、ではな」

デュノア社前

シャル「急に怒鳴るからビックリしちゃつた」

血殺「全然キレてなかつたけどな」

シャル「え？ そうなの？」

血殺「ああ、全くな」

正直、本気で怒つたことなどないけどね

シャル「じゃあ、帰ろつか」

血殺「そうだな。朱雀展開！」

血殺 11:30

血殺「はあ、疲れた。もう寝よつせ?」

シャル「うん、そうだね」

血殺「おやすみ、シャル」

シャル「おやすみ、血殺」

次の日 食堂

女子A 「昨日、フランスの第3世代型が出来たんだって！」

女子C 「あっ！それ知ってる！日本人が設計図を渡したんでしょう！」

女子つて情報が回るのが早いな。まつ、いつか。教室行こ

やつぱりか

入つて来たのは女子の制服を着たシャルだった。

ガラガラッ

真耶「き、今日は皆さんに転校生を紹介します」

教室

シャル「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてようじくお願いします」

真耶「ええと、デュノア君はデュノアさんと言つひでした」

女子A「え？ デュノア君つて女？」

女子D「おかしいと思った！ 美少年じゃなく美少女だったわけね」

女子B「つて、四死神君！ 同室だから知らないことは・・・」

まずい！ 感づかれた！

女子F「ちょっと待つて！ 確か、昨日つて男子が大浴場使つたわよね！」

あつ、逃げる準備しよう

バシーン！

ドアを突き破つてきたのは鈴だった。

鈴「一夏ああああつ！ 血殺うううつ！ 」「死ね！ ！」

鈴はエスアーマーを展開して、衝撃砲を放つ。

あつ、間に合わない

死んだなこれ

右眼があればなあ

そんな風に思つてゐる俺だったが、現状は変わらなかつた。なぜな

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや。それはないから、夢に違ひない。そろそろ起きろ俺！

ラウラは俺の胸ぐらを掴み、自分の唇に俺の唇に重ねた。

血殺「なんだ。ラウラもつ大丈夫な・・・・・・」

俺たちを守つたのは意外にもラウラだった。

血殺「・・・あれ？死んでない？」

ら、現実だから。

「あ、お前は私の嫁」ある!! 決定勝負!! 離婚は忍ゆん!!

血殺  
・  
・  
・  
・  
嫁?

卷之三

待て待て待て！ リヴァイブを展開するな！ そして狙うな！

## シャル「バイバイ」

血統  
世系

ファインド・アウト・マイ・マインド（後書き）

最後の方が少しテキトーになつてますが、まあ頑張りました。

では、また次回

海に着いたら十一時ー（前書き）

小説を2話分使って作りましたが、字数は今までとほとんど変わりません。

海に着いたら十一時！

朝 自室

血殺「ん・・・・・」

さすがに先日の疲れは取れないか

ふに

なんだ？ 今の効果音？ 作者の書き間違えか？ そういえば、さつきから変な物が足に当たつてゐるな。 気のせいいか？

ふにふに

違う！ 何かいる！ だ、だが、朱雀達を出した覚えがないな。これは何だ？

ふにふにゅつ

ラウラ「ん・・・・・・」

今の声はラウラかー？ めくつて見ればいいか。 誰もいない事を願う

ガバッ！

めくつた矢先に見えたのは、全裸で布団の中であるまるまるのラウラだつた。

バサツ

げ、幻覚だ！ 絶対そうだ！ 疲れているんだ！

ガバッ！

俺は一度布団を掛けもう一度布団をめくる。

血殺「幻覚であつて欲しかつた」

ラウラ「ん・・・。なんだ・・・？朝か・・・・・・？」

全力全開でコイツを叩き斬りたい

血殺「なんでいるんだよ！？ しかも全裸で・・・・・」

ラウラ「夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ」

血殺「クラリッサにか？」

ラウラ「ああ、そつだが」

訂正、コイツじゃなくて野郎を叩き斬りたい

血殺「最近は嫌なこと続きだなあ。まあ、考えるだけ無駄か」

ラウラ「日本では」うううううのが定番だと聞いたが・・・違うのか？」

血殺「ふ〜ん。せつこう」とか

ドンッ！

俺はラウラを押し倒て、ラウラに覆い被さるような大勢をとる。

ラウラ「な、何をする気だ！？」

血殺「お前の言つてた。定番とやらをやつてやるうかなつて、でも、  
氣をつけろよ。結構キツいから特に女の方は」  
ラウラ「や、やりたければやればいい」

意気込みは良し。だが相手がひよつこではな。

血殺「残念だが俺がお断りだ。もうちよい胸が大きくなつたな」  
ラウラ「む、無理だ！」

血殺「じゃあ、これはお預けだ」

ラウラの上から離れた。

ラウラ「なつ！」

血殺「お前は急げよ。今日のSHMは織斑先生だからな」

ラウラ「や、そつであつた！」

まつ、俺は遅れても全く問題ないがな。しかし、このアドバンテージはとてもテカい。普通は授業を受けたり提出物を提出しないといけないが、何もしなくとも成績は誰よりも高いと言つことはない

血殺「さてと・・・飯食いに行くぞラウラ」

ラウラ「ああ」

俺たちは着替えて食堂に向かつた。

食堂

血殺「さてと、何を食おうかな~」

ラウラ「私はパンとコーンスープにしてみる」

血殺「じゃあ、俺は塩ラーメンにしね」

さあ、感づけ！ 四死神 血殺と塩ラーメンの奏でる回旋曲で！

o・o「塩としおをかけただけです」

ラウラ「変なギャグを言つくな

血殺「た、たまたま、なつちまつただけだ！俺は悪くない！」

ぐつー残念な子供のよつこ見やがつてー わつきのお前もこんな感じだつたぞ！

そんな事を考へながら、食券を出してラーメンを受け取った。

血殺「あの席空いてるからあそこに座るわ」

ラウラ「やうだな」

ラーメンが乗つたお盆を持つて行き、席に着いた。

血殺「いただきます」

ラウラ「なんだ？その言葉は？」

ほつ、いただきますを知らないのか

血殺「ご飯を食べる時に言つ言葉。まあ、儀式みたいなもんだよ」  
ラウラ「せうなのか」

そろそろ聞いておくか

血殺「一つ聞きたいんだが」

ラウラ「なんだ?」

血殺「先日言つていた。お前は私の嫁にする! つてビツつう意味?」

あの日以来からラウラがぶつ壊れたからな。

ラウラ「日本では、気に入つた相手のことを 僕の嫁 とか 自分の嫁 とか言うと聞いたぞ」

血殺「あのバカが! 変なこと吹き込みやがつて!」

今度、あいつの飯に放射能セシウムでも入れてやるか

ラウラ「違うのか?」

血殺「少しな」

少し? 全く違うな。

ラウラ「では、どこが違う!?」

血殺「ただ気に入つてている相手に 僕の嫁 とかを使うのはあつてる。だが、付き合いたい相手や結婚したい相手にはちゃんとした言葉があるんだよ」

たぶんこれであつてるはずだ。

ラウラ「そ、 そうなのかー?」

血殺「それに、 相手に お前は私の嫁だ なんて言わないぞ  
ラウラ「な、 なんだとー!」

血殺「じちあつせめ。 じゃあな、 遅れるなよ

話をしている間に食べ終えた俺はゆっくつとその場を離れた。

早いとこ、 教室に行くか

血殺『もすもす？ ああ、お久しぶり。 え？ 黄竜のテストをする！？ 前にも言つたけど、俺はもう2度と黄竜は使わないから は？ 予備システム？ そんなもん作ったのか！？ 別に朱雀達を部分展開すればいい話だし。 黄竜専用の武器ねえ～。 まつ、考えておくよ。 ああ、じゃあね』

束さんも無理が多い人だ

白虎『だつてよ。 どうすんの？ 血殺』

無理矢理コントакトを開いた白虎が聞いてきた。

血殺『もらつても使わなければ良い話だ』

玄武『使わなければならぬ時が来たら？』

青竜『それつてどんな時？』

黄竜を使わなければならぬ時ねえ

朱雀『例えば、 血殺にとつての大切な人を守る時とか』

血殺『それは無いだろ。 みんな強いから』

白虎『強いつて言つても私達の初期設定に負けるよつた奴らじやん』

玄武『一理ある』

お前らは俺が改造してやつたからだろ

青竜『さすがに大丈夫だろ』

朱雀『どうだる？』『一レムに遅れを取るよつじやわからぬわよ』

血殺『いざという時は使つや。 その前に黄竜とのコントакトを取れよつにしないと』

黄竜とのコンタクトを最優先しないとな

白虎『え？ 黄竜の中にもう魂が入ってんの？』

朱雀『束がそう言つてたじやない。忘れたの？』

白虎『興味の無いことは忘れるからね』

俺は大切なことばかり忘れていくよ

青竜『それヤバいよ』

玄武『認知症つてやつ？』

認知症つてもつと違う意味だつた気がする。

白虎『いやいや、さすがに早すぎでしょ』

血殺『じゃあ、先日の大会で俺と組んだ奴の名前は？』

白虎『興味無いから忘れた』

こいつはマズいな。

青竜『ヤバい』

朱雀『ヤバいわね』

玄武『ヤバすぎでしょ』

白虎『あーーーうるさいーーーうるさいーーー』

血殺『白虎がキレたことだし、コンタクトを終了するか』

白虎がキレると数時間はつるそこからな。

朱雀『うん。またねー』

青竜『も早く切る』

玄武『じゃあね～』

白虎『逃げるな！』

すぱあんつ！

教科書で頭を上手く叩いた良い音が廊下から響く。

血殺「なつ、なんだ！？」

廊下に視線を送るとシャルと一夏が鬼教師にこつてり怒られていた。それを良いことに筹とラウラが後ろから教室に入ってくる。

千冬「デュノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。2回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」  
一夏、シャル「はい・・・・・・」

キーンゴーンカーンゴーン

チャイムが鳴りいつも通りSHMが始まる。

千冬「四死神」

血殺「はい。なんですか？」

千冬「お前は本当に余計なことをしてくれたな

余計なことと言えば、あれのことか

血殺「フランスの第3世代型の設計図を提供したことですか？それとも、2人目の男性IS操縦者がIS学園にいることを公式発表したことについてですか？」

千冬「両方だ！ 今、学園に政府からの問い合わせが幾つも来てい

る

別に良いじゃん

どうせはバレる事だし、

フランスの第三世代は俺らの物になるんだから

まあ、一応反省してるフコをしておくか

血殺「だから、泣いて謝れと？」

千冬「そこまでは言わん。ただ、そういうことをするなら一言言べき

先生達も対応をするのに時間がかかるからな

血殺「わかりました。以後気をつけます」

千冬「それでいい」

早っこい、この学園とはまだ似合いませんでしたいな

女子A「え？ 四死神がフランスに第3世代型の設計図を渡したの？」

血殺「ああ、そうだよ。他の奴らとは言つなよー。」

朝からこなことが有りながらもこつもと回り生活が始まる。

放課後

一夏「うーん、楽しいな」

シャル「え？」

一夏「いや、楽しいな。掃除は。特に普段使っている教室の掃除だと余計に」

シャル「そ、そう? 一夏って変わってるね」

今に始まつた」とではない。

血殺「おつー頑張ってんじやん!」

一夏「血殺か。何しに来たんだ?」

おひおひ、一夏くんは俺に手伝わせる気まんまんですか

血殺「ちょっとシャルに話があつてな」

シャル「なに？」 血殺

血殺「付き合つてくれないか？」

シャル「え？」

週末　日曜日

血殺「まあまあの天氣だな」

天氣予報では快晴だつた氣がする。

シャル「・・・僕の夢が砕け散る音を聞いたよ・・・」

血殺「ん？　どうした？　シャル」

今のシャルはとてもヤバい状況だ。RNの魔王降臨時の乙さん並みに

シャル「血殺つて一夏並みに鈍感だよね」

いえいえ、あの唐変木　of　KINGには負けますよ

血殺「もしかして、付き合つて　を交際の意味で捉えちゃつた？」

シャル「…………うん…………」

血殺「あははは、可愛いなシャルは。でも、今のシャルは俺の好みとは違うかな」

違ひすぎるね。俺の好みは天涯孤獨並みの孤独感がある人じやない  
とね

シャル「血殺はどんな人が好みなの?」

血殺「うーん。昔の彼女みたいな人かな」

シャル「昔の彼女?」

血殺「ああ」

彼女には姉が居たけど、彼女自身は華音のクローンだつたからな。

シャル「もしかして、引きづつてんの?」

血殺「少しね」

シャル「ふーん。そうなんだ」

血殺「そろそろ着くな。ほいつ」

そう言つてシャルに手をさしのげる。

血殺「手、繫ぎなよ。危ないしシャルもその方がいいだろ?」

シャル「あ、う、うん」

血殺「まずは水着売り場から行くか」

シャル「うん」

てくてくと歩いて行く俺たちであつた。

血殺「えーっと、水着売り場はここだな  
シャル「血殺はさあ。・・・僕の水着姿、見たい?」  
血殺「ああ、どうでしょ?」

正直言つていいかも良い。

シャル「血殺のイジワル・・・」  
血殺「あははは、可愛いなシャルは」「じゃあ、別れるか。男性と  
女性だと売り場が違うし」

パツと離れる手にシャルは残念そうな顔をする。

血殺「また、後で繋いでやるよ」  
シャル「え?」  
血殺「じゃあ、また後でな」  
シャル「う、うん」

血殺「さてと、何色にしようかな」  
白虎『どうせ、あなたは赤を選ぶんでしょ?』  
血殺『じゃあ、赤にしよ』  
朱雀、白虎、玄武、青竜『『『私の分も買ってよ』』』』  
血殺『後でな』

玄武や青竜が一人称で『私』を使うなんて珍しいな。

数分後

血殺「ちょっと早すぎたかな」  
シャル「あつ！血殺！」

どうやら、シャルの方が俺よりも早かつたらし。

血殺「早いなシャル。もう決まったのか！？」  
シャル「いや、血殺に選んで欲しくて」

血殺「わーった。俺も行くよ」

正直、ダルいが、仕方ない

日曜日だからかわからないが、俺の眼には何人かの女性客の姿が見えた。

女性「そこのあなた」

血殺「…………」

女性「男のあなたに言つてるのよ」

俺…………か……

血殺「…………何か用？」

女性「そこの水着、片付けておいて」

血殺「嫌だね。自分で片付けな！ おばさん」

俺は二十四時間、どこの馬の骨かも分からぬ奴にも喧嘩を売るのが趣味です。

女性「ふうふ、そういうこと言つて。自分の立場がわかつてないみたいね」

あーあ、だるつ。この世もずいぶん変わったなあ。ISが発表されてから男と女の立場はとても変わった。簡単に言つてしまえば、女が「いきなり暴力を振るわれた」なんて言つてしまえば言われた男は捕まる。男でISが使えると言つてもそれは変わらない。

そして今現在、女性が警備員を呼んでいる。

仕方ない。相手には捕まつてもうつか

血殺「白虎を朱雀を展開しつつ召喚」

光の粒子が人になつてゆく。

白虎「なんの用？」

血殺「俺の左眼を殴れ。あざが出来るくらいの強さで」

白虎「わかった」

ガンッ!!

白虎「じゃあ、私帰るから」

血殺「ま、またな」

いつて～！超痛い！だが、耐えろ俺！

女性が男の警備員を連れて戻ってきた。

女性「いきなり暴力を振るわれたんですね！」

他の言葉は思いつかなかつたのかよ。ばーか

警備員「ちょっと君。署の方まで同行を」

血殺「あ？なんでだよ！殴られたのは俺だ！見ろこれーあざになつちまつたじやねーか！」

さつき白虎に殴らせた目を見せた。

警備員「どういづ」とだね？」

女性「わ、私は知らないわ」

警備員「では、あざに手を合わせてもらえますか」

女性「ええ、良いですよ」

強がつっていた女性はあざと手の大きさが重なり、顔を青ざめた。

女性「そんな私じゃないわ」

警備員「署まで」同行を

血殺「一ヤツ」

手の大きさが合つてるなんて当たり前だる。なんせ、朱雀の手は大きさを自由に替えられる手なのだから。さてと、あざを治すとするか

朱雀の武器は大きさ、質量、火力全て違う。そのため、手の大きさがオールマイティーに替えられるようになつてている。

シャル「大丈夫？ 血殺」

血殺「ああ、悪い。心配させちまつたな」

シャル「ううん。大丈夫だよ」

シャルは笑顔で笑つた。

シャルの笑顔はかわいいと思つ。

思うだけ

血殺「そつか。なら良かつた」

シャル「えつと、水着を見てくれるかな？」

血殺「ああ」

シャル「えっと、ど、どうかな?」

シャルが今着ている水着はセパレート?とワンピースを足して一で割つたような水着だ。

色はイエローという組み合わせなわけだが、シャルはオレンジやイエローが好きらしい。

血殺「良いんじゃないか。リヴァイヴの色に似てるし」

シャル「じ、じゃあ、これにするね」

血殺「ああ」

シャルの着替えに待つていてる間に俺は織斑先生に一夏、山田先生を見つけた。

血殺「よつ。一夏」

一夏「よう。血殺、なにしてんだ?」

血殺「水着を買いに来たんだよ。一夏は?」

一夏「似たようなもんだ」

まさか水着を買いに行くだけなのに年上の女性を一人もナンパする

とは。

やるな。一夏

シャル「お待たせ血殺」

血殺「おひ、早かつたな」

シャル「ま、まあね」

俺とシャルのやり取りに織斑先生が口を挟んできただ。

千冬「ほうほう、まさかお前らが付き合つてることはない  
血殺「妬いてるんですか?」

千冬「そんなわけあるか、馬鹿者」

真耶「あ、あー。私たちょつと買い忘れがあつたので行つてきます。  
デュノアさんもついてきてください」

シャル「あ、はい」

シャルを連れてビニカへ行く山田先生に呆れている織斑先生。

千冬「・・まつたく、山田先生は余計な気を遣つ

一夏「え?」

千冬「言つても仕方がない、か。一夏」

俺も楽にするか

一夏「な、なんですか? 織斑先生」

千冬「今は就業中ではないからな、名前でいい

一夏「わ、わかつた」

血殺「で? いつたい何の用だい? ちー姉」

山田先生が気を遣つたつてことは何があるんだと思つ

千冬「お前にそう呼ばれるのは初めてだな。血殺」  
一夏「え？ どうこうこと？」

一夏の頭の上にハテナマークが沢山浮いている。

血殺「ああ、まだ一夏には言つてなかつたな」  
千冬「これから、こいつもうちに住むことになつた」  
一夏「ふーん、そうなのか。・・・・・え？ なんで？」  
血殺「束さんに迷惑をかけないためにだよ。もしかしたら、発信機  
を付けられる場合があるかもしれないから」

まあ、束さんがどうなると知らないけどね

千冬「うちならバレても大丈夫だら」  
一夏「なるほどな」  
血殺「とこいつわけでよろしくな。 一夏」  
一夏「こちりこちりよろしくな。 血殺」

俺と一夏は俺たちのオリジナル挨拶をした。

千冬「あこせつはそれくらいにしてお前達に聞きたい」とがある  
血殺「何？」  
千冬「どつちの水着が良いと思つ？」

ちー姉が見せてきたのは、スポーティーでありながらメッシュ状に  
クロスした部分がセクシーさを演出している黒水着と一切の無駄を  
省いたかのような機能性重視の白水着。

俺は黒かな、白だと白虎と被るし

一夏「…………白の方」

一夏は少し戸惑いながら言った。

内心では黒を評価しとるし

血殺「俺は黒の方が合つてると思つ」

千冬「2人とも黒の方か」

一夏「いや、白の「うそをつけ。お前が先に注視していたのは黒の方だったぞ。昔から、お前は気に入った方を注意深く見るからな。すぐわかる」

なんという観察力。さすがブリュンヒンデ。見るところが違う

ブリュンヒンデはEIS世界大会『モンド・グロッソ』で優勝した者のみが与えられる称号の名だ。

千冬「おい、血殺！」

血殺「なんだい？ちー姉」

千冬「お前は女を作らないのか？」

ドストレートだな。おい

血殺「今でも大変なにこれ以上作つたら娘まれるよ」

千冬「ほう、もうお前には女がいたとはな」

血殺「でも、あれらは女とはほど遠いな」

EISだしね

千冬「ラウラはどうだ？ みんなの前でキスした仲だろ？」

血殺「確かに可愛いとは思うけど、クラリッサの情報に振り回されすぎかな」

千冬「つまり、無理とこわけか」

血殺「これから伸びによるかな」

千冬「ふん。わかったような口を

「ヤニヤ笑いながら言つてきた。

血殺「一応わかってるつもりだよ。じゃあ、俺はこれで、また後で」

さてと、ここからの水着を買って帰るか

白室

血殺「やつと届いたか」

置いてあつたのは中くらいのダンボール箱が3つだった。

血殺「さて、中身の確認をするか」

俺は豪快にダンボール箱を破壊して中身を確認する。

血殺「1つ目の箱には銃が7つに弾倉が50近くで、2つ目は缶ビールが30、3つ目は煙草か。あつちの方の煙草嫌なんだよなあ、

自分で巻かないといけないから

文句を言しながら煙草とビールを鞄の中につめる。

血殺「これでよしー 寝るか

臨海学校 初日

千冬「それでは、ここが今日から3日間お世話をなる花月荘だ。従業員の仕事を増やさないよう注意しろ」「全員」「よろしくお願ひします」「まーす」「まーす」

そんなこんなで学校の人間がぞろぞろと旅館に入つて行く。

血殺「さてと、俺らの部屋を探すか

一夏「そうだな」

千冬「織斑、四死神、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」

一夏「えーっと、織斑先生。俺達の部屋つてどこになるんでしょう?」

千冬「黙つてついてこい」

部屋ついたら、一夏に見つかなこようにな朱雀達を出すか

千冬「ここだ」

一夏「え?ここって……?」

ドアには教員室と書いてあるだけだ。

血殺「何故、教員室なんですか」

千冬「個室にするという話もあったのだが、それだと就寝時間を無視して出歩く者が出るからな」「結果、私と同室になつたわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろ?」

魔王が考えそうなことだ。

血殺「つまり、俺らは寝ている間も死と隣り合わせといつわけか」「一夏「そういうことだな」

俺と一夏はつんづん。と首を縦に振った。

千冬「お前らなら何時でも殺せるぞ」

血殺「ん~。参ったなあ、どうやつてあいつらを出でやつが」

千冬「安心しろ。ほとんど誰も出入りはしない」

血殺「そりなんですか。なら軽く安心です」

そうして俺たちは部屋に入る。

一夏「おおー、すげー」

血殺「トイレと風呂場があるつてことはルールは学校と同じか」

千冬「ああ、そうだ。大浴場も使えるがお前達2人は時間交代だ。本来なら男女別になつているが、お前達2人のために全員が窮屈な思いをさせらるわけにはいかないからな」

つまり、この宿は貸し切り状態と言つわけか。

血殺「まつ、俺は部屋の風呂しか使わないけど」

千冬「さて、今日は一日自由時間だ。荷物を置いたし、好きにしり

一夏「えっと、織斑先生は？」

千冬「私は他の先生との連絡なり確認なり色々とある。しかしあ・  
・・・」  
「ほん

軽く咳払いする織斑先生。

千冬「軽く泳ぐくらいはするとしよう。どこかの弟達がわざわざ選んでくれたものだしな」

一夏「そうですか」

人に選ばせせておいて使わなかつたら、なぶり殺しにする『まんまとだぜ

血殺「一夏、先に行つてくれ。俺も用事があるから」

一夏「わかった」

バタンツ

一夏が部屋を出て行き、俺と織斑先生だけになつた。

血殺「じゃあ、出すぞ」

俺は朱雀達を出す。

千冬「しかし、凄いな」

血殺「じゃあ、風呂場で着替えてきて」

朱雀、白虎、玄武、青竜「「「うん」「」」

四人は風呂場へと向かつた。

千冬「あいつらになんて説明するつもりだ?」

血殺「友達って言い通します」

千冬「その辺は自己責任だから、私は知らないがな」

最低な義姉さんだな

血殺「りよーかい」

朱雀「血殺、準備出来たよ」

血殺「じゃあ、俺は着替えてくるから先に海に行つてくれ

朱雀「わかった」

さて、俺も着替えて行くか

浜辺

血殺「海なんて久しぶりだな」

白虎「さつさと行こうよ」

血殺「わかつたから引っ張るな」「つか、砂あつつい！」

青竜「私たちは大丈夫だけど？」

血殺「お前らはエジだからだろ」

つーうか、周りの女子がガン見してんだけ！

と語りより、キョトンとしている。

一夏「よう。血殺」

血殺「チース。一夏」

俺のおかしな様子に気づいたのだろう。

一夏「血殺、一ついいか」

血殺「なんだ？」

一夏「その女子4人誰だ？」

ビンゴだった。

血殺「あー、えーっと・・・・」

朱雀「私たちは血殺の友達よ」

俺の右腕と腕を組んでいる朱雀が言った。

血殺「そ、そんなどこだ」

朱雀「私は神崎花蓮よ」

白虎「姉の神崎華音よ」

玄武「めは藤沢有華」

青竜「僕は魅詠千鶴」

ナイス！ みんな

一夏「へえー。そなのか」

血殺「！ じゃあ、俺らはあっちにこらへるから。またな

一夏「ああ」

は朱雀たちを連れ海に近づく。

血殺「さつきはサンキューなみんな」

白虎「じゃあ、今度パフュ奢つて」

血殺「時間があつたらな」

玄武「それについて、よく思いついたね。昔の名前を使うなんて」

朱雀「まあね」

青竜「さて、泳ぐ」

血殺「先に泳いでくれ。ちょっと用事がある」

青竜「わかった」

海に向かう4人を眺める血殺。

（俺がみんなを巻き込んでしまったんだ。できる限りの償いをしなければ）

シャル「あ、血殺。」  
「いたんだ」

血殺「よう。シャルと・・・・なんだ?それ」

血殺の眼に映つたのはシャルとバスタオルの化け物だつた。

シャル「ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

ラウラ「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める・・・・」

血殺「その声はラウラか・・・何やつてんだ?お前」

シャル「水着が恥ずかしくて見せられないんだつて」

血殺「なるほどな、じゃあシャル、俺らだけで遊ぼうぜ」

ラウラ「な、なに!?」

シャル「うん、そうしよ、血殺」

ラウラ「ま、待てつ。わ、私も行こう」

血殺「その格好でか?」

ラウラ「ええい、脱げばいいのだらう、脱げば!」

一体何枚のバスタオルを脱いだのだろう、全身に巻いていたバスタオルが一気に宙を舞う。

ラウラ「わ、笑いたければ笑うがいい・・・・」

血殺「あははは。似合つてんじやん。可愛いよ」

ラウラ「なつ・・・・!」

青竜「血殺、何してんの?」

血殺「よう、青じやなかつた千鶴。何の用だ?」

青竜「花蓮がやきもち妬いてる」

血殺「何でだよ。ただ話してるだけだろ」

青竜「さあね」

シャル「あの、・・・・こちらの方は?」

血殺「ああ、自己紹介がまだだつたな。こいつは魅詠千鶴つて言ってただの友達だよ。千鶴、こいつらはシャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィッヒだ」

シャル「初めまして。シャルロット・デュノアです」

青竜「こちらこそ初めまして。シャルロットちゃん」「ん！」血殺、

さつきの男の子がいるよ」

血殺「あつ、ほんとだ。一夏…どうしたんだ…？」

大声を出して氣づいたのか、一夏が向かつてくる。

一夏「今、ビーチバレーのメンバーを集めてんだ」

血殺「俺らが加わろうか？」

一夏「マジで！？サンキュー！」

一夏たちは駆け足でやる場所に向かつた。

\* これから出てくる女子は名前がわからないのでアニメを見てください。のほほんさんのみ名前が出てきます。

血殺「もう準備が出来てる」

女子A「んじゃ、お遊びルールでいいよね。タッチは二回まで、スパイク連発禁止、キリのいい10点先取の1セットね！」

血殺「足は？」

女子A「拾つ時のみあり」

一夏「あう。じゃ、そっちのサーブで」

血殺「じゃあ、俺、一夏、千鶴の3人でいいな？」

千鶴「うん」

一夏「おう」

女子B「ふつふつふつ。7月のサマーデビルと言われたこの私の実力を…見よ…」

初っぱなからジャンピングサーブを打ち出した。

血殺「千鶴、高さ3mの右斜め前に上げて」

千鶴「わかつた」

血殺「5mm足りない」

千鶴「うつせいいー！」

蹴られそうだから俺は跳んだ。

血殺「まつ、いつか

隅を狙つたスパイクを放ち、点が入つた。

のほほん「うつわー。しつしー上手い

しつしーって何？ 子供がトイレに行きたい時に言つてさう

血殺「俺らがいるとすぐ終わるぞ」

一夏「何でだ？」

青竜「僕たちは元バレー部なの

中学の頃は五人共スタメンだつたな。

女子A「えつ！？ うなの？」

女子B「じゃあ、2人は抜けてテュノアさんとボーデヴィッシュさん  
か入れば良いんじゃない？」

血殺「それもそうだな。じゃあ、後はよろしくなシャル

シャル「う、うん

血殺「さて、あいつらの所に行くか

千鶴「そうだね」

白虎「遅い！！」

血殺「何で白虎に怒られないといけないんだ？」

玄武「めたち、ずっと待つてたのに」

血殺「いや、俺は聞いてないぞ。そんなの」

初耳だよ。待つてたなんて

朱雀「ていうか、青竜まで何してたの！？」

青竜「ビー・チバレー！」

血殺「もう良いだろ？ 戻すぞ」

回収したし飯食いに行くか、昼間は寝よ

朱雀「みんなどじ」飯食べなくて良かつたの？」

血殺「ああ」

そろそろ馴れ合には止めておいた方がいいからな。

青竜「もつお遊びは止めて仕事をするの？」

血殺「いや、まだその時じやない」

白虎「今回は大変ね」

アメリカの第三世代のHSの奪取。

まあ、束さんがいろいろとやつといてくれるから楽なんだけどね。

玄武「スコールはいつも自分勝手すぎ」

朱雀「仕方ないといえば仕方ないんだけどね」

不意に女性が話掛けてきた。

？？「あなたが四死神君かな？」

血殺「誰だ？あんた」

紺色で長い髪の女性。

まるで自分を見るような感じだ。

青葉「天神」  
青葉「あまがみ」  
青葉「あおば」

あなたの実の姉よ

血殺「なつ！ 何だと！？」

「こいつはあのグループのメンバーか

青葉「まずは私たちの過去を言いましょうか」

青竜「私たち？」

青葉「うるさいわよ。セイリュウ」

血殺「こいつらには手を出すな」

一瞬だけだが、殺意を感じた。

青葉「わかつたわ。では、はじめましょうか。 私たちは3人兄弟だつた。 一番上が私、一番目は紅葉もみじと言う子、三番目があなたな。 本来ならあなたには血殺ではなく紅葉こうようと言う名前がつくはずだつた。 しかし、母さんは死んだあなたを産んだ瞬間死んだの」

血殺「何！？」

正直言えば知っていた。研究所の連中から聞いた。

青葉「そして、狂つた父さんはあなたが血で母親を殺したと思い血殺と言う名前がつけられた。 だけど、それだけじゃ収まり切らなかつた父さんは私たち3人を売り飛ばした。私はロシア、紅葉はアメリカ、あなたはドイツにね」

朱雀「血殺！ こんな話信じちゃ 駄目！」

信じたくない。が、奴の言つて「る」とに嘘はなかつた。

青葉「わかる？ 血殺。 あなたは産まれながらにして人を殺めたの、だから父さんはあなたを売つた。そして、私たちまで巻き沿いをくらつた。ちなみに紅葉はあなたの双子の姉、3ヶ月前にある組織の

者によつて殺された「

血殺「ある組織?」

青葉「亡国機業よ。あなたの先生を殺したミサイルを放つたのもその者たちの仕業。だから、織斑千冬は全てのミサイルを破壊していたわ」

血殺「なつ！？なんだと！？？」

復讐相手は織斑千冬じゃなくて、俺の依頼者かよ

青葉「私が知つてるのはこれだけよ。何か役に立つたかしら？」

血殺「ああ、色々とな」

俺は奴の見えない位置からナイフを取り出した。

青葉「なら良かつ……………ゲホッ！」

血殺「ニヤッ」

青葉の胸には俺が投げたナイフが刺さつた。

青葉「…ゲホッ！…どう・ゲホッ！…ゲホッ！…して……」

「

血殺「あんたは姉さんじやない。話していることは確かだけどね。もしかして、俺の能力を聞いていないの？」可哀想に

血殺「サヨウナラ」

宿舎

血殺『何やつてんだ? あいつら』

俺の眼は簫、鈴、セシリアの3人を捕らえた。

玄武『大方、一夏の部屋を覗きにきたんだよ』

朱雀『恋する乙女は強し』

青竜『それ、いつの時代?』

少なくとも、今は言わない。

白虎『明治あたり』

玄武『いやいや、古ゅうでしょ』

朱雀『せめて昭和』

青竜『結構近年じやん』

明治の次つて昭和だつた氣がするのは俺だけか？

血殺『そんなこと話してゐ間にあいつら捕まつたぞ』『さて、部屋に入るか』

玄武『ラウラとシャルが血殺の尾行してゐるよ』

血殺『わーつてゐ』

コンタクトを取りながら角を曲がる。

ラウラ「よし、行つたぞ」

シャル「追いかけよう」

俺が曲がつた角に差し掛かる一人。

血殺「何してんだ？お前ら」

ラウラ、シャル「うわわわっ！..」

かなりのオーバーリアクションだ。  
誰も笑わないぞ。そんなの

血殺「てか、お前らの尾行は下手くそなんだよ。尻尾が丸見え」

ラウラ「う、つ」

シャル「なら、早く言つてよー。」

血殺「ここじやあ何だし、部屋行いつぜ」

2人の手を引つ張つて部屋に行く。

血殺「ただいま」

千冬「遅かったな。夕食も食べずにどこをほつつき歩いていた？」

血殺「夜風に当たりたかったんだ」

もわらひん嘘だ

千冬「ふん。まあいい、で？そいつらは？」

血殺「尻尾が丸見えなのに俺を尾行してた2人」  
シャル、ラウラ「う、つ！」

千冬「まあいいか。おい、お前はもう一度風呂に入っこ。部屋  
が汗臭くされでは困る」

一夏「ん。そうする」

部屋を出て行く一夏。そして、沈黙が始まる。

おいおい、何だよこの空氣。重すぎだろ

千冬「おいおい、葬式か通夜か？ いつもの馬鹿騒ぎせどりした」  
簫「い、いえ、その……」

鈴「お、織斑先生といつして話すのは、ええと……」

シャル「は、はじめてですし……」

千冬「まったく、しうがないな。私が飲み物を奢つてやる。簫  
ノ乃、何がいい？」

いきなり話を振られて何も言えない簫。

千冬「ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅  
茶、コーラだ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ」

冷蔵庫から全員分の飲料水を出し配る。

血殺、簫、セシリ亞、鈴、シャル、ラウラ「…………い、いただ  
きます」「…………」

全員が飲み物を口にするように見えた。

千冬「飲んだな？」

篠「は、はい？」

鈴「そ、そりや、飲みましたけど・・・・」

セシリ亞「な、何か入ってましたの！？」

千冬「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

そう言つて再び冷蔵庫を開けて缶ビールを取り出す。  
「

篠、シャル、ラウラ、鈴、セシリ亞「「「「」」」

「

血殺「ちー姉、今、酒飲んだ？」

千冬「ああ、本当なら一夏に一品作らせるとこりなんだが・・・血殺、お前何か作れるか？」

同居人は俺以外は誰も料理をしません

血殺「何が食べたいの？」

千冬「何でもいいさ」

血殺「あいよ。3分ぐらいお待ちを」

3分後

筈、セシリ亞、鈴「　「　言わなくていいです！」　「

血殺「何を？」

三人の顔が真っ赤かだ。どうしたんだ？

千冬「おっ、早かつたな」

血殺「家では俺しか家事しなかったから。結構慣れてるんだよ」

千冬「確かに。あいつが家事をするなんてありえないからな

仕方ないんです。あれの事で手いっぱいだし

血殺「ほい、テキトーに野菜炒めにしたから。で？　何の話をしていたの？」

千冬「こいつらにあいつのどこがいいのか聞いてたのさ」

血殺「なるほどね。それでこの3人は憤慨してたわけか

千冬「そんなところだ」

ちー姉にとつて、この三人は絶好のエモノってわけだ。

血殺「さて、俺も酒飲むか

千冬「私の分は渡さんぞ」

別に取らないよ

血殺「自分で持つてきてるから大丈夫だよ」

千冬「まあ、いいか。お前だけさつき渡した飲み物を飲んでいいなかつたしな。口封じのために飲ますか」

自分の鞄からビールと煙草を取り出す。

千冬「で？お前にはここいつのどいがいい？」

今度の矛先はどうやらシャルとラウラだった。

シャル「僕……あの、私は……せわしいです……」

千冬「こいつは誰にでもやさしいぞ」

血殺「そうか？でも、最初の頃のセシリアやラウラには冷たかつたぜ」

煙草を吸いながら言つ。

千冬「で、お前は？」

ラウラ「強いところが、でじょうつか……」

千冬「確かに、私より強いと思つがまだ乗り越えられてはいないな

血殺「いいや、俺は弱いよ。ちー姉

俺は心が弱すぎるんだ。

シャル「さつきから気になつたんだけど、血殺は何で織斑先生のことをちー姉って呼ぶの？」

血殺「居候つてやつ。だから義理の姉さんなんだよ

千冬「詳しい話は今度してやるわ」

「一つ目の缶ビールを飲み終えて二つ目の缶ビールに手を伸ばす千

姉。

血殺「チャンポンしたい」

千冬「無駄に酔うぞ」

血殺「酔いたい気分なんだ。そのままの本能に任せたい気分」

千冬「大人らしいことを言うな。ガキ」

血殺「ああ、そうだね」

海に着いたり十一時一（後書き）

ちょっと雑な終わりせ方ですこません。

今日は全体的にむちゅくちゅでしたが、楽しめて頂けると恐縮です

## その境界線の上に立つか（前書き）

タイトルはシン・レッジ・ラインですが、ほとんどのレッジ・ライン・ホワイトです。

## その境界線の上に立ち

合宿2日目

血殺「ふああー。・・・眠ZZZ」

一般生徒は今頃、データ取りをしているであろうにも関わらず、俺はのんびり田舎地まで向かっていた。

血殺「やつと着いた・・・」

田覚めが悪いからだいたい三十分くらい掛かった。

千冬「遅いぞ。バカ者！」

血殺「俺は出席しなくても単位は取れますから」

授業に出たくもないのに強制だから嫌なんだよなあ

千冬「まあいい。やつと準備をしろ」

束「こつちは準備出来てるから後はまち一くんだけだよ

血殺「わかりしました」

束「じゃあ、まずは黄竜のコアとコンタクト出来るようにするから手出して」

言われる通りに手を差し出す。

束「ちよつと待つててね」

血殺「そういうえば、赤椿はもらったのか？」

第「あ、ああ

篠のやつ、少し浮かれてるな。

血殺「俺の自信作だ。ただ第4世代型はシールドエネルギーの消費が早いから気をつけろよ」

篠「わかった」

束「ほい、じゃあ、これでオッケーだよ。超速いね。さすが私

相変わらず、意味不明なことを言う人だな、この人は。

血殺「じゃあ、やるか」

千冬「専用機持ちは各人の専用機を展開しろ」

一夏、篠、鈴、セシリ亞、シャル、ラウラは専用機を展開する。

千冬「では、これより模擬戦をやる。四死神対お前ら6人にやつてもううつ」

鈴「織斑先生、さすがにそれは……」

鈴が何故か止めに入つた。

千冬「安心しろ。すぐにやられる」

血殺「それに今まで使つてたISは全て初期設定だったしね」

束「ちーくんの使つてるISは全部が初期設定でワンオフ・アビリティー使えるからけつこう強いんだよ」

千冬「それでは始めるぞ」

黄竜展開！

血殺「正常に稼働しています」

千冬「では、はじめ！」

刹那、黄竜が消える。

ラウラ「な、何！」

シャル「セシリ亞！後ろ！」

セシリ亞「なつ！」

一瞬でセシリ亞の後ろを取つた黄竜は”聖なる剣”を展開し、斬りかかる。

血殺「まずは一機」

セシリ亞「きやつ！－！」

剣が直撃しブルーティアーズのシールドエネルギーが削られる。

鈴「ええいつ！」

すかさず、鈴が衝撃砲を展開しぶつ放す。

血殺「甘いな・・・・・！」

黄竜は衝撃砲を手で弾き飛ばした。

鈴「なつ！」

血殺「これで・・・・・終わり」

血殺は”死の爪”を展開して鈴を切り裂き蹴り飛ばす。

血殺「一気に蹴散らす」

黄竜が展開している翼が黄竜を中心に螺旋状になつていいく、足からは”ミラーゾスター”ル”を展開し人にビームが当たらないように殻を作る。

血殺「レッドライズ フルバースト！」

全ての羽から一斉にビームが発射される。そのビームは一夏たちを襲つた。外れたビームは”ミラーゾスター”ル”によつて跳ね返され一夏達を再び襲う。

血殺「・・・・・！」

黄竜の背後から4つのビームを放たれた。”ブルーティアーズ”だつた。

血殺「ちつ、まだ残つてたか・・・・・！」

黄竜は”リバースシールド”で攻撃を全てはじき、”レッドライズ”を全て飛ばし”ブルーティアーズ”を破壊する。

血殺「後はお前だけだ。第」

第「行くぞ！」

第は”天月””《あまづき》”と”空裂””《からわれ》”を展開して突っ込んでくる。

血殺「”夙””《こがらし》”！””離闇””《ひなぐら》”！」

黄竜は黄竜専用の短剣を両手に展開する。

第「はああああつ！」

血殺「ビームが出る剣なんだからもつと有効に使え」

黄竜は第の剣を軽々とかわす。

血殺「”切嵐“《せつらん》」

黄竜が短剣を振る。

第「！！」

刹那、赤椿のシールドエネルギーが大幅に削られる。それに気づき第は距離を取る。

血殺「”無牙無“《むがむ》」

第「しまつ・・・！」

黄竜が放つた見えない暫撃が赤椿に当たった瞬間、大爆発を起こす。直後、黄竜は停止した。

ラウラ「今だ！」

血殺「ちつ！」

シユヴァルツエア・レーゲンの”AIC”によつて停止した黄竜に向かつて突つ込む一夏。後ろからはシャルが援護射撃を行つてゐる。

血殺「残念でした」

一夏、ラウラ、シャルとシャルの放つた銃弾の動きが止まる。黄竜

は完全停止時のみ使える360。AICを使い三機を停止させた。

ラウラ、一夏、シャル「「なつ！」」「

血殺「終わりだ！」レッドライズ“

あらかじめ排出していた”レッドライズ“が一夏たちを襲つて模擬戦は終わった血殺の完勝で。

血殺「はあ、疲れた」

束「使ってみてどうだった？」

血殺「シールドエネルギーが常に減る以外は完璧ですね。火力、スピード、柔軟性、反応、全てに置いて」

千冬「どうやら、あいつはまだ戦りたくないようだぞ

振り向くとラウラが仁王立ちをしている

血殺「さすがに無理だ。また今度なラウラ」

ラウラ「わかった」

血殺「俺はちょっと寝るとするか。体は・・・・頼む・・・・・よ・

・・・」

意識が遠退していく。

『黄竜『質問が多すぎよ。私があなたを連れてきた理由は「コンタクトを取るためよ』  
血殺『何故俺を連れてきた?』  
『4ヶ月前に暴走したくせによく言ひ』

そうか。こいつが！

？？『ここは私の作つた空間』

血殺・お通い【

黄竜『私は黄竜の魂よ』

真つ暗な世界だ。

『アーリーだ？』

そうだ。あれさえ無ければ

黄竜『あれは私じゃない。私がここに移されたのはあなたがE.S.学園に入学した日よ』

血殺『約3ヶ月前か』

黄竜『昔の黄竜はあなたの精神を奪い暴走したと聞いたわ』

血殺『ああ、そうだ』

さつさとこの空間から出たい。

黄竜『あなたは私の力が必要?』

血殺『要らない! お前の力はただ人を傷つけるだけだ!』

黄竜『そう、なら良いわ』

血殺『何!?』

復讐者の俺には意外すぎる言葉だった。

黄竜『力を必要としないくらい強いなら』

血殺『俺は強くない。強くないんだ』

俺は誰一人、友達すら守れない奴なんだ。

黄竜『なら、なんで力を必要としないの?』

血殺『あんな悲劇を繰り返すかもしれないからだ』

もう一度とあんな悲劇は繰り返さない。

黄竜『傷つくのは嫌?』

血殺『そりやあ、誰だってそうさ!』

黄竜『あなたはただ逃げてるだけね。傷つくのが嫌で』

何故だろ？。こいつの言つてることが正しい気がする。

そして

血殺『逃げてない！』

黄竜『いいえ。逃げてるわ』

懐かしい。

血殺『・・・・・・・・』

黄竜『安心して、私たちは双子なのだから大丈夫よ』

血殺『もしかして、黄竜は紅葉姉さん？』

死した姉に会えたことは素直に嬉しい。

黄竜『ええ、そうよ。力は私がコントロールするからあなたは自分でやりたいことをすれば良いのよ。あなたは何がしたい？』

血殺『・・・・・大切な人を・・・・みんなを守りたい』

黄竜『わかつたわ。血殺』

でも

血殺『これからよろしくね。紅葉姉さん』

黄竜『私はもう紅葉じやないわ。でも、この空間だけなら良いわ』

黄竜の中には居て欲しくなかつた。

血殺『ありがと』

黄竜『どうやら、あなたを待つてゐる人がいるみたいね。もう行ってあげなさい』

血殺『わかつた。 また後でね。 姉さん』

『

コンタクト終了

16時前

血殺「・・・・・夢・・・か・・・」

俺は足元をフラつかせながら外に出た。

血殺『・・・・・姉さん・・・・・』

ボソッと弦を親指に嵌めてあるリングを見つめる。

朱雀『大丈夫？ 血殺』

血殺『あ、ああ、大丈夫だ』

青竜『血殺が寝ている間に一夏が負傷したらしい』

やつぱりこうなつたか

白虎『どうやら、例の機体にせられたらしいわよ』

銀の福音にねえ

玄武『今、体勢を立て直してるとこ』

血殺『情報提供ありがとな。じゃあ、行くか』

朱雀『ええ』

白虎『わかつたわ』

青竜『了解』

玄武『うん』

朱雀展開！ ”次元加速“！

血殺『目標を発見した』

銀の福音<sup>シルバリオ・ゴスペル</sup>が羽化に備えた蛹のよつた状態だつたため、『死の槍』では壊せそつにない。

玄武『なら、まずは僕からだ』

”ミラーアスター”トル  
”ミラーアスター”トル”で蛹状態の銀の福音に殻を作る。

玄武『殻は作つたよ』

朱雀『今度はあたしね』

”レッドライズ”

血殺『乱射』

福音を包んだ”ミラーアスター”トル”は”レッドライズ”の放つたビームを内部で反射させ、全てを”ゴスペルに撃ち当てる。

血殺『よつやくお田覚めのよつだ。たたみかける。』

すかさず、肩のプラズマ砲と腰のレールガンをぶつ放す。刹那、  
ミリースタートル“が破壊され、中から銀の福音が飛び出して來た。

血殺「ちつ！ 朱雀！」

朱雀『ええ』

翼を全て抜き取り2本を繋げ4本の刀にし、福音に急速接近する。

四刀連流 弐ノ型 青菊！

福音は血殺の攻撃をギリギリで避け反撃の体勢をとる。

四刀連流 壱ノ型 黒桜！

福音は血殺の攻撃を食らつたものの、浅かつた。

血殺「くそつ！」

ザアツ

ラウラ『血殺！ 伏せろ！』

血殺「！..！」

間一髪でラウラの福音への攻撃を避ける血殺。

血殺『お、お前ら』

俺の眼には六つの機影があつた。

シャル『1人にしては荷が重すぎじゃない？』

シャルが何時もと同じ口調で話してきた。

血殺『ああ、確かに』

鈴『つたぐ。戦るんなら言いなさいよ』

セシリア『そうですわつ！抜け駆けは良くなくてよ』

血殺『そうだつたな。俺にはいたな頼れる仲間が『

第『一気に叩み駆けるぞ！』

福音に突っ込む5人を見つめる。

黄竜『じゃあ、私も参加しようかなあ～』

血殺『ね、姉さん！』

急に開くな！

黄竜『今は黄竜よ。さつ、私たちも行きましょ』

血殺『ああ、そうだね』

朱雀、玄武、青竜を解除！同時に黄竜を展開！』一次移行『《フ  
アーストシフト》！

数時間前に展開した黄竜よりカラーが明るい黄色になり、ボディが滑らかになつた黄竜を展開する。

血殺『行くよ。黄竜』

速度は”瞬時加速”より一倍近く早い。

ラウラ「第一・武器を捨てて緊急回避しろー。」

血殺「いいやー！その必要はない！」

”瞬時加速“で福音の後ろを取った黄竜。

血殺「墜ちろー！ー！」

黄竜の手首にマウントされているビームサーベルで福音の片翼を切り裂いた。飛行能力を失った福音は海に落ちた。

第「福音は・・・」

血殺「！ まだだー！」

海面から光の球が現れた。その光の中に福音はうっくまっている。

第「これは・・・！？ 一体、何が起きているんだ？」

ラウラ「！？ まざい！」これは・・・ 第2形態移行 『セカンド・シフト』だ！」

福音『キアアアアアアアア！』

福音は雄叫びのような声を発しラウラに飛びかかる。

ラウラ「なにっ！」

血殺『”水壁”『すいへき』！』

ラウラと福音の間に大量の海水が吹き出す。

血殺「ラウラ下がれ！」

しかし、遅かった。福音に足を掴まれたラウラは零距離でエネルギー一弾を数十弾食らい、ズタズタになりながら海へと墜ちていく。

血殺「間に合え！」

海面すれすれでラウラを拾い、抱きかかえる。

シャル「よくもつ！」

血殺「よせーシャル」

シャルはショットガンを呼び出し福音に向けて放つ。

ドンッ！

爆音はショットガンのものではなく、エネルギー弾がショットガンを吹き飛ばし、シャルをも吹き飛ばした。

血殺「シャル！…」「べべべ…」

落下するシャルを拾い上げたが、さすがに無理が有り過ぎる。両腕には負傷した仲間2人、とても戦える状態ではなかつた。

セシリ亞「くつ…？」

そういうしてこる間にセシリ亞が攻撃を受け、蒼海へと墜ちる。

纂「私の仲間を…よくもつ…」

血殺「1人で突つ込むな！」

纂「うおおおおおつ…！」

お互に回避と攻撃の繰り返し、徐々に出力を上げていく赤椿に、わずかに押され始めた福音。しかし、現在はあまりにも残酷だつた。

キュウウウン・・・・・。 エネルギー切れ。

纂「なつ！…また、エネルギー切れだと！？…ぐあつ…」

纂も福音のエネルギー弾により撃墜された。

結局、振り出しに戻つた。いや、状況は悪化している。

黄竜 残りエネルギー 560 ?を切つた。

血殺「白虎を朱雀を展開しつつ呪喚」

白虎「どうすんの？」

血殺「こいつらを岸まで運んでくれ。後は俺がやる」

白虎「わかつたわ」

二人を抱えてその場を去る白虎。

”ブレイクバーン“！”ドラゴンイグセル“！

黄竜専門の刀長2mちかくの刀”ブレイクバーン“と同じく黄竜専門の圧縮火炎砲の”ドラゴンイグセル“

血殺「何としても、俺はお前を壊す！」

残りエネルギー

290

残りエネルギー

140

残りエネルギー 20

血殺「ちくしょうつ！」

結局、壊せなかつた。黄竜は常にシールドエネルギーを消費する。  
これが結果だつた。 1対1の場合は・・・。

血殺「・・・時間は稼いだ。 後はテーマでやれ」

イイイイイイツ！！

福音は吹き飛んだ。 強力な荷電粒子砲によつて。

一夏「俺の仲間は、誰1人としてやらせねえ！」

血殺「遅えんだよ」

一夏は1人で福音に向かつた。

黄竜『いいの？ 1人でいかせて』

血殺『もうシールドエネルギーは切れた』

玄武たちも休ませないと危険だ。

黄竜『血殺はまだ戦いたい?』

血殺『愚問だね。戦いたいに決まってる』

黄竜『なら行きましょ。ワンオフを使って』

血殺『俺と黄竜はまだ意志統一が出来て無いじゃん』

俺たちは稼動時間の問題ではなく。意志統一することでワンオフ・アビリティーを使うことができる。

黄竜『私があなたに合わせればいい』

血殺『出来るならやつてくれ』

黄竜『じゃあ、始めるわよ。私のワンオフは・・・・・』

…… ワンオフ・アビリティー発動! “無域無双” 《むいきむ  
そ》

残りエネルギー 1000

シールドエネルギーが永遠に減ることの無い状態になる。それが黄竜のワンオフ・アビリティー “無域無双”。

血殺「行くぜ!」

福音の翼が回転しながら一斉に開き、全方位にエネルギーの弾雨が降る。

一夏「ちっ！」

血殺「全員伏せろ！」

一夏「！？」

血殺「”イナーシャルガード”！」

全てのエネルギーの弾雨が巨大なシールドにより防がれた。

血殺「ちやつちやとせつて皿つ飯食おう！」

一夏「ああ！」

血殺「じゃあ、行くぞ！」

俺たちは再び福音に向かった。

一夏「せりああああー！」

方翼はやつたが一度は避けられる。そして、もう方翼をやる間に切つた翼は再生する。の繰り返しだった。

血殺一  
”死の槍“！  
一せやああああつー！

死の槍は投げて当てないとシールドエネルギーは一発で0には出来ない。

血殺「一夏は退避しろ！ エネルギー切れだろ？」

一夏 すまなじ

ヒーローなんて柄でもないのに

血殺「俺は赤椿の”絢爛舞踏“《けんらんぶとづ》に希望を託すだけ。だからできる限りのことをするだけ！」

”火炎原子氷結砲“《かえんげんしひょうけつけつぼう》

”火炎原子氷結砲“は機体を燃やす炎、機体を狂わせる放射能、当たり場所から氷が浸食する氷の三つの内ランダムで決まる。

血殺「逝つけえええ！」

血殺の放つた砲弾は福音の両足を巻き込んだ。

今回は氷のようだ。足から氷が上へと向かっている。

福音も反撃をするために翼を広げた。

血殺「あとは頼んだぜ」

第「任せろ！」

赤椿の一刃が翼を断ち切る。

一夏「逃がすかああああつ！」

一夏は”雪片“で残りの光翼を切り裂く。最後の一撃を食らわそうとする一夏に福音は体から生えた翼全てで一斉射撃を行う。

血殺「そのまま突つ込め一夏！」

”リクトアーム“をヒーリングモードで展開！

黄竜は背中からシュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーブレードのようなアームを福音に向けて飛ばす。”リクトアーム“はエネルギー弾を全て無力化させた。

一夏は福音の胴体に、零落白夜の刃を突き立てた。

一夏「おおおおお」……

福音は一夏の首に手を伸ばすが、その手は切り裂かれた黄竜のつま先から伸びたビームソードによって。そして、福音は動きを停止させた。

一 夏「はあつ、はあつ、はあつ、はあつ・・・・・」

アーマーを失った操縦者が海へと墜ちる。

# 一夏しまつ・・・!』

第「終わつたな」

一夏ああ……せんじな  
血殺「・・・・・」

## ミッション失敗か

千冬「作戦完了」・・・と言いたいところだが、お前たちは重大な違反を犯した。帰つたらすぐ反省文と懲罰用のトレーニングを用意してやるから、そのつもりでいる」

一夏、篠、鈴、セシリ亞、シャル、ラウラ「「「「「・・・はい」「」「」「」「」

俺は絶対に返事はしない。

千冬「四死神、何故返事をしない?」

理由は全く命令を知らされていなかつたからに決まつてゐる。が、話をズラしておくか。

血殺「いえ、ちょっと気になるところがありまして・・・」

千冬「何だ?」

血殺「福音の操縦者の胸があまりなかつたように感じたんですけど

千冬「安心しろ、ちゃんと女だった」

んなこと、分かつてゐわ!」

血殺「そうですか。それは何より

真耶「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。・・・あつ！だ、男女別ですよ！ わかつてますか、織斑君に四死神君！？」

「脱いで」のあたりで女子が自分の体の隠した。

血殺「隠さなくても、お前らのつまらない体なんて誰も見やしないよ。特に鈴とラウラ」  
鈴、「ううう」「なつー。」

貧乳など見ても面白くない。  
夏休みの宿題並みに面白くない。

血殺「それから織斑先生」  
千冬「なんだ？」  
血殺「言いたいことははつきり言つた方が大人ですよ。じゃあ、また後で」

俺はその場を逃げるよつに立ち去つた。

黄竜『そろそろ時間かな』

血殺『何の？』

また、無理矢理コンタクトを開いた黄竜が話しかけてきた。

黄竜『私がこの中に居られる時間』

血殺『えつ？』

黄竜『じゃあね。血殺』

血殺『え？』

黄竜との、紅葉とのコンタクトが取れなくなつた。

どういうことだよ！ 何だよ！これ！ 聞きたいことや話したいこと  
が沢山あつたのに！ もう何も話せないのかよ！ 紅葉姉さん・・・

バタンッ！

俺は倒れた。

治療室

血殺「…………」

真耶「あつ！ 目が覚めましたか」

血殺「…………俺は…………」

頭がスッキリしない。

強く打ちすぎたのだろう。

真耶「廊下で倒れているところを見つけられたんですね」

血殺「…………飯」

真耶「はい？」

血殺「飯食べに行つて良いですか？」

真耶「はい、構いませんよ」

血殺「では、これで…………」

俺は治療室を出た。

宴会場

血殺「…………」

一夏「どうしたんだ？ 血殺」

後ろから一夏が話しかけてきた。

血殺「ああ、一夏か。何でも無いよ」

一夏「なら良いんだが…………」

血殺「飯喰うか」

正座はまずいかな。椅子にしよ

結局、座つたのはシャルの前の席だった。女子が騒いでるみたいだったがきにしないで食事をする。

あつ、刺身食べ過ぎちゃった、どうしましよう。シャルの分けて貰おうかな

俺の視線に気づいたシャルが聞いてきた。

シャル「な、なにかな」

さすがに刺身をぐださいなんて言つらいいな

その時だつた。隣にいた女子がシャルに何かを吹き込んだ。

シャル「血殺のえつち・・・・・」

血殺「えつ?」

また隣の女子がシャルに何かを吹き込んだ瞬間、シャルは耳まで真つ赤になつた。

刺身は諦めるか

血殺「いじしそうさま」

夜風に当たりに行こ

・・・・・。 である

# 血殺「」

死にたいな。この際、海に墜ちて死のうかな。

朱雀『また、ラウラとシャルが尾行してゐるわよ』  
血殺『……………』

二人はどうでも良かつた。

白虎『そんなに黄竜が消えたのが悲しい?』

血殺・当たり前だぞ・・・』

白虎  
ても  
あんた  
普通は人を殺めてきたじゃない』

今まで何人の人を手に掛けたのだろう?  
数え切れないというのは確かだ。

玄武『ねえ、白虎。あんたその言い方はないんじゃない?』

血殺  
いいんだ  
玄武

白虎「はー！ それで懇じいてす。また救えなかつたです」て言へホ

俺の頭の中で白虎の声が響いた。

白虎『でた、黙り込んでふてくされる。昔と何も変わつてないじや

朱雀『ちよつと白虎。・・・青竜も何か言つてよ』

青竜『僕は白虎が正しいことと思うから何も言わない。ただ、これだけは言える。元々紅葉は死んでる。その事実に変わりはない。ただ黄竜として少し長生きしただけ』

聞いたことのない冷たい声で青竜はそう言つた。

血殺『・・・・・』

何も言えない自分が慘めだつた。  
慘めすぎた。

白虎『何時、何処でこの前みたいに暴走するかわからない。だから、今を大切にするべきなんぢやないの！？』

血殺『確かにそうだな。白虎の言つた通りだな。俺にはもう後戻りは出来ないんだ。今は出来る限りみんなと楽しくいることを考えるか』

青竜『じゃあ、2人の相手でもすれば？』

血殺『そうだな』

もう俺の中の迷いは消えた。  
はず

俺は煙草に火をつけてシャルとラウラの方へ向かつた。

血殺『尾行が下手すぎだぞ。軍人』

ラウラ『私の専門は戦闘だから仕方がないだろ』

シャル『僕は元々軍人じやないからね』

コイツらを見ると自分が馬鹿に見える。

血殺『そうだ、ラウラ』

ラウラ「なんだ？」

血殺「もつ一度黄竜で戦つのは無理になつちまつた

新たな魂が見つかるまではな

ラウラ「別にいいや。血殺が私の嫁になるのなら」

血殺「む・り・だ！」

ラウラ「な、なんだとー！」

いや、前にも言つただろ！

血殺「シャルはどうなの？」

シャル「何が？」

血殺「何か無いの？ 夢とか願いとか

俺にはもうない物だからな

シャル「血殺と付き合つかな」

血殺「前にも言つたけど、今は無理かな」

シャル「今つて言つけど、何時なりいの？」

こりやあ、永遠に無理だな

血殺「自分で考えな」

シャル「血殺のケチ・・・」

血殺「じゃあ俺は戻るよ。じゃあな、お前らも早く戻れよ

帰つて寝るか

翌日 バス内

一夏「すまん・・・誰か、飲み物持つてないか?」

セシリア「知りませんわ」

血殺「俺は酒しか持つてない」

はあ、これが終わつたらまた束さんから変な物が送られるんだよなあ

いろいろと考えていてる間に1人の女性がバスの中に入ってきた

？？「ねえ、織斑一夏くんつているかしりっ？」

一夏「あ、はい、俺ですけど」

何故、ナターシャがここに・・・

ナターシャ「君がそなんだ。へえ」

一夏「あ、あの、あなたは・・・」

ナターシャ「私はナターシャ・ファイルス。

銀の福音の操縦者よ

一夏「え・・・」

困惑している一夏の頬にナターシャの唇が触れた。

ナターシャ「ちゅっ・・・。これはお礼。ありがとうございます、白いナ  
イトさん」

一夏「え、あ、う・・・？」

ナターシャ「じゃあ、またね。バーバー」

一夏「は、はあ・・・」

ナターシャがバスを降りた後すぐに俺は席を立つた。

シャル「どうしたの？」

血殺「ちょっと用事」

千冬「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ」

血殺「後始末が大変なんですから」

ナターシャ「思つていたよりずっと素敵なお男性だったから、つい」

素敵？　おいおい、戦闘時に頭でも打つたか？

千冬「やれやれ……。それより、昨日の今日でもつ動いて平氣なのが？」

ナターシャ「ええ、それは問題なく。……私は、あの子に守られていきましたから」

あの子……　ああ、福音ね

血殺「何故、福音は暴走したんだ？」

ナターシャ「あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断……あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

血殺「なるほどね。それで結果的に暴走し呼びかけにも応じなかつた。と言つわけか」

こんな物をどうすると書つのだ？　スコールの奴は

ナターシャ「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのIISを敵に見せかけた元凶を……必ず追つて、報いを受けさせる」

千冬「あまり無茶な」とはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？　しばらくはおとなしくしておいたほうがいい」

血殺「無駄な動きは敵にバレることもありますから」

その敵は俺だけだね

ナターシャ「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ、サターン」

サターンとは俺の右眼にあつた力であり、俺が得た力の中で最も嫌つていた力。

千冬「アドバイスさ。ただのな」

血殺「俺は直感だよ。プルートのね」

ナターシャ「そうですか。それでは、おとなしくしていましょう。・

・・・・しばらくは、ね

「またいづれ」そんな言葉が俺たちの背中にはあつた。

その境界線の上に立ち（後書き）

やつぱりグダグダやなあ。

まあ、頑張つていいくわ。

また次回な

お久しぶりです。

約1ヶ月ぶりの投稿です。

言い訳はしません。

## 学園最強と世界最強

9月3日。一学期の初実戦訓練は、一組との合戦ではじまった。

血殺「だから言つてんだろ！それじゃあ駄目なんだって」  
ラウラ「くつ！」

本来ならクラス代表同士の対決のみだったんだが、織斑先生の「お前らの強さが知りたい」と言つことで始まつた専用機の力比べ。

血殺「もう終わりにするか、ファーストシフト！モードウルフ」  
ラウラ「なつ！？」

ISは変形しない。しかし、白虎は変形してこそ意味があるISなのだ。

狼は白虎のオートロックオンシステム（”死の槍”などを投げ飛ばす時に自動でロックオンする機能。ほとんど役に立たない）とは違ひ、マルチデルタロックオンシステム（操縦者の意思で攻撃などをホーミングするけど、無駄に意識を集中させないといけない。BT兵器よりは便利）になるかわり、顔全体にバイザーが付くあげくに、頭にミニチュアダックスみたいな耳が付いてしまう。あと、尻尾が生えるが、全く意味のないものだ。白から灰に変わると甲層は意味は無駄な理由ばかりだ。

血殺「狼に変形した以上はすぐに終わる」  
ラウラ「ちい！」

大型レール砲を放つラウラ。

血殺「悪いな。これで終わりなんだよ」

ブレイククロ-

俺は右手のクロウを振り下ろし、斬撃を放つ。俺が放つた斬撃は砲撃を切り裂いてシュヴァルツェア・レーゲンの甲層をぶつた斬つた。

千冬「勝者、四死神」

さつき、力比べって言つたけど、俺は全員と総当たりして一度でも負けた場合、そいつの下ということになる。つて感じの無駄ルールだ。

血殺「ふう疲れた。ラストは誰?」

笄「私だ」

血殺「笄か。なら少し本氣で行こう。白虎解除そして玄武展開」

氷河期だけでいいかな

笄「血殺、私をなめているのか!?」

血殺「この際だから教えてやるよ。赤椿の弱点を」

千冬「では、はじめ!」

開始と同時に突つ込む笄。

血殺「見してやるよ。玄武唯一の攻撃武器を」

宙に浮いている一本のランスと「」の銃を展開する。

篝「浮いている武器など使い物にならな」ぞ」

浮いてるけど、俺の意思で使いたい放題出来るんだよ

血殺「仕留める」

刹那、一本のランスが篝目掛けて放たれる。

篝「いやんなもの」

”空襲“と”雨月“で攻撃を防がれた。

血殺「あつ、やつぱりな」を放つたか

篝「何！？」

篝がランスをなぎ払つてゐる間に、後ろをとり氷河期のランスと銃を構えてくる。

血殺「でも、零距離＆ランスならどうだ？」

篝「ちつ！」「

血殺「アティオス」

ドオオオオンッ！－

千冬「勝者、四死神」

血殺「わかつたか？赤椿の弱点」  
簒「いや・・・わからなかつた」

血殺「だろうな。使い慣らしているようにしか見えるが、お前自身の力を使い切れていない。それが弱点だ」  
一夏「どういうことだ？」

試合が終わったと同時に一夏がいた。

血殺「簡単に言えば、簒は赤椿の力に頼り 過ぎているんだ。だから簒自身の力は出せない」赤椿の力もフルに出せない」

一夏「そういうことか」

わかつてんのか？」いつ

血殺「まあ、第一形態移行が出来てない時点でフルに使えてはいな  
いな」

鈴「でも、そんな事言つたらほとんどの専用機持ちが力をフルに使  
つてないことになるじゃない」

血殺「当たり前だ、一次状態で使える力が最大で七割ぐらいだ、そ  
の状態でEVAの能力を極限まで使えば一次状態になるんだ」

まあ、両方とも嘘だけどね

シャル「とてもじゃないけど大変だね」

血殺「まあな。まあ一夏の場合は違つたけどね。 じゃ、俺は帰る  
から」

一夏「ああ、またな」

ロッカールーム

血殺「電話しておくか」

プルプル

血殺「よう円、元氣してるか？ お前もこっちに来るんだろ？ 手  
続きは済ませたのか？ そうか、ならいいんだ。俺が何かしたか  
？ わかつたよ、以後氣をつける。じゃあな」

プツツ

血殺「そこで何してんだ？ 生徒会長さん」  
生徒会長「あら、バレちゃった」

ロッカーの裏から出現する奈良さん。

血殺「バレる気満々だつたくせによく言つな」

生徒会長「そうでもないわよ」

血殺「で? 今度は何の用? 生徒会なら入らないと言つたはずだけど?」

断つても断つても、半永久的リプレイだ。

生徒会長「生徒会への申し出ではないわ。ただ貴方たちには部活に入つてもらうことになつたわ」

血殺「貴方たちつてことは他に誰かいるのか?」

生徒会長「ええ、織斑くんよ」

はあ、全く面倒が見切れねえよ

血殺「生徒会に入れるんじゃ あなかつたのか?」

生徒会長「もちろんそのつもりよ」

血殺「時が来るまで待つつてやつか?」

生徒会長「そんな感じ」

血殺「そう、じゃあ俺はこれで」

生徒会長「ええ、またね」

そろそろ仕込んでおくか。しつかり殺れよ………… オータム

放課後 職員室

血殺「織斑先生へ。話しがあるんですけどよろしいですか?」

千冬「ああ、構わない」

心中で不快な笑顔をしながら、織斑先生の席まで移動する。

血殺「実は部を作りたいので承諾をお願いできますか?」

千冬「メンバーは揃っているのか? 最低でも五人は必要だが」

血殺「揃っていることは揃っていますが、ちょっとね」

ちょっと? いや、かなりの間違いか

千冬「誰なんだ?」

血殺「これが名簿と部活名に部の活動です」

織斑先生はそれを見て呆れていた。

千冬「おい四死神」

血殺「なんですか?」

千冬「活動は良いと思うが、メンバーがなあ。お前以外もこの学園内で生活しているとはいえ、生徒ではないからな」

案の定だつた。

血殺「心配しないで下さい。あくまでも人数合わせです」

千冬「まあいいか。私からあいつに言っておくとしよう」

血殺「じゃあ織斑先生、顧問よろしくね。何もしなくていいので」

千冬「仕方ないな」

血殺「では俺はこれで。失礼しました」

SHMと一限目の半分を使って全校集会が行われた。

俺まで強制参加とはやりやがるなアイツ

生徒会メンバー「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

生徒会長「やあみんな。おはよう

ん？ プライベートチャンネル！？

血殺『誰だ？』

円『俺だ。円だ』

応、これはこれは我が唯一の親友の円くんではないか

血殺『なんかあつたのか？』

生徒会長「さてさて、今年は色々と建て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識さらしき 盾無たてなし。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

円『学園内に誰もいないのは何故？』

学園内にはいるよ。みんなね

血殺『今、全校集会中だからな』

盾無「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは

円『じゃあ俺はどうすれば?』

血殺『知らねーよそんなの』

俺が知つてたらビックリだわ！

盾無「名付けて、『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

血殺『悪いな円。また後でな

血殺「うつせえな！！  
黙れ！」

あ、やべつ

子どもの泣き声のようにならかつたのが、俺の一言で一蹴された。

盾無「ありがとう四死神くん。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行つて、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い

もはや、競馬だな

盾無「織斑一夏を、一位の部活に強制入部させましょう!」

再びさつきの雄叫びが上がる。

生徒」「素晴らしい、素晴らしいわ会長ー。」

生徒D「こうなつたら、やつてやる・・・やああつてやるわー。」

一つ氣になるな

血殺「会長ー質問でーす！」

盾無「何かな？四死神くん」

この距離でもいけるとは関心だな

血殺「一夏はこの時から好きな部に入れなくなつたってことですか？」

盾無「ええ、 そうなるわね。 本来なら四死神くんもこのルールに基づき強制入部させる予定でしたが、 昨日の内に入部したといつことで取り消されました」

あつぶねえ。 プルートとマーキュリーのおかげだな

かくして一夏の地獄生活がはじまつた。

同日 放課後 廊下

血殺「だからつてなあ。 なんで学園内にいないんだよー。お前は」  
円「まあ、いいじゃん。終わつたことは」

この野郎は授業をサボってゲーセンで遊んでやがつた  
まったく、あり得ねえぜ

血殺「しかもお前の世話を俺がやる羽田になつたし」

円「それは悪いと思つてる」

血殺「つたく、しょうがねえな」

1—1 前

血殺「さ、入るぞ」

円「ほーい」

ガラガラッ

クラスメート「「「「「えつ！？」」」

血殺「悪いな、遅くなつたがみんなに転校生を紹介するつに織斑  
先生から言われた」

円「つーわけどうしひ。俺は紅波くわなみ まだかまだかだ」

何時ものよつにテキトーな挨拶をする円。

血殺「で？一夏出し物はどうなつた？」

一夏「見ての通りだ」

なになに？『織斑＆四死神のホストクラブ』に『ツイスター』『ポツキー遊び』『王様ゲーム』か

血殺「この案は良いと思うが他のみんなは一体なにをするのかがわからないから、みんなが自分のやるべきことがある物じゃないと」  
一夏「確かに」

ラウラ「メイド喫茶はどうだ」

メイド喫茶つてよお。まんまパクリじゃねえか！  
まあ、全体でやるなら良いと思うけど

血殺「おつ、良いなそれ」

円「何！？あの眼帯娘！？ かつわいいつ！」

円の気持ち悪い台詞に俺以外の全員がひいた。

血殺「止める円。あれば俺の女だ」

円「じゃあそこのフランス人の娘！」

標的はシャルへと変更された。

つーか、よくわかつたな。フランス人だつて

血殺「あれも俺の女だから無理だ」

円「お前にはすでに四人いるだろ！」

血殺「アイツらは別だ。あれば女だが人ではない」

円が言つてるのは朱雀たちのことだ。

円「まあ、俺にもいるからいいけど」

血殺「なら、言つな」

円「へいへい」

血殺「話を戻すか」

結局、メイド喫茶になつた。

### 第三アリーナ

血殺「さて、久しぶりにやるか」

円「ああ、そうだな」

俺も本気で行くか

血殺「朱雀展開！」

円「白帝展開！」

白帝は白銀のカラーリングがしてあり、展開される甲層は腕と足だけだ。理由は沢山あるが、一番の理由は軽量化だ。円の最初の機体・黒帝は遅すぎたため、高速移動の白帝が生み出された。

血殺「行くぞ」

円「来い」

”レッドライズ“ & ”ハ刀流“

円「いきなり”レッドライズ“に”ハ“か。やけに本気だな」  
血殺「相手がお前だからな」

円「そうかい。なら”ライトスピア“」

円は電撃を帶びた槍を展開する。

”ライトスピア“はシールドを無視して、直接甲層を叩く武器だ。場合によつちやあ、肉体へのダメージも起こる可能性がある

血殺「スピアだけでいいのか?」

円「ああ」

血殺「そう」

刹那、朱雀の超加速により円の後ろをとり斬りかかる。

円「あまいー！」

それを防ぐ円。

血殺「あまいのはそつちだ」

かかさず、全てのレッドライズで円を狙い撃つ。

円「忘れたのか血殺。白帝にビームが利かない」とを

そひ、白帝の甲層に当たつたビームは全てが跳ね返される。

血殺「だが、ビームを跳ね返してゐる間は動けねえだろ」

八刀流壱ノ型”神滅死“《かみほろぼし》

”神滅死“は相手の両手両足に剣を刺す技。  
俺が一番嫌いな技。何故かつて？ そりやあ、外したら自分がガラ  
空きだから

円「踏み込みがあまい」

攻撃を簡単に防ぐ円。

スピアを弾き、距離をとる。

血殺「これじゃあ、拉致が空かねえ」

円「やつぱりやるしかねえか」

血殺、円「セカンドシフト」

第一形態になつた朱雀には足に鳳凰<sup>ヒナギク</sup>という多機能武装足がつづく。

白帝は手にサーベルクロード、脚に小型レールガンが十つ、さうに常に抜き出せる雪片に似た刀が二十ある。これが全てで雷電<sup>アーマード・キック</sup>と言つ。

血殺「いつ見ても飽きないね。それ」

円「そう?俺は鳳凰の方が飽きないけど」

血殺「ふうん」

終わりだよ円。ボルケーノ・炎弾

円「まだ終わらねえよ」

血殺「!?」

円は片手で一本の刀を持ち、後ろから狙い打たれたボルケーノを防いでいた。

円「今度はこっちから行くぜ」

結局のところ引き分けた。

血殺「あー、疲れた」

円「し、死ぬう」

疲れ切つてゐる俺たちの元にシャルとセシリ亞が駆け寄つてきた。

シャル「だ、大丈夫？ 血殺」

血殺「ああ、なんとか」

円「あ、さつきの娘」

娘って言つの止めろよ。オヤジくさいぞ

シャル「あ、僕はシャルロット・デュノア。よろしくね」

円「しかも一人称が僕なんだあ」

駄目だ。こりゃあ、もう直せない

セシリア「わたくしはセシリア・オルコットですわ」

円「オルコットってことはイギリス代表候補生か」

セシリア「わたくしをご存知なの？ まあ、そんなことは当然ですわね」

「ごめん。セシリア  
さつき俺が教えた

円「いや、ついさっきまで知らなかつた」

セシリア「なつ！」

血殺「ドンマイ。セシリア」

そんなことやこんなことを話している間に悪魔がやつてきた。

盾無「やあやあ、元氣してるかい？」

円「誰？あれ」

血殺「生徒会長だよ」

俺の能力を知つてゐる。数少ない人間の一人。

円「ああ、学園最強だなんだか言つてたな」

盾無「まあ、血殺くんには適わないけどね」

何を言つてんだか、この人は

血殺「盾無さん、一夏にシьюーター・フローを見せに来たんじゃなかつたの？」

盾無「あら、何でわかつたのかしら？」

血殺「知つてんだろ。俺が人の心を読めること」

まあ、言つても構わないだろ？

シャル「えつ！？」

セシリア「どうこう」とですの？

と思ったら、驚きを隠せていないシャルとセシリアがいた。

血殺「そのままの意味だ。俺には呪われた力があるんだ、時間を止めるサターン、空間操るジユピター、身体能力を格段に上げるマーズ、心を読めるマークьюリー、未来を予知するプルート、回復するスピードを早くするヴィーナス、そして全知全能のアース。この七つが俺が幼いころ植え付けられた力だ」

あと二つあるけど、言わなくて良いか

シャル「ねえ血殺、眼にあつた力はなんなの？」

血殺「あれはサターンとジュピターの二つ」

円「お前、眼潰したのか？」

血殺「ああ

何度も潰しても戻そうと思えば、戻せるけどね

円「ふうん。そう」

血殺「じゃあ、話を戻しておつやくやりますか」

セシリ亞「わたくしたちがやるのでは?」

血殺「そうだよ。セシリ亞、シャル、俺に円の四人で」

そう言つた瞬間、三人の顔が一変した。

円「げえ、マジで・・・?」

シャル「さすがに四人同時は僕でも難しくと思つけど・・・」

血殺「文句を言つてる暇があるならひとつとやらねば」

円「仕方ねーな」

円は相変わらず、やる気なし

セシリ亞「わかりましたわ」

シャル「頑張つてみるよ」

青竜をファーストシフトで展開

すぐに配置は決まった。

血殺『じゃあ、はじめますね』  
盾無『お願いするわ』

四機は右方向へ動き出しそれぞれの距離を保ちながら加速していく。

血殺『円、ちやんと避けるよ』

円『わかつてゐよ』

血殺『じやあ、行くぞ』

撃ち合いを始める俺たちに続きシャルとセシリ亞も射撃を始める。

なにやつてこのだ？アイツ

一夏が盾無とイチャつてこいる。否、一夏は盾無にからかわれている。だが

シャル『い、一夏…？』

セシリ亞『な、な、何をしてますの…？』

円『真面田に見ろ…』

血殺『馬鹿！止まんじやねえ…』

俺以外の三人は銃弾を浴びてしまった。

一夏も可哀想に・・・・・・・・・・・・・・

えへ、夏のものを出せなかつたのは理由がありまして。

原作に追いついてしまつたら使おうとこつ発想から夏は飛ばさしていただきました。

途中に出できた紅波円くんはハーマンさんから許可を得て一時的に出でています。

まあ、これからはちよくちよく更新しようと想いますが無理だと思ひますのでご了承ください。

## //ステコアスなシントニア（前書き）

えー、最近気付いたのですが

今までの話の誤字多っ！

なので誤字、脱字は直しておきました。

それから

PVが35000を越してました！！

皆さんありがとうございます！

このような駄作も時が経てばこんな風にもなるんですね～

まあ、自分はこれからも頑張ってこるので

応援よろしくお願ひします

## ミステリアスなシンボル

学園祭 当日

血殺「じゃあ円、手初通りよろしく」  
円「わかった」

今、俺と円は部屋で出し物の再確認をしていたところだ。

血殺「朱雀たちも頼むぞ」  
朱雀「わかつたわ」  
白虎「はいはい」  
青竜「了解」  
玄武「うん」

ちなみに、出し物は射的だ。だけど、商品は物じゃなくて

血殺「じゃあ一時間交代な」  
円「早めにようしな」  
血殺「わーつてる」

写真だ。

血殺、円「またな」

教室

血殺「ごめんみんな、少々遅れた」  
一夏「気にしないでくれ」

始まつてから十分遅れてしまつていた。

ラウラ「紅波はどうした?」

血殺「交代で部活の出し物を見る」

シャル「そういえば、血殺つて何部なの?」

血殺「来ればわかるよ」

来て欲しくねえなあ

竇「話が済んだら早く厨房に来てくれ

血殺「わかった。今行く」

厨房

血殺「えーと、注文は

チヨコレートパフェ、チーズケーキ、杏仁豆腐ついてザートばつか  
じゃん！ 太るぞ

血殺「そんじゃあ、始めるか」

一度に三つの料理をやつしていく。

血殺「ラウラ！ チヨコレートパフェとチーズケーキ、杏仁豆腐が  
出来たから運んでくれ」  
ラウラ「了解した」  
血殺「次は・・・・・」

乙

紙に書かれていたのは『執事に』『褒美セシト 織斑担当』と書いた文  
字だった。

数十分後

円『血殺、時間だ』  
血殺『わかつた』

走つて行けば三十秒ぐらいかな

血殺「纂」

纂「なんだ?」

血殺「交代の時間だから円と変わつてくる」

纂「わかつた」

血殺「じやつ」

## 部室

血殺「戻つたぞ」

朱雀「おかえり」

血殺「どのくらい来た?」

青竜「ざつと50くらいね」

まあまあの数だな

血殺「撃ち落としたのは?」

玄武「三人」

血殺「そのくらいか」

円なら、嫌がらないから大丈夫か

白虎「待合いの人気が一十人ぐらい」

血殺「わかつた」

一時間後

血殺「円、交代だ』

円『わかったよ。今行く』

血殺「円と代わるから」

朱雀「またね」

廊下

血殺「接触は出来たか?」

オータム

オータム「当たり前だ」

何時も通りの調子だ。

おそらく失敗するな

血殺「なら良い」

オータム「だが、企業の話をしたが聞く気すらなかつたぜ」

血殺「接触するだけでアイツは人と親しくする」

だから、俺のことも普通に信じてるからな

オータム「私が心配する必要はねえみてーだな」

血殺「仕掛けはこちらでしておいた。だが、厄介な奴がいる」

オータム「厄介な奴?」

血殺「更識盾無と言う女が目標にベッタリ付いているから気をつけろ」

まったくダルい女だぜ

オータム「お前は私の心配する必要はねえよ」

血殺「そうか。なら俺は戻るとしよう」

教室

血殺「鷹月さん。戻りましたよ」

鷹月「戻つて来たもんつたとこなんだけど、一時間くらい休憩しても大丈夫よ」

血殺「じゃあ、お言葉に甘えて休憩貰いますね」

男子更衣室に行つて仕掛けの確かめでもするか

黛「おーい、四死神くん~」

血殺「何すか? 黛先輩」

黛「写真貰えるかな?」

この人も暇だなあ

血殺「いいですよ」

黛「じゃあ、ツーショットね」

血殺「誰とですか?」

黛「この二人とよ」

出てきたのはシャルとラウラだった。

血殺「一枚ずつですか?」

黛「もちろん」

血殺「まあ、やるつて言つた以上はやりますよ」

一人目 ラウラ

ラウラ「お前とはずいぶんと身長差があるな」

血殺「俺は身長が小さめの方が好きだぞ」

自分よりデカいとなんか惨めだし

ラウラ「そ、そ、そ、うか、それならいいのだが・・・」

血殺「じゃつ、撮りますか」

ラウラ「うわわわわわっ! な、な、な、な、何をする!?」

俺がやつたのは紛れもなくお姫様抱っこと言つ奴だ。

血殺「良いじやん良いじやん。減るもんじやないだろ?」

ラウラは一体何を考えているんだか、心を読んだこっちが恥ずかしいぜ

ラウラ「お、お前がそいつのなり、し、仕方ない。す、少しひら  
いは良いだろ?」「うう

血殺「そう、別に無理にやる必要はないから下ろそつか?」

ラウラ「お、下ろすな! 絶対に下ろすな!」

血殺「わかったよ」

後々見た写真ではラウラは顔が真っ赤だった

二人目 シャル

血殺「メイド服も似合つな」

シャル「ほ、本当!?」

血殺「ああ、普通に似合つてゐる」

執事服もかなり似合つてたしな

シャル「そつかあ~」

撮影終了

血殺「さて、暇つぶしするか」  
盾無「盾無ねーさんの登場です」

いきなりかよ！ てかつ！

血殺「あんた、妹居なかつたつけ？」

盾無「居るよ~」

血殺「そつ、じゃあな」

あんまり長くこらへると疲れるから逃げようとしたらい

盾無「逃がせないわよ~」

先回りされた。

血殺「何の用ですか？」

盾無「生徒会の出し物に出来なさい」

血殺「拒否権は？」

盾無「ないわよ」

何時ものことか

血殺「出し物つて確か・・・シンチarellaの演劇でしたつけ？」

盾無「そうよ」

血殺「わかりました。出来ますよ

盾無「ありがと」

男子更衣室

血殺「よつ、一夏に・・・円もか」

一夏「なんだ。血殺も盾無さんによばれたのか!?」

血殺「まあ、そんなとこだ」

じゃなければこんな所に来やしない。

円「あの人は話して疲れるな」

やつぱり情報が物を言つた。この男子更衣室を使うのがわかつて良かつたぜ

盾無「一夏くん、血殺くん、円くん、ちゃんと着たー?」

一夏、血殺、円「「「・・・」」」

盾無「開けるわよ」

一夏「開けてから言わないでくだせ!よー!」

まつたぐだ。

まあ、相手するだけ無駄だ

盾無「なんだ、ちゃんと着てるじゃない。おねーさんがっかり」

一夏「・・・なんですか

ただの変態だな

血殺「つーか、何しに来たんですか?」

盾無「はい、王冠」

血殺「そろそろですか？」

盾無「ええ、そろそろよ。ああ、台詞はアドリブでお願いね」

血殺「はいはー」

台詞なんて無いくせに

#### 第四アリーナ

ブザーが響き渡り、照明が落ちる。

するすると幕が上がりていき、アリーナのライトが点灯する。

盾無「むかしむかしあるといひ、シンデレラといつ少女がいました」

俺、円と一夏は舞踏会アリーナへと向かつ。

盾無「否、それはもはや夕前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことわざいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らを呼ぶにふさわしい称号……それが『灰被り姫』！」

それって『魔女』と書いてシンデレラの間違いだろー）

盾無「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちのよるがはじまる、

王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会とこづなの死地に少女たちが舞い踊る！」

訂正、吸血姫または、処刑姫の間違いだつた

一夏、円、「は、はあつ！？」

鈴「もらつたあああ！」

鈴が短剣で一夏に斬り掛かつた。

血殺「危ねえ一夏！」

俺はとつさに一夏を蹴り飛ばした。

一夏「サンキュー。血殺」

血殺「どういたしまして」

円「じうやう、俺と血殺は暇人のようだ

血殺「みたいだな」

まだ不十分だが、結構な情報は入つてくるな

一夏「おいーそれって酷くねえーか！？」

円「よそ見してる暇ねーぞ」

鈴の猛攻を避ける一夏だが、さうにセシリ亞まで介入してきた。

ふうん。そう言つことか

血殺「一夏ー なんで鈴とセシリ亞がお前を狙つているのかわかつたぞ」

一夏「なんでだ？」

血殺「この演劇で王冠を取つた奴はその王冠の持ち主と同室になれるんだ！」

一夏「だからってなんで俺！？」

血殺「自分に聞け！」

この唐変木がつ！

円「血殺！危ねえ！」

血殺「！？」

俺の王冠を狙つてきたのはラウラとシャルだった。

ラウラ「そいつをよこせ！」

血殺「嫌だよ！ 電流が流れるんだろ！」

痛いのは嫌だからな

シャル「大丈夫だよ。痛くしないから」

血殺「いやいや 電流が流れる時点で痛いだろ！」

笑顔で何言つてやがんだよ！

ラウラ「つべこべ言わずにそいつをよこせ！」

血殺「円！ 王冠を交換してくれ！」

おつ、王冠を交換とか我ながら巧いな

円「わらいな血殺。もう一夏と交換しちまつた」

血殺「はあつ！？」

な、なんだとおおー！

一夏「わるい血殺」

ラウラ「残念だったな血殺！ そいつは貰い受けれる」

血殺「やるかよ！」

再びアナウンスが流れ始めた。

盾無「只今よりフリーントローの方の登場です。皆さん、残りの王冠を頑張つて取りましょー！」

血殺「このタイミングでーー？」

残りの王冠つて言つたつて俺のしかねえぞ！

盾無「ちなみに王冠を私のところまで連れてきたらその一人は強制的に付き合つてもらいます」

血殺、一夏、円「「「…………まあーー？」」

その台詞を聞き『彼氏募集姫』『シンデレラ』が大量に湧いてきた。

篠「一夏ー 私と一緒に来い！」

血殺「ちひーー！」

わざわざいじなことまでしてくるなんて予想外だぜ

血殺「おーー一夏ー そこ動くんじゃあねーぞ」

一夏「お、オウ！」

もう少し待てば、お前を救ってくれるぜ。ヒヒヒヒヒ兵器からな

血殺「つたぐ、だりいつたりありやしねえ」

円「なら、早く切り上げよつ」

血殺「使うのか？」ムーンを

俺はその後、使って大丈夫なのかよと付け加えた。

円「ああ！」

血殺「それじゃあ、俺はお先に」

円「またな」

一夏が居ないといふ」とまは上手く連れて行つたな

血殺「俺も行くか

### 男子更衣室

盾無「あはっ。何も露出趣味や嫌味でベラベラと自分の能力を明かしているわけじゃないのよ？まつきりいふ言わないと、驚いた顔が見られないもの」

オータム「ぐ・・・がはつ・・・・・。まだ・・・・・まだだ！」

壁越しから聞こえたのはオータムの声と盾無の声だった。

聞いた感じは失敗したな

血殺『帰還しろ。オータム』  
オータム『仕方ねえな』

盾無「いいえ、もう終わりよ。 ね、一夏くん?」

一夏「来い、白式!」

剥奪剤リムーバーで剥いだ白式のロアは消え、一夏に白式が装着される。

オータム「なあつ! ? て、てめえ、一体どうやって」「  
一夏「知るか! 食らえ! !」  
オータム「ぐううううつ! !」

ちつ! 何やつてんだよ! 愚図が

血殺『仕方ない。アラクネは捨てて来い』

オータム『はあつ! ?』

血殺『戦力が減つてはこれから計画に支障が出る』  
オータム『わかつたよ』

数秒後に大爆発を起こし、廊下に逃げてきたオータムとすれ違う。

血殺「傷は癒やしてやるよ」

オータム「ふん。余計な世話だ」

血殺「そうかい。いつものところでな」

オータム「ああ」

オータムは去つた。

俺はナイフを取り出し、自分の身体を傷付けた。

血殺「ぐああああっ！」

盾無「その声は血殺くん！？」

盾無と一夏が廊下に出てきた。

血殺「女が煙の中から出てきた瞬間、俺をナイフで切りつけやがった」

一夏「血殺！ 大丈夫か！？」

血殺「少しヤバいな」

よし、上手く騙せた

盾無「それより血殺くん」

血殺「なんですか？」

盾無「これ、なーんだ？」

盾無が持っていたのは……

血殺「王冠……？」

盾無「うん、そう。これをゲットした人が持つてた男の子と同じ部屋で暮らせるっていう、素敵なアイテム」

血殺「知つてますよ。だから？」

何を言つてんだ？

盾無「ゲットしたのは、わ・た・し」

血殺「どうやら、やられたようだ」

行動を制限しねえとな

夜

オータム「てめえ！ どういうことだよ！？」

血殺「止めるオータム！ エムにも予想外の事だつてあるだろー。」

エムを壁に押さえつけているオータムを止める。

オータム「つーか、イブ！ 仕掛けはどうしたんだよー！？」

血殺「お前が派手に動き過ぎなんだよ」

オータム「んだとー！」

お前が暴れ過ぎだけだつつうのー

血殺「お前が愚かなだけだ」

オータム「だとしてもこいつだけは許さねーー！」

エム「・・・・・・・・」

オータムを貶したような目で見つめるエムにオータムはナイフを取り出す。

オータム「その顔に、切り刻んでやるー！」

？？「やめなさい、オータム。うるさいわよ

バスルームから出でてきたのは薄い金色の髪をした女性だった。

オータム「スコール」

スコール「怒つてばかりいると老けるわよ。落ち着きなさい、オータム」

何時もの口調で話をするスコール。

血殺「一つ聞かせる。スコール」

スコール「なにかしら？」

血殺「お前たちはこうなる」と予測していたのか？」

スコール「ええ」

やはり…………か

血殺「仲間に黙っている理由でもあつたのか？」

スコール「ないわ」

血殺「それから……お前たちが先生を殺したのか？」

スコール「…………」

は～ん。図星ね

血殺「なんでそれを」

スコール「そういえば、貴方には他人の心を読める力があつたんだつけ？」

血殺「質問しているのはこっちだ」

HSの展開は何時でも出来るようにする。

スコール「ええ、そうよ。私たち亡國機業がね」

血殺「・・・・」

スコール「それを知つてどうするの？ 私たちを殺す？」

そうだな。その内殺すさ

血殺「いいや、ただ聞きたかつただけだ。気にするな」

スコール「そり」

翌日

生徒会メンバー「みなさん、先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、投票結果の発表をはじめます」

ふ〜ん。一位はシンデレラで、一位が俺らのか

生徒会メンバー「一位は、生徒会主催の観客参加型『シンデレラ』

！」

結果を聞いて一度フリーーズ後、大ブーイングが巻き起こった。

生徒会メンバー「はい、落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏くんには、適宜各部活動に派遣します。男子なので大会参加は無理ですが、マネージャーや庶務をやらせてあげてください。それらの申請書は、生徒会に提出するようお願いします」

それを聞くなり納得の声が上がつていった。

血殺「つまり、一夏も地獄行きなわけか

俺と一夏の地獄生活のはじまり、はじまり。

白室

血殺『イブだ

スコール『何の用かしら?』

血殺『次の作戦は九月二十七日に決行しよう』

スコール『なぜ?』

血殺『当日にキヤノンボール・ファストって名のイベントがある』

スコール『わかつたわ』

血殺『ああ、それから』

スコール『なに?』

血殺『乱入させたらある奴を殺せとエムに伝えてくれ』

スコール『誰を?』

『白帝のパイロット紅波円をな殺血』

## //ステロидなシンクトレーラ（後書き）

今回は更新が早かつたですねえー。

俺さあ、テスト前なのにこれ書いてたんだよね。かなりヤバいかも

それと途中から気づいたんですけど、朱雀たちを回収するのを忘れてた。

まあ、咳きはこの辺にしまして

また次回でお会いしましょう。

静かなる足音（前書き）

題名意味わからないですよねー

俺もわからない。

まあ、本編はじめますか

九月

血殺「エムの奴、作戦は失敗したか。なにがち一姉の血族だ。笑わしてくれる」

俺は書類を取り出す。

血殺「日本代表か。俺には興味ないな」

書類を手荒く破つて部屋を出た。

食堂

血殺「早いな。みんな」

一夏「おう血殺、今日は遅いな」

血殺「政府から日本代表をやつてくれという書類が来てたから一応目を通してみたが、面白くなさそうだからやめた」

俺は『ファンタム・タスク』のメンバーだからな。今は違うけど

一夏「すげえな、代表つて」とは千冬姉と同じか

血殺「まあ、そんなどこ」

代表なんて所詮は見せ物だし、何処かの誰かさんみたいにキャーキャー騒がれるのは好きじゃないし。

ラウラ「血殺」

血殺「なんだ？」

ラウラ「お前はどうするのだ？」

血殺「なにを？」

ラウラ「キャノンボール・ファストに決まっている」

どうするって言つたつてなあ～

血殺「朱雀がセカンドシフトすれば、俺は絶対勝てるから大丈夫」  
ラウラ「どういうことだ？」

血殺「朱雀の”レッドライズ”を攻撃に使って第二形態時の鳳凰を機動に使えばいいし、もし、レッドライズが全て破壊されても鳳凰は武器としても使えるから大丈夫」

それに”リクトアーム”で敵さんからエネルギー補給も出来るし、炎射砲で攻撃も出来るから大丈夫だ。

ラウラ「便利だな」

血殺「オリジナルだけど、第五世代型だからな」

ラウラ「な、なんだと！？」

嘘はついてない。嘘は……ね

血殺「オリジナルだから、攻撃で消耗するシールドエネルギーが0なんだ」

ラウラ「便利過ぎではないか？」

血殺「まあな」

ちなみに、タジ飯は唐辛子である。

鈴「一夏、あんた生徒会の貸し出しあまだなわけ?」

急に話を変えたな。

一夏「ん?なんか今は抽選と調整してるので聞いたぞ」

鈴「ふーん……」

なんでもなさそうに言つて、一夏油の沢山乗つた麻婆豆腐を食べる鈴。

一夏「ああ、そう言えばみんな部活動に入つたんだって?」

第「私は最初から剣道部だ」

血殺「つい先日まで幽霊部員だったじゃん」

第「う、つるさこぞ! 血殺」

そんなに怒るなよ

一夏「鈴は?」

鈴「ら、ラクロスよ」

一夏「へえ! ラクロスか! 似合つやうだな!」

血殺「一夏、今のお前は最悪だぞ」

一夏は「棒を振り回すと「が」 と一瞬で思ったのだ。

鈴「なにがよ」

血殺「一夏のやつはなあ~」

一夏「頼む血殺! 言わないでくれ! 死んじまつ~」

一夏は席を立ち上がつてまで俺を止めようとした

血殺「わかつたよ」

鈴「怪しそうぎるわね」

からかいやすいな

一夏「で、シャルは？」

シャル「そ、その・・・・料理部

血殺「どんなの作つてんの？」

少し気になる

シャル「日本料理とかだよ」

血殺「へー、今度作つてくれよ」

シャル「う、うん！」

意外と上手そうだ

一夏「セシリ亞は？」

セシリ亞「英國が生んだスポーツ、テニス部ですわ」

血殺「テニスなら俺もできるぞ」

まあ、適當な知識だけだけどな

セシリ亞「では、今度一緒にいががですか？」

血殺「ああ、今度な」

英國にいた頃もやつてたのか、手ごわそうだ

ラウラ「ちなみに私は茶道部だ」

一夏「茶道部か。ラウラ、日本文化すきだよな。 . . . あれ？」

「そういえば茶道部の顧問つて . . . . 」

ラウラ「教官 . . . . いや、織斑先生だな」

ほう、顧問は同じか

血殺「日本文化か。俺はそのへんは全くの無知だからな」

ラウラ「私が教えてやろうか？」

血殺「頼むわ」

一夏「血殺つて日本のこと全然知らないよな」

そりやあ、ひどい目に散々遭つてましたから

血殺「確かに日本にいる時間が方が長いけど、ビヂカラかと言えばド  
イツにいた頃が楽しかった気がする」

一夏「そつなのか。ちなみに部活は？」

そつから来るか！ だから唐変木とか言われるんだよ

血殺「射撃部。正式な部員は俺と円だけ」

シャル「えつ！？ 部活つて最低五人は必要だよね？」

血殺「ああ、だから、五人以上はいるぜ」

うん。六人いるよ……ほとんど人間には程遠いけどね

一夏「円と一人なんじゃあ . . . . ？」

血殺「この際だから言つけど、俺のエヒつて人間なんだよね」

一夏「はあ？」

おい一夏、心の中では馬鹿かとかおもってんじゃね～よ

血殺「臨海学校で会った奴らだよ」

一夏「名前が違うぞ」

アホな面して言つてきた。

血殺「当たり前だ。そのままだつたら意味ないだろ」

一夏「確かにな」

何を言つてんだ?」  
「いつは

シャル「臨海学校つてことは魅永千鶴さん?」

血殺「察しがいいなシャルは。 その通りだよ。俺と一緒にいた四人は全員エジだ」

一夏「エジつて人間になるのかあ。俺のは夢の中だつたけどな」

ほひ、もうアイツと会つたのか。これは予想範囲外だつた。まあ、どつちと会つたかは知らないが

一夏「やつこえば、円はどうしたんだ? 回室だけど、最近見ないぞ」

血殺「束さんに呼ばれて白帝の最終調整だつて」

一夏「大変だな」

血殺「アイツは頭良いけど、アースはないからな」

まあ、それ以上に危険なムーンとサンがあるけどな

血殺「それじゃあ、お先に」

一夏「またな

白帝の改良とはな。やつてくれるよ、篠ノ之束

血殺『エムか？ イブだ』

エム『何の用だ？』

いつもの調子でプライベートチャンネルに出てきた

血殺『白帝が改良されるらしい』

エム『つまり、お前が教えた弱点はもつ無意味だということか？』

血殺『そうなるな』

エム『わかった』

部屋に帰つたら、まず落ち着けないからシャルの部屋にでも入るか

ちなみに今現在も例のルールは実行中。

シャルとラウラの部屋

血殺「ココアでも入れておくか」

三分後

ガチャツ

血殺「お帰り」

ラウラ「な、な、なんで、お前がここにいるー?」

すげー慌てた様子でラウラがドアの所で、俺を人差し指で差しながら言った。

血殺「逃げてきた」

ラウラ「あの女からか?」

部屋に入ってきたラウラ用に俺はココアをカッピにいれる。

血殺「そういうこと」

ラウラ「まあいい」

見た目は冷静だけど、心はいつもささくれるな

血殺「ほい、ココア」

ラウラ「ああ、すまない」

血殺「!! 来る」

プルートの予知がそう叫んでいる。

ラウラ「誰がだ?」

血殺「天敵」

「ラウラ「ドアを押せえろーー！」

俺とラウラはドアを押せられた。

盾無「あれ？ 開かない」

ドア越しから聞こえる悪魔の声を聞きながら、俺とラウラは息を殺し、ドアを押された。

血殺「！ 避けろラウラー！」

ラウラ「ーー？」

俺とラウラは同時に緊急回避を行つた。刹那、ドアが真っ一いつに裂かれる。

盾無「ヤッホー。ラウラちゃん」

ラウラ「ちゃん付けでよぶな！」

ちゃん付けぐらい良いじゃないか

シャル「血殺、ここにいたんだ」

血殺「もう帰ります」

ドアまで差し掛かった時だつた。

盾無「あら、帰つても私からは逃れられないわよ？」

血殺「そうですか。なら、今日は一夏の部屋で寝ます

盾無「夜は気をつけてね」

血殺「はーはー」

盾無から逃げるよつて去る。

シャル「血殺。ちょっとといいかな?」

廊下でシャルに呼び止められた。理由は大体分かっている

血殺「いいよ。週末は暇だし」

シャル「僕、なにも言つてないよ」

血殺「心の声を聞いた」

シャル「そ、そなんだ」

何故か、顔を真つ赤にしている。理由はよく分からない。

血殺「駅前のモニコメントに10時でいいか?」

シャル「うん」

血殺「じゃあ、そなつこと。またな」

帰つたら寝るか

## 静かなる足音（後書き）

え～。今回は実に短いです。

次の投稿は「データ」じゃないので、注意を

何でデータじゃないのかって？

俺が一度もしたことがないからに決まります。

ww

わ～ いつもひがめ ロ～（^ ^

設定！？（前書き）

え～。

この話は主人公とかのやつです。

読んだらわかるはず。

## 設定！？

四死神 血殺

年齢 15歳

身長 172?

座高 88?

体重 68?

容姿 まあまあの顔

好物 ゲテモノ類

嫌物 味が濃い物

必需品 右目に赤の眼帯 ヘッドホン（聴いてるのは魔王） サバ

イバルナイフ

専用機

朱雀、白虎、青竜、玄武、黄竜、その他四機（現在自ら製作中）

武器は多いから書きません！！

変な力

アース 全知全能 発動条件 自分が馬鹿だと認識することで発動

マーズ 肉体強化 発動条件 自分が弱いと自覚することで発動

マーキュリー 思考読取 発動条件 その人への想いが強いと発動可能（想いであれば何でもOK）

ブルート 未来予知 発動条件 未練があると自動発動

ヴィーナス 回復速度変更 発動条件 寿命が縮む（傷によって時間が変わる）

ジュピター 亜空間転送 発動条件 視力を下げることで発動（何時かは光を失う）

サターン 時間停止 発動条件 呼吸をしない

が主

紅波 円

身長 175

座高 93

体重 72

容姿 一夏と同レベぐらい

好物 女

嫌物 ゲスな男

必需品 絆創膏 ハンカチ ティッシュ リップクリーム 使い捨てコンタクト

専用機 白帝 黒帝（現在、コア自体が破壊されたから使用不可）

変な力

ムーン 人身操作 発動条件 相手が自分を見ていると発動可能（力を持つ人が死ぬと最期に触れた人間が力を得る）

サン 人身憑依 発動条件 人を殺した数だけ使用可能（ムーンと同じ転移方）

## 設定！？（後書き）

なぜ、設定を今回やったかと云うと  
樂だつて云うのが本音です。のほほんです。  
うーん。やうやうあの子だつそかなー。  
まあ、血殺くんが裏切つてから登場させます。  
では、また次回にお会いしましょう。

過去編 ～友だち～（前書き）

久しぶりですね～。

最近はいろいろとありすぎて  
大変だつたんですよ～。

んじゃ、本編スタート

俺のそばに一人の男がいた。

？？「せ、成功だ」

「」は夢の中か

？？「ついに、我々の計画は遂行される」

これは三歳の頃にあつた出来事か

？？「やつと、やつと我々の実績は認められる

嫌な夢だ。こんなのが夢に出てくるなんてな

壊してやる

グチャグチャグチャグチャ

？？「ぐああああああつーー！」

俺は初めての殺しを自分の手でやつた。

殺しなんて簡単だ

ただ相手の胸を手で貫いて、心臓を潰すだけ。

血殺「な、なんだよ。これ……………！？」

その頃の俺の視界は明らかにおかしかつた。

視界は赤と青に映つた。

血殺一ああああああああああああ

## 俺の、俺の身体を！

殺してやる！ 殺してやる！ 殺してやる！ 殺してやる！ 殺してやる！

殺してナガル

その頃の俺はあまりにも簡単に狂った。

？？「なんだ。何が起きた！」

人を殺す。

それは自分にとって、風船を針で割る並みに簡単で楽しかった。

俺は無闇に寄つてきた一人の男を殺した。

今度は首を一捻りしただけ。叫び声も出ないからとても便利。

血殺「皆殺しにしてやるー！」

俺は研究者も、同類も全員血祭りにあげた。

同類の中には「死にたくない！」とか「助けてくれ！」とか泣き叫ぶ奴もいたが、俺は「わかった。助けてやる」って言つて笑いながら殺して恐怖から助けてやつた。

研究者共の中には「すまなかつた」や「ごめんなさい」など言つてきたが、蟻を殺す勢いで殺していくた。

そして

血殺「お前が最後の一人だ」

最後の人間には残念な位、死にかけていた。

？？「殺したければ、殺してくれ。どうせ、僕は死ぬ運命なんだ」  
俺は殺そつと思つたが、殺せなかつた。まるで、自分を見ていろよ  
うで。

血殺「お前の名前はなんだ？」

？？「そんなことを聞いてどうするの？」

血殺「早く答える」

円「…………円、名字は知らないけど、名前は円」

これが、俺と円の初めての出会いだった。

血殺「お前は俺に似ている。だから、俺といいを出る」

円「その前に、君の名前は？」

血殺「血殺。 紅波血殺」

円「血殺くんね」

俺たちはすぐに出口まで走った。

邪魔な障害は全て破壊して。

血殺「なあ、円」

円「なに？ 血殺くん」

血殺「お前は辛い実験を受けたのか？」

友だちとして少し気になつっていた。

こいつはどんな実験を受けてきたのか。

円「うん。 死にかけたのが四つほど」

血殺「…………そうか」

羨ましかつた。

自分は数え切れない程の辛い実験を受けてきたのに  
こいつは四つしか受けてないことに

円「ねえ、血殺くん」

血殺「なんだ？」

円「僕はこれから、四死神つて言つ名字にする。四死神円」

血殺「そつか」

俺たちはやつとの思いで外に出た。  
外の新鮮な空気を堪能した。

血殺「なあ、円」

円「なに？」

血殺「お前たちの名字をお互いに交換しないか？ そうすれば、俺  
もお前もお互いの痛みを知れるかもしれないだろ？」

俺はただ、痛みを知つて欲しかつただけかもしれない。

円「良いね。じゃあ、今から僕は紅波円だ」

血殺「俺は四死神血殺だな」

円「うん」

俺たちはお互いの痛みを知つた。

数日後 森

血殺「腹減つたな」

円「そうだね」

この数日間、何も食べてない。  
誰とも会っていない。

血殺「どうせ、俺たちは死ぬ運命だつたんだな」

円「そうだね」

俺たちは死を決めた。

? ? 「大丈夫！？」

女の声なのはわかつたけど、  
氣を失つて、顔が見れなかつた。

血殺「どこだ？」

俺はベッドの上にいた。

見たことのない天井。甘い匂いがする。

？？「気がついた？」

血殺「お前は？」

クラリッサ「私はクラリッサ・ハルフォーフって言つわ」

これが、俺とクラリッサの初めての出会いだった。

クラリッサ「あなたは？」

血殺「四死神血殺」

クラリッサ「血殺ね。」飯持つてくるね

クラリッサは部屋を出て行つた。

そういうえば、円の姿が見えない。  
どこにいるんだ？

クラリッサ「持つてきたわよ」

血殺「ねえ、クラリッサ。円はどう？」

クラリッサ「円？」

血殺「俺と一緒にいた奴」

クラリッサがお盆に乗ったパンとシチューを横の小テーブルに乗せた。

クラリッサ「あなたしかいなかつたわよ

血殺「は？ 今なんて？」

「こつは何を言つてゐんだ？」

クラリッサ「だから、私が見つけたのはあなただけよ」

血殺「…………ウソ…………だひ…………？」

クラリッサ「ウソじゃないわ。本当のことよ」

俺は二ヶ月間、クラリッサの元で暮らして、ドイツを離れ、日本に帰つた。

過去編 ～友だち～（後書き）

久々に書いたんで、ちょっと疲れましたねえ。  
短いのにww

では、また次回

## 友達の友達の妹！？（前書き）

最近元気ないです。  
気力もないです。  
視力もないです。  
時間もないです。

あるいは溜まりに溜まつたスケジュール。

シユールの話は置いといて、

本編スタートです。

友達の友達の妹！？

血殺「ふああ 眠」

昨日の夜は散々だった。

盾無さんが布団の中に入ってきて寝てるんだよ？  
しかも、夢は悪夢だし

血殺「まつ、考えても無駄か」

現在の時間は八時半

約束は十時に駅前のモニコメント

血殺「部屋に戻つてタバコ吸お」

俺は部屋に戻つて一服し、ガムを噛みながら私服に着替え、一夏の部屋に戻つて感謝の置き手紙を置いて出掛けた。

現在九時。

シャルとラウラの部屋には既にシャルは居なかつたから、恐らく気合いが入りすぎて出掛けてしまったのだろう。  
俺も急がねば

？ ？ ？

(髪、変じやないかな？ もう一回見ておいたかな)

約束の時間より45分以上も前に着いたシャルロットは十一回目になる髪のチェックをする。

(うーん。 なんか決まんないなあ )

実際、それ程気にならない前髪のチェックを何度もするシャルロット。

(早く来すぎたかな)

約束の時間までまだ40分以上あつた。

(ふつ 。 気合い入りすぎかな。 ちょっとリラックスしよう)

？ ？ ？

血殺「やべえ、無駄な時間掛かっちゃった」

俺は駅前のモニコメントまでダッシュした。

ある生き物を連れて。

？ ？ ？

血殺「この辺だつたよな。 モニュメントって」

俺の眼はすぐにシャルを捕らえたが、様子がおかしかった。 チヤラ そうな男に絡まっていたのだ。

シャル「触らないでくれます？ そのきつい香水の匂いが移ると困るので」

チヤラ「 そ う な 男 1 「 な、 な、 な な つ ！ ？」

七？ ドラ ン ールでもあつめてんのか？

チヤラ「 そ う な 男 2 「 お、 おい！ 離しつ.....」

チヤラ そ う な 男 は 一 人 と も 気 絶 し て し ま つ た。 た か が 一 撃 の 手 刀 で。

血殺「 す ま ね え な 遅 れ ち ま つ た。 大 丈 夫 か ？」

シャル「 血 殺 つ ！」

いや、 そ んな に 喜 ぶ こと か ？」

そ の 時 、 俺 の 肩 に 乗 つ て い る あ る 生 き 物 が 俺 の 肩 を 突 つ つ い た。

血殺「よしよし。後で飯あげるからちょっと待つてな」

シャル「ち、血殺。

なに？ それ

血殺「なに？って、鳶だよ。よく空を飛んでんだろ？」

そう、俺の肩には体長60㌢くらい鳶が乗っている。

シャル「いや、そうじゃなくて。なんで鳶を連れてるの？」

血殺「弱つてたコイツがカラスに襲われてたから助けた。まあ、すぐに自然に帰すけどな」

シャル「そ、そうなんだ

」

シャルの顔は笑っていたが、引きつっていた。

血殺「ほら、行きな

鳶は勢い良く飛び去った。とびだけに

血殺「じゃ、行こうぜ？」

シャル「う、うん！」

血殺「顔赤いけど、大丈夫か？」

シャル「大丈夫！ へ、平氣！」

全く大丈夫そうには見えない。

血殺「じゃあ、どこからまわる？」

シャル「え、え、えっと、あそこ！」

え？ シャルロットさん？

女性用下着売り場どういうことですか？

まあ、ここは平常心を保とひ。

血殺「まつ、シャルもそういう物が見たい時期があるよな」  
シャル「い、ごめん！ 間違い！ 違うの！ 違うから！」

シャルは顔を真っ赤にして言った。

血殺「大丈夫大丈夫。俺もこういうのには慣れたから

慣れちゃいけないと思うが、アイシラのせいで慣れてしまった。

シャル「だ、だから、違うんだってばっ！」

血殺「ほらほら、さつさと入ろうぜ」

シャルの手を引っ張つて、俺たちは店内へ入った。

？  
？  
？

（うわ 綺麗な金髪…………。モデルみたい…………）

五反田蘭は店に入ってきた紺色の髪をした男性（血殺）と金髪の女性（シャル）  
ロット性に目がいつてしまつた。

血殺「選んでくれば？」  
シャルロット「別に良いのこ…………」

シャルロットはしぶしぶ店の奥へと向かつた。  
血殺はケータイを取り出した。

血殺「もしもし、一夏？」

（え？ 一夏さん？）

血殺「五反田蘭つて人知つてる？」

（わ、私の名前！ どうして！？）

蘭は手に持つていた下着を棚に戻す。

血殺「へえ～中学の友達の妹なんだ。 しかも、来年つむの学園に入学する。 ありがと、じゃあな」

血殺は蘭に近寄つた。

血殺「ねえねえ」

蘭「な、なんですか！？」

血殺「織斑一夏つて知つてる？」

蘭「は、はい、知つてますけど

「

（一夏さんの友達かな？）

血殺「自己紹介しておくか。俺は四死神血殺、一夏のクラスメートにして日本のIISの設計者だ」

蘭「四死神さん？」

血殺「血殺でいいよ。 名字は偽名だから」

(かつ)「いい人だなあ。一夏さんには勝てないけど

シャルロット「血殺。どうしたの? その娘」

蘭の後ろからシャルロットが現れた。

血殺「ああ、五反田蘭つて言つて一夏の友達の妹」

蘭「『』、五反田蘭です。よ、よろしくお願ひします」

シャルロット「シャルロット・デュノアです」

血殺「そうだ。君も一夏の誕生日プレゼント一緒に選んでくれない

?

蘭「は、はい! ゼひ!」

? ? ?

シャル「こんなのはどうかな?」

一夏『いや、ちょっと……』

血殺「お前はわがままだなあ」

TV電話で一夏に好みの腕時計を聞いているが、全く当たりが出ない。

血殺「もひ、テキトーで良いか?」

一夏『あんま派手じゃなければ……』

血殺「了解」

一夏に聞いても無駄だと呟いたので、電話を切った。

血殺「君も腕時計持つてんの？」

蘭「もつてないです。ケータイの時計で十分かなって」

血殺「好きなの選んできな。お金は気にしなくていいから」

正直、金は捨てるほどある。

蘭「い、いえ、わるいですから」

血殺「別に良いから。中学生の小遣いじゃあ、買えないだろ？」

蘭「そ、そうですけど」

血殺「それとも、中学生でバイトしてんの？」

蘭「し、してないですよ！」

おやおや、本気こしからやったかな？

シャル「これなんてどうかな？」

戻ってきたシャルの手には白の腕時計が握られていた。

シャル「シルバーより一夏にあつんじゃない？ ほら、ガントレットも白だし」

血殺「確かに。じゃあ、君もお揃いで良い？」

蘭「良いんですか？」

血殺「良いよ。大した出費じゃないし」



友達の友達の妹！？（後書き）

最近寝不足で頭が痛いです。

何時も寝不足なんですが、最近はより痛いです。

それはさて置き、次の話も一応テーートです。

では、また次回に

## ちっちえな（前書き）

PV数50000突破しました！

これも読者の皆様のおかげです。

自分のには駄作かと思っているのですが、  
意外と読んで頂けるようで何よりです。

これからも インフィニットストラーツ I.S. インフィニットストラーツ 収録の眼帯をよろしくお願いします。

では、本編開始。

## ちえな

血殺「昼飯どうする?」  
シャル「うん、どうよつか」

時間は十一時を回っていたから食事場所を探しているんだが、なかなか決まらない

血殺「君は? 何か食べたい物とかある? 蒜ねぎ?」  
蘭「い、いえ! 自分の分は出せますから!」  
血殺「じゃあ、出せないような所にしよつか。向こうのオープンカフェとか」  
蘭「あ、あそこ、結構高いですよ」  
血殺「入つたことあるの?」  
蘭「ど、ドリンクでだけ」  
血殺「じゃあ、決まりな」

俺は一人の手を掴み、オープンカフェに入つていく。

シャル「へえ、おしゃれだね。ここ。ちょうど今少しつて暖かいからロケーションも抜群だね」

ロケーションつてなんだ?

まつ、何でも良つか

店員「いらっしゃいませ」

血殺「今日のランチつてなんですか?」

店員「はい。今日のランチは蟹クリーミースパゲッティとなつてあります。デザートは梨のタルトです」

血殺「じゃあ、それを三つ」

店員「かしこまりました」

店員が帰つていった。

そして、何故かシャルと蘭がじーっと俺を見てきた。

血殺「どうかした?」

シャル「いや、手慣れてるから」

血殺「ああ、休日は散々こんな店に寄らされてたからな。嫌でも上手くなるぞ」

蘭「あ、あの、血殺さんつて、よくじついう店に来るんですか?」  
血殺「中学の頃は週2で行つてたよ。今でもわけありで月3ぐらいで言つてるよ」

蘭「そ、そつなんですか……」

血殺「この店は初めてだけだ」

まあ、スコールの護衛かつ、気分転換にだけな

蘭「あ、あの……」

蘭が気まづそうに話掛けてきた。

血殺「ん?」

蘭「お二人つて、付き合つてるんですか!?」

血殺「ううん。付き合つてないよ」

蘭「で、でも、仲良いですよね?」

血殺「まあ、少しな」

突然の発言でシャルは顔を真っ赤にして黙ってしまった。

その時、店内に銃声が鳴り響いた。

蘭「きやああああつ！」

もひ一度銃声が鳴り響いた。

？？「静かにしやがれ！」

ちつ、野郎どもは逃亡犯か。おおかた、銀行強盗だな。

強盗「黙つて俺たちに従え」

数は五。全員がハンドガンか。

こうなりや、賭だ！

血殺「ま、待つてくれ！ あんたたちの要求が知りたい！」

強盗「なんだ坊主。俺たちは黙つてろって言つたんだぜ？ わかつたら黙つて床に伏せろ！」

血殺「ちつちえな！」

俺は朱雀を展開する。

強盗「あ、I S ! ?」

血殺「死にたくなかつたら、黙つて銃を捨てろ」

朱雀の翼からは既に”レッドライズ”が飛ばされてあり、強盗どもを打ち抜けるようにしてある。

強盗「こ、こつちには人質が腐るほどあるんだぜ？ 見殺しにする気か？」

五人中二人が客に銃口を向けている。

血殺「残念でした。他人の命なんぞ俺には関係ない」

俺はミラージュモードでコールしていた”リアクトアーム ライトニンジングモード”で強盗どもの首を掴み、持ち上げた。

強盗「た、頼む！ 殺さないでくれ！」

血殺「大いなる宇宙の中の小さな生き物の小さな頼みか

ちつちえな

笑みを浮かべながら、気絶する程度の電気を走らせた。

その後警察を呼び、事件はけが人、死人は出なかつた。

事件も一件落着し、その後はランチを食べ、俺たちは店をあとにした。

今は帰り道の途中だ。

血殺「あ、そうだ」

俺はケータイを取り出した。

血殺「ねえ、キャノンボール・ファストの特別席のチケットあげるよ

蘭「い、良いんですか！？」

血殺「ああ。あげる人いないし、来年来るんだつたら視察ぐらいはしたいだろ？」

蘭「あつ、はい！ ゼひゼひ！」

蘭が取り出したケータイにダイレクト接続で、チケットデータを転送する。

蘭「あ、ありがとうございます！」

血殺「じゃあ、今度会つのは一夏の誕生日パーティーかな？」

蘭「は、はい」

血殺「じゃあな」

シャル「またね。蘭ちゃん」

ちつちえな（後書き）

うわっ！

今回かなり短つ！

てか、シャルの出番少なつ！

なんて、最後の方に思いました。

次回はちょーっと遅れるかもしれません。

では、また次回

## 模擬戦（前書き）

先ほどは申し訳ありませんでした。

こちらの手違いで中途半端な物を更新してしまいました。

本当にすみません。

本編は授業からです。

セシリアの話はどうしてもめり込みにくいので、カットしました。

まあ、私はセシリアのことをどうでも良いと思っているんで、勝手に生き、勝手に行動し、そして勝手に死ねって感じです。

ではでは、本編スタート

真耶「はい、それでは皆さーん。今日は高速機動についての授業をしますよー」

俺ら一組の副担任、山田先生の声が第六アリーナに響き渡る。

真耶「この第六アリーナでは中央タワーと繋がつていて、高速機動実習が可能であることは先週いましたね？ それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんには実演してもらいましょう！」

山田先生がそう言つてぱぱっと手を向けた先には、俺、セシリア、一夏、そしてまだ調整中の白帝をいじつている円がいた。

真耶「まずは高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したオルゴットさん！」

これまた、ゴツツい装備をしたもんだな。

四基の射撃ビット、腰部に連結した二基のミサイルビット。計六基を全て推進力に回すのが、このパッケージの特徴らしい。あまり良いとは想えないが、まあよく考えた方が

真耶「それと、通常装備ですが、スラスターに全出力を調整して仮想高速機動装備にした織斑くん！ まずは、このふたりに一周してきてもらいましょう！」

血殺「先生、俺らは？」

真耶「四死神くんたちは模擬戦をしてもらいます」

血殺「了解。円も聞いてたな？」

円「しっかり」

空中投影ディスプレイの方を向きながら、左手を挙げて、左右にひらひらと振る。

血殺「んじゃ、俺も作業に入るか」

千冬「その前に、四死神。お前に『おおへい』とじがある」

血殺「なんですか？」

千冬「黄竜はお前自身が使う『気がない』ので良いが、朱雀に関しては使用するな」

血殺「なんですか？」

千冬「あれの速度は異常だから、すぐに終わってしまうだろ」

なるほどね。あくまで公平にすることとか

血殺「分かりました。話は以上ですか？」

千冬「ああ、それだけだ」

襲撃時のメンバーを代えないといけないな

真耶「では、…………3・2・1・ゴーー！」

△図と同時に、一夏とセシリアは一気に飛翔する。

血殺「調整。終わったか？」

円「ちよつと終わったよ」

円は、ライスピレイを閉じて立ち上がる。

円「にしても、束さんも『んなのをよく作ったよね』

血殺「詳しく述べは聞いてないが、確か投劍タイプだつたか？」

円「そつ、好きなポイントに剣を出現させて、敵に当てるタイプだよ」

血殺「剣ビットが何も無い場所から現れて、突っ込む感じか？」

円「まあ、そんな感じ」

かなり厄介な物を作つてくれたな。束さん

真耶「はいっ。おつかれまさでした！ ふたりともすつじこ優秀でしたよ～」

一夏とセシリ亞が知らぬ間に帰つて来ていた。

真耶「では、四死神くんと紅波くんはスタートラインに着いてください」

血殺「一夏。チャンネル427にしておけよ」

円「あと、チャンネル202だ」

一夏「お、ねむ」

青竜セカンド・シフト

青竜のセカンド・シフトは銀の福音にかなり似ている。  
と言ひか、生き写しだ。

まあ、従兄機だから、仕方ないんだが……

俺と白帝のセカンド・シフトを展開した円がスタートラインに立つ。

真耶「では、はじめますよ！ 3、2、1、ゴー！」

青竜の翼を大きく広げ、急スタートする。

円は通常のスタートで、地道に加速していく。

円「そんなんじゃ、カーブで壁にぶつかるぜ？」

血殺「安心しな。ぶつかってオチのパターンは無えから

円「そうかい」

カーブ直前で、スラスターを四から一に下げ、曲がる。

カーブを抜けて、後ろを向きながら、言った。

血殺「お前こそ、事故るなよ」

円「何時の話だ？」

慌てて前を向くと、すでに円が居た。

血殺「瞬時加速か？」

円「事象干渉だ」

血殺「始めて聞く名だな」

円「いいつも始めてだろ？」

俺から見て、円の背の前に小さな円が展開される。

円“レガシー・エッジ”

刹那、円から無数のエネルギー刀現れ、俺に向かつて放たれる。

血殺“青き突風”

翼を羽ばたかせ、エネルギー刀を全て吹き飛ばす。

血殺「面倒くさい武器だな」

円「余所見は禁物だぜ」

円の視線の先には、巨大な実体剣が俺の頭上にある。

円「カラミティ・ソード」

青竜の翼に実体剣が落とされる。

つまりは、実体剣が直撃したって言つた方が早いな。

そして、たつた一撃でシールドエネルギーがゼロになつた。

青竜が青の粒子となつて散つた。

血殺「バリア無力化！？」

円「正解。残念だったな血殺」

即座に、玄武を展開し、ゆっくり地表に着地する。

俺の負けで模擬戦は終了した。

## 模擬戦（後書き）

円くんのHS・白帝はパクリを入れました。

元は「プレイブルー」にてぐる 13の武器です。

内容辺りは自分でお願いします。

話は変わりますが、鈴って「私を優先しなさいよ！ 幼なじみでしょ！」と言つ台詞が多くありますが、幼なじみじゃなかつたら、乙ですね？ ｗｗｗ

そんなことを先日、友達と話してました。

ついわけで、次回は「ユーロHS」を三機出します。

ではでは、また次回！

## 作戦開始（前書き）

久しぶりの投稿になつてしましました。

今回は少々意味の分からぬ文章があるかもしませんが、そのへんは大目に見てください。

てなわけで

本編スタート！

## 作戦開始

とうとう来てしまったキャノンボール・ファスト当口。会場にはかなりの人が押し掛けている。

一夏「おー、よく晴れたなあ」

血殺「天気とレースは別物だろ？ 晴れたところで調子が良くなるのか？ お前は」

一夏「そういう理由じゃないが、ただ気合いで入るよなってことだ」

俺はどういう反応を取ればいいのだろうか？

分からぬと言つより、分かりたくないの方があつてる気がする。

円「なあ、何時まで油売つてゐつもりだ？ 早くしないと怒られるぜ？」

血殺「ああ、そうだな」

一夏「じゃ、筈が来る前に行くか」

血殺「そうだな」

俺たちは参加者が待機していくピットに戻ることにした。

わあああ……！ と、盛大なる歓声がピットの中まで響く。

現在は一年の連中のレースが行われてる。

そして、ピットでは専用機が時機のIISを展開してレースに向けての準備をしていく。

血殺「なあ、円」

円「なに？」

血殺「事象干渉って使うのか？」

円「使わない。と言つより使えない」

血殺「何かあつたのか？」

円「白帝はまだ不十分な所が多いんだ。今回のレースも本当は出場しない予定だつたし」

血殺「はあ～ん。あれでまだ不十分ねえ」

円「仕方ないんだよ。事情があるんだから」

話を終えると、円は白帝を展開する。

改良版の白帝はシールドエネルギーが極端に少ない代わり、一度に消費するシールドエネルギーが通常のIISの約2倍少なくなる。

血殺「それにしても、セシリニアと鈴の装備は無駄にこついな」

鈴「ふふん。いいでしょ？」「いや…あんまり」「何ですって

！？」

円「まあ、良いじやん。人それぞれだろう？」

鶴「そうだな。戦いは武器で決まるわけではないしな」

シャル「みんな、全力で戦おうね」

今回の任務は円を上手く殺したことだ。あんまり素性をバラしたくはないなあ～

真耶「みなさんは、準備はいいですかー？ スタートポイント地点まで移動しますよー」

各々が頷くと、マークー誘導に従つてスタート位置へと移動する。

血殺『円。聞こえるか？』

円『聞こえてるよ。血殺』

血殺『作戦通りに行動を行えよ』

円『わーつてる。安心しろ』

血殺『……悪かったな。こんな思いさせちまつて』

円『珍しいな。お前がそんな事を言つなんてね』

円はプライベートチャンネルでクスクスと笑う。

円『なあ、血殺』

血殺『んだよ』

円『俺は……………つたよ』

血殺『そつか』

少しすると、大きなアナウンスが響いた。

『それではみなさん、一年生の専用機持ち組のレースを開始します！』

俺たちは各自位置に着き、スラスターを点火した。

超満員の観客が見守る中、シグナルランプが点灯した。

3……2……1……ゴー！

六機が勢い良く駆け出す中、俺と円はスタートしない。

血殺「セカンド・シフト。応龍機動」

多機能武装翼を展開する。  
アームド・ウイング

アームド・ウイングはアタック、ディフェンス、スピードの三つに分かれてい、モードによつて翼が変わるよつになつてゐる。

円「ツイン・リボルバー・イグニッショն・ブースト。シールドエネルギー圧縮」

両脚に付いたスラスターがキィイインッ！と音を立てる。

血殺「モード、スピード。シールドエネルギー収束」

黄金の翼が展開され、飛び立つ鳥の翼のよつて、翼をパタパタと上下に揺らす。

血殺、円「瞬時加速《イグニッショն・ブースト…》」

行き着いた先には、誰もいない。

円「あれ？ もしかして、もう行つちまつた？」

血殺「んなわけあるか！ まだ誰も来てないんだろ？ そのくらい察しろ」

円「仕方ない。一端止まろつ」

仕方なく止まることにした俺たち。それにしても遅い。

数十秒経つと、”衝撃砲”が壁に直撃する音が届く。

血殺「来るぞ」

円「ああ、分かつてる」

血殺「応龍。モード、アタック。エネルギー羽展開」

円「”ソードサマナー”。”レガシー・エッジ”。”カラミティ・ソード”。”展開”

数秒後、レーゲンとリヴィアイブが姿を現す。

血殺、円「散れ」

380

刹那、白銀の翼から一斉にエネルギー羽が放たれる。同時に、白帝の十八番。ソードサマナーの剣が放たれる。

ラウラ「なにっ！？」

シャル「うそつ！？」

反応しきれなかつた一人に剣が容赦なく、向かつ。

シールドエネルギーをある程度削り、再び前に加速する。

血殺「それじゃあ、逝くか？」

円「ああ、そうだな」

俺たちが一周目に差し掛かつた瞬間、円の左胸を何かが貫いた。

飛び散る鮮血。

騒ぎ出す観客。

そして

上空で飛翔する四つのHJ。

血殺「サイレント・ゼフィルス か

ラウラ「大丈夫か！？」

シャル「血殺！」

今度は駆け寄ってきたシャルとラウラにBTライフルの攻撃が降り注ぐ。

血殺「ラウラ！ シャル！」

一夏「大丈夫か！ ラウラ、シャル！」

後から一夏、筈、セシリ亞、鈴の四人が駆け寄る。

次の瞬間、再びBTライフルの攻撃が降り注いだ。

血殺「モード、ディフェンス！」

漆黒の翼が大きく翼を広げ、BTライフルからの攻撃を防ぐ。

セシリ亞「血殺さん！ あの機体はわたくしが！」

血殺「おい、セシリ亞！ 仕方ない、一夏はそこで二人の防衛を！」

鈴と筈は俺と一緒に連中の相手だ！」

一夏、筈、鈴「わかった！」

セシリ亞に続き、俺たちは飛翔する。

サイレント・ゼフィルスに向かう俺たちの前に三機のアンノウンが割り込む。

三機ともゼフィルス同様に、バイザーが取り付けられている。

血殺「ちいっ、邪魔者がつ！」

籌「仕方ない。押して通るぞ！」

鈴「面倒くさいわね！」

俺はエネルギー羽、籌は空裂のエネルギー帯、鈴は衝撃砲を放つ。同時に、緑の一機が前に出てくる。

出てきた緑の機体の操縦者は不適な笑みを浮かべ、右手を突き出す。

次の瞬間、俺たちは目を疑つた。

筹「なつ！？」

血殺「何が起きたんだ……！？」

鈴「どうなつてんのよー！」

再び鈴が衝撃砲を放つが、やはりいつきと同じだ。

攻撃が吸収された。

血殺「！！ 鈴！ 後ろだ！」

鈴「えつ……？」

刹那、鈴は後ろから赤い機体に斬られ、墜ちていく。

甲竜は光の粒子に戾らず、ボロボロと崩れ落ちてゆく。

血殺「そうか、分かつたぞ。第一。」

第「な、なんだ？」

血殺「この二機は俺が引き受ける。だから一夏に補給をしろ。」

第「だが、それではお前が！」

血殺「安心しろ。打つ手はある」

第「…………分かつた」

第は「クリと頷くと、一夏の下へ飛んだ。

血殺「さて、一丁やりますか」

## 作戦開始（後書き）

今回出てきたおーぐーの機体ですが、出番はかなり少ないです。  
とにかく、無いに等しいです。

そして、作者の気分で田くんを削除致しました。  
まあ、ちゃんと殺してやりますからそのへんはご安心を

ではでは、また次回

## フラッシュティー・バインド（前書き）

お久しぶりです。

いやはや、ちよいちよい文章の書き方を変えるだけでたくさんの方々に読んで頂けるとは有り難いですね。

まあ、そんなことはどうでも良いくとして

本編スタート！

## プラズマティー・バインド

血殺『はあ、なんで俺がこんな事をしないといけないんだ?』

コンタクトを開いて、四人に聞いてみた。

白虎『知らないわよ』

玄武『けど、一つだけ言えるのは』

朱雀『今の状況下では、私たちは戦うしかないと言つ事よ』

青竜『まあ、楽しくやりましょ』

田の前に居る、三人のアンノウンパイロットがニヤリと笑う。

血殺「一緒に散歩でもどうかな?」

何故、こんなナルシストっぽい上、気持ち悪い台詞を吐かないと  
けないのは、当の本人である俺にも分からぬ。

しかし、そんな甘い言葉とは裏腹に、すでに、肩のプラズマ砲と腰  
のレールガンの口が開いていた。

血殺「ちょっとくら、誰も居ない場所までね」

そう言い放ち、口の開いたプラズマ砲とレールガンを放つ。  
さつきと同じように、緑のIISが前に出てきて、右手を突き出し、  
攻撃を無力化する。

血殺「んなことは、詠めてんだよ」

”竜の尻尾“をホールし、緑のI.Sを弾き飛ばす。

次の瞬間、警告音が鳴り響く。

『敵I.S、後方よりエネルギー刃。刃長130』

”青炎龍刀“を開示し、エネルギー刃を受け止める。

血殺「…………やはりか」

エネルギー刃と交わっている刃が鋸びてゆく。否、風化していく。

これで、一機の特徴は分かつた。あとは、白いのみ。

能力が分かり、俺が油断した瞬間だった。

血殺「…………『ホツ』」

俺の右上半身を一角の槍が貫く。

ぐらりと、一気に歪む視界。

口から漏れ出す鮮血。

大量の出血で、身体の自由が思うように動かない。

右肺が潰され、呼吸もし辛くなる。

何より、酸素が足りない。

血殺「て…………めえ バ リ ア むこ う…………か…………か」

ゲホッ、ゲホッ、と咳混む度に口から大量の血が吐き出される。

血殺「さすが もと、代表…候補…生 だな」

青竜『『めん血殺。抑えられない』』

血殺「！？」

ヤバいな、あれが発動するぞ

暴走が

だんだんと意識が遠退き、闇に包まれていった。

？？？

青竜「あは、あははは」

不気味な声を発して笑う青竜。その声はまるで、楽しさでいるかのようだ。

青竜「やつと、やつとだ。やつと 曲の続きをが出来るー 曲、最後まで出来なかつた、戦いがつ！」

イグニッショーン・ブーストで、赤のエスの裏をとる青竜。その手にはすでに”竜の息吹”が展開されている。

青竜「ね？ 花蓮？」

”竜の息吹“による零距離射撃により赤のIISはアリーナのバリアーに叩きつけられる。

青竜「華音に、有華」

射撃と同時に展開した”竜の尻尾“で白と緑の一機を赤のIISの方へ弾き飛ばす。

三機がぶつかつた衝撃に耐切れなくなつたバリアーが割れた。

割れたバリアーの隙間から三機が逃げ、それを追いかけるよつて、青竜もバリアーの隙間から飛び出す。

青竜「……ぐつ、 うあああ……つ！」

暴走のタイムリミットの時間が尽き、呻き声と共に血殺と青竜の精神が元の体へと帰る。

血殺『全員集合だ。ここならバレることはないからな』

集合の命図と共に、先ほどまで戦闘を行つていた三機が現れる。三機のパイロットはバイザーを取り、それぞれの顔を曝し出す。

血殺「こ苦労だつたな。朱雀、白虎、玄武。そいつらは使い物になるか？」

赤いIISに乗つた朱雀が最初に口を開いた。

朱雀「まあまあ。乗り心地は悪くないけど、コントロールが難しいかもしない」

白虎「いや、おれはそれ程問題なし。ただ、武器のバリエーションが少な過ぎ」

玄武「僕のほうは、全くと言える程大丈夫」

続いて、白虎、玄武と口を開く。

血殺「なら、良しとするか。じゃあ、お前らはスコールの方に回れ。俺は戻つておくから何時もの場所で」

三人は「クリと頷き、それぞれのエリと共に、飛び去る。

血殺「そんじゃあ、帰るしますか」

血殺は鳥のように飛び立ち、バリアーの向いへと姿を消した。

## フラッシュティー・バインド（後書き）

### ウィッシュ

最近、レポートなどに追われる日々が続き過ぎてだんだん疲れました。

そんな疲れと闘つても疲れしか獲られないのは、とても残念です。

それはさて置き

11月11日のポッキー＆プリッツの日にポッキーとプリッツを食べ忘れた自分ですが、代わりにトップを食べましたww

まあ、かなりの二話です。

ではでは、また次回！

## 狂い出で歯車（前書き）

お久しぶりです。

今回は、まあ、長いよつで短い話です。

何時も通り、楽しくて読んでいただければ、恐縮です。

ではでは、本編スタート

## 狂い出す歯車

シャル「セーの！」

全員「「「誕生日おめでとう！」「」「」「

ぱあんぱあんっとクラッカーが鳴り響く。

一夏「お、おう。サンキュ！」

時刻は夕方五時、場所は織斑の家。

キヤノンボール・ファストでの戦闘を終えた俺たちは気を取り直して、誕生日パーティーをやっている。

円は集中治療室で今はお眠り中。

エム、スコール、朱雀、白虎、玄武は上手く逃げ切り、エムとスコールは何時もの場所で休憩。朱雀、白虎、玄武はすでに、待機状態に戻っている。

今回の戦闘で出てきた三機・フェニックス、バイコーン、ヨルムンガントも、今は待機状態だ。

一夏「にしても、この人数は何事だよ……」

確かに人数が多くすぎる。

笄、セシリ亞、鈴、シャルに、ラウラ。

そこで、先日知り合った蘭に、一夏の友人の五反田弾に御手洗数馬。さらに、生徒会メンバープラス黛先輩。

無駄に大人数が揃つたため、広くもないリビングがいっぱいぱいだ。

血殺「俺の寿命もあと数年が限界かな」

まあ、どうせ繰り返されるんだから別に構いやしないか。  
だが、その前にヤツらの頭を狩りたいな

そんなことを考えていると、蘭がケーキをお皿に乗っけて持つてき  
た。

蘭「血殺さん。ケーキ食べますか?」

血殺「あ、ああ、貰うよ」

乗せられているのは、俗に言つチョコケーキだ。ココアベースのス  
ポンジに、生クリームとチョコのケーキ。見た感じは結構手の込ん  
でいる物だ。

ケーキの出来はかなり良かつた。ふんわりとした食感のスポンジに、  
程よい甘さのクリームが何ともいえない。

血殺「うん、美味しい」

蘭「そうですか、お口にあつて何よりです」

血殺「ごちそうさま、ありがとな」

蘭「いえ、気になさらないで下さい」

お皿とフォークを蘭に手渡し、ケータイを開く。

TO 一夏

sub 誕生日プレゼント

TEXT お前を誘拐したファンタムタスクの発案者と実行犯が分  
かつた。

送信ボタンを押し、送信する。

数分すると、メールが帰ってきた。

from 一夏

sub 無題

TEXT 誰なんだ？

此処は敢えて暗号っぽくしておへか

To 一夏

sub Re

TEXT 111119999

自分の力で解いてみな

送信ボタンを再び押し、送信する。

今度はさつきより早く返事が返ってきた。

from 一夏  
sub Re2  
TEXT ヒントは？

おいおい、いきなりかよ。もひ少し考えよひが  
まつ、いいけど

TO 一夏  
sub Re3

TEXT 便利な物に必ず付いている機能を使えば解るぞ

そう、真実を知ることは本当に簡単なんだ。そして、真実と言ひつの  
は常に残酷なんだよ

???

一夏「お、よかつた。売り切れはないな」

一夏の家から最寄りの自動販売機。そこで一夏は足りなくなつたジ  
ュースを補給するために、缶ジュースを買つていた。  
当初、主役にそんなことさせんわけにはいかない！ と言つていた  
が、本人の頑固さで押し切り、今に至る。

(えーと、盾無さんが缶コーヒーで幕がお茶、鈴がウーロン茶でシ

ヤルがオレンジジュース、……）

全員分の飲み物を取り終えた一夏が歩き出したところで、ちょうど  
自販機の明かりが届かないギリギリのところに人影を見つける。

（なんだ……？）

ジュースを貰いに来たには少々離れすぎていた。  
かと言つて、友人と言う雰囲気でもなかつた

一夏が再び歩き出そうとするが、人影が一步前に出てきた。

人影はサイレント・ゼフィルスの搭乗者であるエムだつた。

一夏「ち、千冬姉……？」

エム「いや」

エムはうすら笑みを浮かべて口を開く。

エム「私はお前だ、織斑一夏」

一夏「な、なに……？」

エム「今日は世話になつたな」

一夏「！？ お前、もしかしてサイレント・ゼフィルスの

エム「そうだ」

エムはまた一步前へ踏み出す。

エム「そして私の名前は

織斑マドカだ

エムは無機質な銃口を一夏に向けながら、言葉を続けた。

エム「私が私たるためには……お前の命をもいつ

鈍く光を放つハンドガン。

パンツ！ と、乾いた銃声が闇に満ちた夜空に響き渡る。

パキッ！ パキッ！

放された銃弾が二人の間に割り込んだ影により、真つ一につき切られ、自販機にめり込む。

エム「ちつ……」

一夏「…………血殺か……！？」

割り込んだ影は右手にサバイバルナイフを手にした血殺だった。

血殺「…………お前、何しに来た。今は待機しているはずだろ？ 何故このような場に居る」

エム「……貴様に答える筋合いはない」

血殺「答える気がないのなら去れ、今なら見逃してやる。せつせと  
消えなければ…………殺すぞ」

その言葉には明らかに殺意が漏れていた。仲間で在ることをどうでも良いかのような

НДГ

エムは無言でサイレント・ゼフィルスを展開し飛び去り、闇へと姿を消した。

# 血殺 「はあ

一夏「なあ、血殺？」大丈夫か？」  
血殺「あ、ああ、だ、大丈夫だ。心配なさんな」「

眼帯を当てられていい右田を押さえながら、血殺は一夏のまつくれ、体を翻した。

血殺「一夏も大丈夫か？」

一夏ああ血糸のお陰で助か二たせ

血殺一そつが、そいつは良かつた

血殺は無理に作り笑顔をする。

一夏「なあ、血殺……お前、もしかして……」

血殺す……ああ、織班マドカのことは知っていた。かなり前からな

もう血殺の顔には、さつきの笑顔が消えていた。何時もとは別の、新たな顔がそこにはあつた。

血殺「それを知つてどうするつもりだ？俺を殺すか？それとも拷問？ああ、お前はチキン野郎だから、そんな事も出来ないか」

一夏「血殺、おま」

血殺「『お前は一体、何を知つているんだ？』かあ？教えてやるわけねえだろ。バーカ」

一夏は田の前に居る血殺の態度の変わりよつに、ただ呆然とするしかなかつた。

血殺「あは、あはははは…」

一夏「？？」

血殺「あはははは。もしかして、マジで信じた？あはは、本当に、お前はからかい甲斐があるな。本当のことを言つと、織斑マドカは昔の仕事仲間だ。ISに関わる…物の…な」

血殺は話を笑いでしまかし、言葉が濁りながら話を続けた。

血殺「帰るわ。……早く来い」

そう言い残し、血殺は来た道を引き返すのだった。

## 狂い出す歯車（後書き）

想像以上に、話が膨らまないです。

まあ、本文を書くのは、その時の気分なんで、仕方ないと思つて下さい。

と、言つ理由で、また次回！

ウイース

テスト前だつて言つのに小説を更新しているなんで正直ヤバいです  
よね……

んまあ、今回から番外編みたいな感じのやつです。  
正直言つと、作者の息抜きです。

では、本編スタート！

## Another World モード

俺が今まで繰り返した世界の数を数えておくと52回だ。

その全てで俺は母親を殺し、俺も何らかの死に方をしている。

大きく違うのは、専用機、男でIS使える奴、好かれる相手、俺の死に場所の四つのみ。それ以外はあまり変わらない日々だ。

変わるものあつたが、いくらやつてもほとんど同じだった。

そして、これは俺の間違った選択をしてしまった時の世界の話……。

AnotherWorld 1.1

血殺「…………」

当時七歳の俺はひたすらある巨大な画面に向かいつつ、手元にあるキーボードを叩いていた。

その画面上では、ある文字が浮かんでいた。

俺が篠ノ之束がIISを生み出す前に開発した最新鋭の兵器がこの零式だった。

零式はIISのプロトタイプにして、俺が生み出した最新鋭のIISよりもスペックが上回っていた。

血殺「これで……終わるのかな？ オレの旅は……」

不意に、女の声が俺に話しかけてきた。

？？「マスター。あまり詰め込みすぎると、身体に毒ですよ。IISにもマスターにも」

血殺「そんなことは分かっているつもりだ。桜」「二日も寝ないで大丈夫なのか？」

桜「私は元々、マザーポット生まれですからそういう面では大丈夫です。それに私は」

途中まで言いかけ、彼女はその口を閉じた。

そして、誤魔化すかのように再び口を開いた。

桜「私はマスターに救われた身ですから……」

血殺「……篠ノ之束のクローンとは言わないんだな？」

桜「…………」

桜は、ぱつぱつと悪しそうな顔をして俯いてしまつ。

血殺「すまない。桜がわざわざ話を逸らしてくれたのにな……」

桜「いえ、……マスターが気にすることはあります。それに事実ですか？」

彼女たち、クローンは七歳になるまでたつたの数日しかからない。  
彼女曰わく、篠ノ之束がそういう体の仕組みにしたらしい。

桜「とは言え、さつきのは流石に傷つきました。謝つてください」

血殺「いや、さつき謝つた気が……」

桜「乙女のハートはそんな安っぽい謝罪じゃあ、治りません！」

いや、お前のハートは何時もダイヤモンド並みに硬いだろ。なんて  
言つたら殺されるかもな

血殺「じゃあ、どうすれば良いんだよ」

桜「簡単なことです。私に

血殺「 私にキスしてください。は無しだ」

桜「ええ~」

血殺「ええ~、じゃねえ！ ほら、さつきと仕上げるぞ」

こいつは何かとそういうことをして欲したがる奴だ。根は良い奴なんだが、ちょっと抜け出る部分があるつて言つのだろつか。直球で  
言つとアホだ。

桜「そう言えば、マスター」

血殺「なんだ？」

桜「マスターは何故、無人島にラボを創るのですか？」

血殺「人の目が届く所に居ると、マズいからな。敢えて無人島にし  
ている」

桜の存在が誰かの目に入れば、ヤバい事になるのは誰にだって分かる。まだ篠ノ之束がIDSを発明してないとはいえ、発表されてしまえば、良くない方向へ進むのは確かなんだ。  
念には念を入れておくのが最適だと思う。

桜「マズいとは？」

血殺「奴は来年にE-Sを発表するんだ。発表後に動いたら、間に合わない」

桜「それもそうですね」

直後、桜は蜜柑が入るくらいの巨大なあぐびをした。

血殺「寝るか？」

桜「そうですね。そろそろ寝るとします。マスターは？」

血殺「俺ももう寝るよ。そろそろあの時期だからね」

俺は零式を待機状態に戻し、起動中の器具の電源を落とし終えた後、部屋をあとにした。

と、言つわけで今章から十一章ぐらいに渡つて血殺くんのアナザーワールド編です。

まあ実際、三・四ぐらいアナザーをやるんですが、自分の誕生日までにはアナザー編を終わらせたいです。

ちなみに、自分の誕生日は2月2日と、そろそろ2月3日です。  
それではまた次回！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7962s/>

---

IS(インフィニットストラトス) 返り血の眼帯

2011年11月29日21時52分発行